傳習錄註解　卷之上二

特257
189

始

特257
189

陸澄問。主一之功。如讀書則一心在讀書上。接客則一心在接客上。可以爲主一乎。先生曰。好色則一心在好色上。好貨則一心在好貨上。可以爲主一乎。是所謂逐物。非主一也。主一是專主一箇天理。

〔訓讀〕陸澄問ふ、『主一の功は、書を讀めば則ち一心、書を讀む上に在り、客に接すれば則ち一心、客に接する上に在るが如きは、以て主一と爲す可きか。』先生曰はく、『色を好めば則ち一心、色を好む上に在り、貨を好めば則ち一心、貨を好む上に在らば、以て主一と爲す可きか。是れ謂はゆる物を逐ふなり。主一に非ざるなり。主一は是れ專ら一箇の天理を主とするなり。』

〔註解〕これより以下は陸澄の錄する所である。陸澄は、字は元靜、又、原靜に作る。一の字は淸伯。浙江歸安の人。王子の高弟である。元靜は正德丁丑、進士と爲り、刑部主事を授けらる。大禮を議して合はず、官を罷めて歸りしが、後、其持論の誤れるを悔い、上書して曰はく、『臣、經術淺短なるを以て、雷同して妄に和す。之を臣が師王守仁に質し、始めて定論有り。臣、敢て自ら昧まさず、謹みて前愆を發す云云』と。因つて一時、官に復せしが、其後、時の人主には其の

昭和大系

反覆するを疑はれ、時人も亦曲げて時好に詔ふを議し、遂に鬱悒不遇に終る。○王文成公全集本には、初の陸澄問の章の前に、尙ほ『先生曰、持レ心如ニ心痛一、一心在ニ痛上一、豈有下工夫說ニ閑話一管ニ閑事上』といふ一章有り。『先生曰はく、志を持することは、心痛むとき、一心、痛みの上に在るが如くせよ。豈に工夫の、閑話を說き閑事を管する有らんや』と讀む。閑話は、むだ話。閑事は、むだ事、しなくとも差支無き事をいふ。又、王文成公全書本には、此一章は、後の問惟精惟一是如何用功の章の前に在り。此本には、後の薛侃所錄の中に、侃の問として之を載す。○陸澄問、主一之功、如讀書則一心在讀書上、接客則一心在接客上、可以爲主一乎。一本には、陸澄の陸の字無し。主一は一を主とする意。程子曰はく、『主一、之を敬と謂ひ、無適、之を一と謂ふ』と。朱子曰はく、『主一は只だ心專一にして、他念を以て之に雜へず。無適は只だ是れ走作せず、書を讀む時の如きは只だ書を讀み、衣を著くる時は只だ衣を著け、此一件を了りて、又、一件を做し、身、這裏に在れば、心も亦、這裏に在り』と。」陸澄は問うた、『主一の工夫は、例へば若し書を讀むときには、一心が書を讀む上に在り、御客に面會するときには、一心が御客に面會する上に在るやうであれば、主一と謂ふことが出來ませうか』と。○先生曰、好色則一心在好色上、好貨則一心在好貨上、可以爲主一乎云云。色を好み貨を好むは、孟子梁惠王下篇に、『寡人、疾有り、寡人、貨を好む』とあり、又、『寡人、疾有り、寡人、色を好む』とあるに本づく。物を逐ふは、自己の本心を差し置きて、外物を逐ひ求むること。二程全書の伊川語錄に、『心は出入無し。物を逐ふは是れ欲』とあり。譚書にも、『衆生顚倒して、己に迷うて物を逐ふ』の語あり。標註に、『案ずるに、此卷の下文の「梁日孚問ふ」の條に、薛侃、梁日孚の問答を錄し、此と同じくして、之に比して益〻詳かなり。當に併せ考ふべし』とあり。」先生は曰はれた、『お前の言ふ所は、まだ主一といふことは出來ないのである。若し色を好むときは、一心が色を好む上に在り、貨財を好むときは、一心が貨財を好む上に在るならば、それを主一と謂ふことが出來ようか。これは謂はゆる物を逐ふのであり、本心を差し置いて外界の物事を逐ひ求めるのであつて、主一では無いのである。主一とは、專ら一つの天理を主とすることである』と。○三輪執齋の說に、『陸澄のおもはくは、主一に非ずして、主事也。故に逐ヘ物と云ふものぞとの玉ふ。喩へば、上手の碁は、只だ心盤面一杯へ滿ちて、一手もむだ手無きやうにするは、主一なり。下手の碁は、只だ指し當る所に心取られて、是非其石を取らんとす。是れ主事なり。主一は心を主とす。主事は事が主となるなり。主一は心を手前へ置き、天理を主とすることなり』と云ふ。

問立志先生曰只念念要存天理即是立志能不忘乎此久則自然心中凝聚猶道家所謂結聖胎也此天理之念常存馴至於美

陸原靜所錄

大聖神亦只從此一念存養擴充去耳。

〔訓讀〕志を立つるを問ふ。先生曰はく、『只だ念念、天理を存するを要する、即ち是れ志を立つるなり。能く此を忘れず、久しければ則ち自然に心中凝聚す。猶ほ道家の謂はゆる聖胎を結ぶがごときなり。此天理の念常に存し、美大聖神に馴至するも、亦只だ此一念より存養し擴充し去るのみ。』

〔註解〕問立志、先生曰、只念念要存天理、即是立志云云。念念は一念一念なり、二六時中、間斷無きをいふ。心中凝聚すとは、心中に天理を存するの念が集注して散ずること無きをいふ。道家は神仙養生の術を說く、老子を祖とす。聖胎を結ぶ。標註に、『精神凝聚する處、猶ほ聖種を下すがごとし。五車韻瑞に、東軒錄を引きて云はく、「聖胎を養ふ」と。又仁王經に、「聖胎長養」と』とあり。聖人の種が我が體內に宿るの意。道家に云ふところの聖と、儒家に云ふところの聖とは、同じからざれども、其心持は同じき故に、ここに引用したのである。美大聖神は、聖賢が此道を自得したる妙境の階級を言ふ語である。孟子盡心下篇に、『欲す可き、之を善と謂ふ。諸を己に有する、之を信と謂ふ。充實する、之を美と謂ふ。充實して光輝ある、之を大と謂ふ。大にして之を化する、之を聖と謂ふ。聖にして之を知る可からざる、之を神と謂ふ』とあるに本づく。善德が我が身に充實したのは、美德の人である。美德が充實して外にあらはれて光輝あるは、大德の人である。大德にして自然に善く人を感化するのは、聖德の人である。聖德ありて至妙にして測られざるものが神人である。馴至は漸漸に至るをいふ。存養は、孟子盡心上篇に、『其心を存し、其性を養ふ』とあるに本づく。擴充は、おしひろめ、みたすこと。孟子公孫丑上篇に、『凡そ我に四端有る者、皆擴めて之を充たすを知る』とあるに本づく。」陸澄は志を立てることを問うた。先生は曰はれた、『只だ念念、二六時中、間斷無く、天理を存して失はぬやうに心懸けるのが、即ち志を立てるのである。能く天理を存することを忘れずして、久しきを積むときは、自然に天理が心の中に凝り聚まるのである。ちやうど、道家にて聖胎を結ぶといふのと同じである。此天理の念が常に存して間斷無きときは、漸次に美德・大德・聖德・神德に至るのであるが、これ亦、只だ此一念から天理を存養して擴大充實したのである』と。

日間工夫覺紛擾則靜坐覺懶看書則且看書是亦因病而藥。

〔訓讀〕日間の工夫、紛擾を覺ゆれば則ち靜坐せよ。書を看るに懶きを覺ゆれば則ち且く書を看よ。是れ亦、病に因りて藥するなり。

〔註解〕此は王子の語である。傳習錄の語錄の中に、冒頭に『誰曰』と記して無い者は、すべて王子の

語である。此後、一一、註せず。○日間工夫覺紛擾則靜坐云云。日間は日常、日ごろの意。紛擾は紛亂混雜の意。靜坐は、一の精神修養の工夫にして、二程子も之を奬勵したのである。蓋し禪宗より得來れるものである。近思錄存養篇に、『謝顯道、明道先生に扶溝に從ふ。明道、一日、之に謂ひて曰はく、「爾が輩、此に在りて相從ひ、只だ是れ顒の言語を學ぶ。故に其學、心口、相應ぜず。盍ぞ若ひて之を行はざる。」請ひ問ふ。曰はく、「且く靜坐せよ。」伊川、人の靜坐するを見る毎に、便ち其の善く學ぶことを嘆ず』とあり。書を看るは、書を讀むこと。」日常、工夫を爲す時に當つて、心の中に紛亂混雜を來すときは、靜坐するが善い。讀書することを懶いやうに思ふときは、讀書するが善い。これ等の方法も亦、病氣に因りて藥を用ふるのである。○標註に、『是れ乃ち克己の實功にして、惟だ之を靜坐讀書に施す可きのみに非ず、日用の爲す所、當に皆此の如くなるべし。然れども其の「書を看るに懶きを覺ゆれば則ち書を看よ」と謂ふは、蓋し惰心生ずる者に就きて之を言ふなるのみ。人の精力は限有り。之を養ふ所以を知らずして、文字を貪り看て以て病を致す者は、又、此類に非ず』とあり、又、『案ずるに、近思錄に、「問ふ、目、尖物を恐る。此事、放過するを得ずと。曰はく、便ち與に克下せよ。室中、率ね尖物を置き、須く理を以て勝つべし。他の尖、必ず・人を刺さざるなり。何の畏るることか之れ有らんと。」是れ其意は同じからずと雖も、其の功を用ふる處は、實に異なる無し。亦、以て良法と爲す可し』とあり。又、傳習錄筆記に、『此條、面白きことなり。紛擾なる時靜坐する、喩へば心神散亂し、心、舍を守らざるの病に、辰砂・茯神・收斂の藥を用ふるが如く、書を看るに懶ければ則ち且く書を看るは、熱は熱に因りて用ひ、寒は寒に因りて用ふるの療治なり。湯治して湯あたりし腹痛などする時は、其湯を飲めば治る者なり。其物を以て其物を解するの方なり。痛ある處へ灸をすゑるも、此類なり』とあり。

處朋友務相下則得益相上則損。

〔訓讀〕朋友に處するに、務めて相下れば則ち益を得。相上れば則ち損す。

〔註解〕處朋友、務相下則得益、相上則損。朋友に處するは、朋友に交はること。相下るとは、人と交はりて謙遜なること。相上るとは、凌ぎ合ひて驕慢なること。」朋友と交はるには、務めて謙遜にして相下るときは、益を得るのである。之に反して驕慢にして凌ぎ合ふときは、損を招くのである。○標註に、『第三卷の「先生曰はく大凡朋友」の條、同じき下文の「凡そ朋友」の條、朋友の交道を說くこと、親切著明なり。并せ案ずれば交〻盡く』とあり。

孟源有自是好名之病。先生屢責之。一日警責方已。一友自陳曰

陸原靜所錄

來工夫請正。源從傍曰。此方是尋著源舊時家當。先生曰。爾病又發。源色變。議擬欲有所辯。先生曰。爾病又發。因喩之曰。此是汝一生大病根。譬如方丈地內種此一大樹。雨露之滋。土脈之力。只滋養得這箇大根。四傍縱要種些嘉穀。上面被此樹葉遮覆。下面被此樹根盤結。如何生長得成。須用伐去此樹。纖根勿留。方可種植嘉種。不然。任汝耕耘培壅。只是滋養得此根。

〔訓讀〕　孟源、自ら是とし名を好むの病有り。先生屢〻之を責む。一日、警責方に已む。一友自ら日來の工夫を陳べて正を請ふ。源、傍より曰はく、『此れ方に是れ源が舊時の家當を尋著す。』先生曰はく、『爾の病又發せり。』源、色變じ、議擬して、辯する所有らんと欲す。先生曰はく、『爾の病又發せり。』因つて之に喩して曰はく、『此は是れ汝が一生の大病根なり。譬へば方丈の地內に此一大樹を種うるが如し。雨露の滋、土脈の力、只だ這箇の大根を滋養し得。四傍に縱ひ些の嘉穀を種ゑんと要するも、上面は此樹葉に遮覆せられ、下面は此樹根に盤結せらる。如何ぞ生長し得て成らん。須く此樹を伐り去り、纖根をも留むる勿きを用ふべし。方に嘉種を種植す可し。然らずんば、任ひ汝耕耘培壅するも、只だ是れ此根を滋養し得るなり。』

〔註解〕　孟源有自是好名之病、先生屢責之云云。孟源は、字は伯生、滁州の人にして、王子の弟子である。此章は陸澄の錄する所にして、友人は總て字を書すべきに、ここに孟源と名を書したるは陸澄よりも後輩なるが故であらう。自ら是とすとは、自ら己の爲す所を是とするなり、うぬぼれ也。名を好むとは、名譽を好むなり。虛榮心の一種なり。日來は近ごろ。正を請ふは、王子の質正を請ふをいふ。此れ方に是れ源が舊時の家當を尋著す。家當は家財道具をいふ、俗語なり。此は丁度自分が昔の道具を尋ね得た、と云ふことにて、彼は自分が嘗て爲したる工夫と同じ工夫を爲して居る、との意である。一說には、此句を『此れ方に源が舊時の家を尋著して當つ』と讀む。此れは丁度自分が昔住居したる家を尋ね當てた、との意にて、畢竟は同じ意味なれども、前說、可なるべし。議擬は、意中に將に何とか言はんとして未だ發し得ざる態度をいふ。どぎまぎすること。方丈は四方一丈の廣さ。滋は、うるほひ。土脈は土地の脈絡。土質の意。嘉穀は、善き穀物。盤結は、わだかまり結ぶ。纖根は細き根。耕耘は、たがやしくさぎる。培壅は、つちかふ。』孟源は、自ら己の爲す所を是として名譽を好むの病が有つたので、先生は屢〻之を責めなされた。ある日、先生が孟源を警め責めなされて丁度終つたところへ、一人の友人が自ら近頃の工

夫の樣子を述べて、先生に是正を請うた。すると、源は傍から差し出口をして曰つた、『此れは丁度源が以前に工夫したのと同じ事を工夫して居るのです』と。すると、先生は曰はれた、『お前の病氣が又起つた』と。源は、顏色が變つて、どぎまぎして、何か辨解しようとした。すると、先生は曰はれた、『お前の病氣が又起つた』と。そこで源に諭して曰はれた、『これはお前が一生の大きい病氣の根本である。譬へば四方一丈ばかりの狹い土地に此一本の大きい樹を種ゑて居るやうなものである。雨露の潤ひや、地質の力は、ただ此の一つの大きい根を養ふのである。そこで、此の大きい樹の四方に、たとひ少しばかりの嘉き穀物を種ゑようとしても、上の方は此樹の葉に遮り覆はれ、下の方は此樹の根にはびこられて居るので、嘉き穀物はどうして生長することが出來ようぞ。是非とも此樹を伐り棄てて、小さい根をも殘して置かぬやうにして、始めて嘉き種を植ゑることが出來るのである。然うでなければ、たとひお前が如何にたがやし、くさぎり、つちかふとても、ただ此樹の根を養ふに過ぎないのである』と。○傳習錄筆記に、『此條、至極面白きことなり。喩もよき喩なり。方丈の地内を心の方寸に喩へ、大木を自ら是とし名を好むの病に喩へしなり』とあり。

問。後世著述之多。恐亦有亂正學。先生曰。人心天理渾然。聖賢筆之書。如寫眞傳神。不過示人以形狀大略。使之因此而討求其眞。耳。其精神意氣。言笑動止。固有所不能傳也。後世著述。是又將聖人所畫。摹倣謄寫。而妄自分析加增。以逞其技。其失眞愈遠矣。

〔訓讀〕　問ふ、『後世の著述の多き、恐らくは亦、正學を亂す有らん。』先生曰はく、『人心天理渾然たり。聖賢、之を書に筆するは、眞を寫し神を傳ふるに、人に示すに形狀の大略を以てするに過ぎず、之をして此に因りて其眞を討求せしむるが如きなるのみ。其精神意氣、言笑動止は、固より傳ふる能はざる所有るなり。後世の著述は、是れ又、聖人の畫く所を將て、摹倣謄寫し、而して妄に自ら分析加增し、以て其技を逞しくす。其の眞を失ふこと愈〻遠し。』

〔註解〕　問、後世著述之多、恐亦有亂正學云云。此章は、後世の儒者の著述多く、議論益〻精密、分析益〻細微なるが如くにして、聖賢を去ること益〻遠きことを說くのである。後世は聖賢以後の世の意にして、今日以後の世の意にあらず。人心天理渾然たりとは、人の心と天の理と渾然として融合して一體となるをいふ。眞を寫し神を傳ふ。眞は肖像なり。肖像を圖寫して以て神彩を傳ふるなり。討求は、尋ね求むるなり。意氣は氣象。摹倣謄寫は、まねて書き寫すこと。」澄は問う

た、『後世になつて儒者の著述が多くありますが、これ亦正學を亂すの弊が有らうとも思はれますが、如何で御座いませうか』と。先生は曰はれた、『人心は本來天理と渾然として一體となつて居るのであつて、之を言語文章に言ひあらはすことは、出來ることでは無い。聖人賢人が之を書物に書きあらはされるのは、たとへば、肖像を畫いて其神彩を傳へるのに、形狀の大略を人に示すに過ぎずして、人をして肖像畫に因つて其眞相を尋ね求めしめるやうなものである。其精神氣象や言語動作の容態は、とても傳へることは出來ないのである。後世の儒者の著述は、又、聖人の畫かれた肖像畫を眞似して寫し、そして妄に自分勝手に分析して餘計な者を書き加へて、自分の技倆を逞しくするのである。眞相に遠ざかること益〻甚だしくなるのである』と。

問。聖人應變不窮。莫亦是預先講求否。先生曰。如何講求得許多。聖人之心如明鏡。只是一箇明。則隨感而應。無物不照。未有已往之形尚在。未照之形先具者。若後世所講。却是如此。是以與聖人之學大背。周公制禮作樂。以文天下。皆聖人所能爲。堯舜何不盡爲之而待於周公。孔子刪述六經。以詔萬世。亦聖人所能爲。周公何不先爲之而有待於孔子。是知聖人遇此時方有此事。只怕鏡不明。不怕物來不能照。講求事變。亦是照時事。然學者却須先有箇明的工夫。學者惟患此心之未能明。不患事變之不能盡。曰。然則所謂沖漠無朕。而萬象森然已具者。其言何如。曰。是說本自好。只不善看。亦便有病痛。

〔訓讀〕　問ふ、『聖人は變に應じて窮まらず。亦是れ預め先づ講求する莫からんや否や。』先生曰はく、『如何ぞ許多を講求し得ん。聖人の心は明鏡の如し。只だ是れ一箇明かなれば、則ち感に隨ひて應じ、物として照らさざる無し。未だ已に往きたるの形尚ほ在り、未だ照らさざるの形先づ具はる者有らず。後世の講ずる所の若きは、却つて是れ此の如し。是を以て聖人の學と大に背く。周公、禮を制し樂を作りて、以て天下を文にす。皆、聖人の能く爲す所なり。堯舜何ぞ盡く之を爲さずして、周公に待つ。孔子、六經を刪述して、以て萬世に詔ぐ。亦、聖人の能く爲す所なり。周公何ぞ先づ之を爲さずして、孔子に待つ有る。是に知る、聖人は此時に遇ひて、方に此事有るを。只だ鏡の明かならざらんことを怕れ、物の來るとき照らす能はざらんことを怕れず。事變を

講求するは、亦是れ照らす時の事なり。然れば學者は却つて須く先づ箇の明の工夫有るべし。學者は惟だ此心の未だ明かならざるを患へよ、事變の盡す能はざるを患へざれ。』曰はく、『然らば則ち謂はゆる、沖漠無朕にして、萬象森然として已に具はるとは、其言何如。』曰はく、『是說は本自ら好し。只だ善く看されば、亦便ち病痛有り。』

〔註解〕　此章は、聖人の心は明鏡の如く、物の來る有れば則ち之を照らすものにして、預め事變を講究して之に應ぜんとするにあらざることを說くのである。○問、聖人應變不窮、莫亦是預先講求否。陸澄は問うた、『聖人が如何なる事變に遇ふとも之に應じて困窮することが無いのは、豫め先づ事變を講究する所が有るのではありませんか』と。○先生曰、如何講求得許多、聖人之心如明鏡云云。聖人の心は明鏡の如しは、蓋し神秀禪師の偈に、『身は是れ菩提樹、心は明鏡臺の如し。時時に勤めて拂拭せよ、塵埃をして惹かしむる勿かれ』と曰へるより出でたのであらう。」先生は曰はれた、『どうして許多の事變を殘らず講究しておくことが出來ようぞ。聖人の心は、たとへば曇の無い明鏡の如きものであつて、只だ一つの鏡が明かであれば、物が來り感ずるに隨つてそれに應じ、如何なる物をも皆照らすのである。已に往つてしまつた形の影がまだ殘つて居り、まだ照らさない形の影が先づ鏡の上に具はつて居るといふ事は、決して無いのである。後世の學者の講究する所は、已に往つてしまつた形の影がまだ鏡に殘つて居り、まだ照らさない形の影が先づ鏡の上に具はつて居るやうな遺り方である。それ故に、聖人の學と大に違背するのである。周公は、禮を制し樂を作つて、天下を文明にされたのであるが、禮を制し樂を作ることは、聖人ならば、誰でも爲すことの出來る所の事である。然るに上古の聖人堯舜は、何故に殘らず此等の事を爲さずして、後世の周公を待たれたのであるか。孔子は六經を刪述して、天下萬世の敎訓を垂れられたのであるが、六經を刪述することは、亦、聖人の爲すことの出來る事である。周公は何故に先づ此事を爲さずして、後世の孔子を待たれたのであるか。堯舜の時には周公の爲したことを爲す必要が無く、周公の時には孔子の爲したことを爲す必要が無かつたからである。そこで聖人は此時代に遇うて始めて此事を爲すものであることを知るのである。只だ心の鏡の明かでないことを怕れるのであつて、事物の來るとき之を照らして順應することの出來ないことを怕れないのである。いろいろの事變を講究するは、心の鏡が事物を照らす時の事であつて、預め事變を講究するには及ばないのである。然れば學者は是非とも先づ心を明かにするの工夫を爲すべきである。學者は惟だ此心の未だ明かでないことを患ふべきであり、事變を殘らず講究することが出來ないことを患ふるに及ばぬのである』と。○曰、然則所謂沖漠無朕、而萬象森然已具者、其言何如。程伊川の語に、『沖漠無朕にして、萬象森然として已に具はる。未だ應ぜざるも是れ先なるにあらず。已に應ずるも是れ後なるにあらず』云云とあり。近思錄道體類に出づ。沖は虛しく、

漠は靜なる貌、無朕は幾微萌兆無きなり。虛靜にして何物の萌も無き處に、森羅萬象已に具はるとの意。』澄は問うて曰つた、『さうすれば、伊川先生の謂はれた「沖漠無朕にして、萬象森然として已に具はる」といふ言は、如何で御座いませうか』と。○曰、是說本自好、只不善看、亦便有病痛。先生は曰はれた、『この言は本善いのである。けれども善く解釋しないときは、亦病があるのである。若し心の鏡に形體を存して、萬象已に具はつて居るといふやうに解釋したならば、弊があるのである』と。

義理無定在。無窮盡。吾與子言。不可以少有所得而遂謂止此也。再言之。十年二十年五十年。未有止也。他日又曰。聖如堯舜。然堯舜之上。善無盡。惡如桀紂。然桀紂之下。惡無盡。使桀紂未死。惡寧止此乎。使善有盡時。文王何望道而未之見。

〔訓讀〕『義理は定在無く、窮盡無し。吾、子と言ふに、少しく得る所有るを以て遂に「此に止まる」と謂ふ可からざるなり。再び之を言ふこと、十年・二十年・五十年なるも、未だ止まる有らざるなり。』他日又曰はく、『聖は堯舜の如くにして、然も堯舜の上、善、盡くる無し。惡は桀紂の如くにして、然も桀紂の下、惡、盡くる無し。桀紂を して未だ死せざらしめば、惡寧ぞ此に止まらんや。善をして盡くる時有らしめば、文王何を以て道を望みて而も未だ之を見ざる。』

〔註解〕義理無定在、無窮盡云云。定在は定りたる在り處。」先生は曰はれた、『義理は、必ず此處に在りといふ一定の在り處は無く、此より先は無しといふが如く窮まり盡くることは無い。自分がお前と言ふに就きて、お前は、少しく得る所有りといふので、「義理は此に止まる、これ以上は無し」と謂ふことは出來ないのである。再び之を言ふこと十年・二十年・五十年するとも、未だ止まることは無いのである』と。○他日又曰、聖如堯舜、然堯舜之上、善無盡、惡如桀紂、然桀紂之下、惡無盡云云。標註に、『孟子盡心上に云ふ、「堯舜の知にして而も物に徧からざるは、先務を急にすればなり。堯舜の仁にして而も人を愛するに徧からざるは、賢を親しむを急にすればなり」と』とあり、又、『論語子張に曰はく、「子貢曰はく、紂の不善は、是の如きの甚だしからざるなり。是を以て、君子は下流に居るを惡む。天下の惡皆歸す」と』とあり、又、『孟子離婁下に、「文王は民を視ること傷むが如く、道を望みて而も未だ之を視ず」と。集註には、而は讀んで如と爲す。古字通用す。然れども王子の說く所は、恐らくは讀むこと字の如くならん』とあり。道を望みて而も未だ之を視ずとは、文王、道を求むること切にして、其心、遙に道を望みて而も未だ之を實に見ずとするを言ふなり。」先生は他日又曰はれた、『聖なること堯舜の如くであつても、堯舜の上

に、善は盡くること無く、これが最上といふ限は無いのである。惡なること桀紂の如くであつても、桀紂の下に、惡は盡くること無く、これが最下といふ限は無いのである。桀紂が若しまだ死ななかつたならば、惡はあれだけの事では無く、もつと多くの惡を行つたであらう。若し善に盡くること有り、限が有る者であるならば、文王は、何故に道を望んで而も未だ實に道を見ずと思うて居られたのであらう。善も限が無く、惡も限が無いものである』と。

問。靜時亦覺意思好。才遇事便不同。如何。先生曰。是徒知靜養。而不用克己工夫也。如此臨事。便要傾倒。人須在事上磨。方立得住。方能靜亦定。動亦定。

〔訓讀〕　問ふ、『靜なる時は、亦、意思の好きを覺ゆ。才に事に遇へば便ち同じからず。如何。』先生曰はく、『是れ徒らに靜養を知りて、克己の工夫を用ひざればなり。此の如くにして事に臨めば、便ち傾倒せんと要す。人は須く事上に在りて磨くべし。方に立ち得て住まり、方に能く靜にも亦定まり、動にも亦定まる。』

〔註解〕　此章は、事上に在りて練磨すべきことを說くのである。事上磨は、禪宗にて謂ふ所の動中の工夫といふものと相似て居るのである。○問、靜時亦覺意思好、才遇事便不同、如何。標註に、『案ずるに、原靜の工夫、毎に靜を好む。故に先生敎ふるに事上磨を以てす。第二卷の、原靜に答ふる書、以て見る可し。而して事上磨は、固より先生の家法なり』とあり。澄は問うた、『靜にして居る時には、亦、心地が穩かにして好きを覺えますが、一寸何か事に遇ふ時は、直に心地の情態が違つて參ります。如何したらば善いで御座いませうか』と。○先生曰、是徒知靜養、不用克己工夫也云云。克己は、論語顏淵篇に、『己に克ちて禮に復る』とあるに本づく。己は私慾である。私慾に勝ちて天理に復するの意である。靜にも亦定まり、動にも亦定まるは、明道先生の定性書の中の語。近思錄の爲學類に載す。』先生は曰はれた、『是れは徒らに靜にして心を養ふことを知れども、己に克つの工夫を用ひないからである。此の如く靜にして心を養ふのみで己に克つの工夫をしないときは、事に臨めば、忽ち心が動搖し傾倒するを免れないのである。人は是非とも事物の上に於て練磨すべきである。さうすれば、始めて心が立脚地を得て確と立ち住まることを得、始めて能く靜なる時にも心が安定し、動く時にも心が安定することが出來るのである』と。○劉宗周曰はく、『先生、又、個の克己を說く、卽ち理を存し欲を去るの別名』と。佐藤一齋曰はく、『靜時にも亦須く克己の工夫を用ふべし。事上に在りて磨く、尤も其の實際の處』と。

問上達工夫。先生曰。後儒教人。纔涉精微。便謂上達未當學。且說下學。是分下學上達爲二也。夫目可得見。耳可得聞。口可得言。心可得思者。皆下學也。目不可得見。耳不可得聞。口不可得言。心不可得思者。上達也。如木之栽培灌溉。是下學也。至於日夜之所息。條達暢茂。乃是上達。人安能預其力哉。故凡可用功可告語者。皆下學。上達只在下學裏。凡聖人所說。雖極精微。俱是下學。學者只從下學裏用功。自然上達去。不必別尋箇上達的工夫。

〔訓讀〕　上達の工夫を問ふ。先生曰はく、『後儒、人を敎ふるに、纔に精微に涉れば、便ち謂ふ、「上達は未だ當に學ぶべからず。且く下學を說け」と。是れ下學と上達とを分ちて二と爲すなり。夫れ目、見るを得可く、口、言ふを得可く、心、思ふを得可き者は、皆、下學なり。目、見るを得可からず、口、言ふを得可からず、心、思ふを得可からざる者は、上達なり。木の栽培灌溉の如きは、是れ下學なり。日夜の息する所・條達暢茂するに至りては、乃ち是れ上達なり。人安んぞ能く其力に預らんや。故に凡そ功を用ふ可く告げ語る可き者は、皆、下學なり。上達は只だ下學の裏（うち）に在り。凡そ聖人の說く所は、精微を極むと雖も、俱に是れ下學なり。學者、只だ下學の裏（うち）より功を用ひば、自然に上達し去らん。必ずしも別に箇の上達の工夫を尋ねざれ。』

〔註解〕　此章は、下學に於て功を用ふるときは、自然に上達す可く、別に上達の工夫を求むるを要せざることを說くのである。○問上達工夫、先生曰、後儒敎人、纔涉精微、便謂上達未當學、且說下學云云。下學上達は、論語憲問篇に、『天を怨みず、人を尤（とが）めず、下學して上達す。我を知る者は其れ天か』とあるに本づく。下學して上達するとは、下、卑近なる學を爲し、上、高尙なる處に達する意である。孔安國は、『下、人事を學び、上、天命を知る』と曰ひ、程子は、『學の要、蓋し凡そ下、人事を學べば、便ち是れ上、天理に達す』と曰つて居る。從來、灑掃應對進退の如き威儀動作を以て下學と爲し、誠意正心などの如き類は皆上達として居たのであるが、ここに載する所の王子の說は大に之と異なつて居る。これ亦王子の獨創の見處である。栽培は、うゑて、つちかふこと。灌溉は水をそそぎかけること。日夜の息する所は、孟子告子上篇に、『日夜の息する所、雨露の潤す所、萌蘖の生ずる無きに非ず』とあるに本づく。息の字には二義あり、生息と止息とである。ここは生息の意である。日夜の間に、物、皆、生長する所有るをいふのである。條達暢茂は、枝がのび葉がしげり榮ゆること。」澄は上達するの工夫は如何にすべきかと問うた。

先生は曰はれた、『後世の儒者は、人を教へるに、一寸でも精微高尙の論に入ると、「上達のことは未だ學ぶべきでは無い、先づ下學のことを說くのが善い」と謂ふのであるが、これは下學と上達とを分ちて二つにするのである。自分の見る所は之と異なり、目にて見ることを得可く、口にて言ふことを得可く、心にて思ふことを得可き者は、皆、下學である。目にて見ることを得可からず、口にて言ふことを得可からず、心にて思ふことを得可からざる者は、上達である。たとへば、木を栽ゑ培ひ水をそそぎかけたりする類の事は、下學である。その木が晝夜自然に成長する所あり、枝や葉がのびて繁茂するのは、これは上達である。これは人の力の與ることの出來る所では無いのである。それ故に、學問の上に於て、凡そ工夫を用ひることが出來、人に告げ語ることの出來る者は、皆、下學である。上達は、只だ下學の中に在るのである。凡そ聖人の說かるる所は、如何に精微を極めて居るとても、すべて是れ下學である。學者、只だ下學の內に於て工夫を用ひたならば、自然に上達するであらう。必ずしも別に一つの上達の工夫を尋ね求めるには及ばぬのである』と。

問。惟精惟一。是如何用功。先生曰。惟一是惟精主意。惟精是惟一功夫。非惟精之外復有惟一也。精字從米。姑以米譬之。要得此米純然潔白。便是惟一意。然非加春簸篩揀惟精之功。則不能純然潔白也。春簸篩揀。是惟精之功。然亦不過要此米到純然潔白而已。博學審問愼思明辨篤行者。皆所以爲惟精而求惟一也。他如博文者卽約禮之功。格物致知者卽誠意之功。道問學卽尊德性之功。明善卽誠身之功。無二說也。

〔訓讀〕　問ふ、『惟れ精惟れ一は、是れ如何か功を用ひん。』先生曰はく、『惟れ一は是れ惟れ精の主意、惟れ精は是れ惟れ一の功夫。惟れ精の外に復た惟れ一有るに非ざるなり。精の字は米に從ふ。姑く米を以て之を譬へん。此米の純然として潔白なるを得るを要するは、便ち惟れ一の意なり。然れども春簸篩揀惟れ精の功を加ふるに非ざれば、則ち純然として潔白なる能はざるなり。春簸篩揀は、是れ惟れ精の功なり。然れども亦、此米の純然として潔白なるに到るを要するに過ぎざるのみ。博學審問愼思明辨篤行は、皆、惟れ精を爲して惟れ一を求むる所以なり。他、博文は卽ち約禮の功・格物致知は卽ち誠意の功・問學に道るは卽ち德性を尊ぶの功・明善は卽ち誠身の功なるが如き、二說無きなり。』

〔註解〕 此章は、惟れ一は惟れ精の主意であり、惟れ精は惟れ一の工夫であり、惟れ精の外に別に惟れ一が有るに非ざることを說くのである。○問、惟精惟一、是如何用功、先生曰、惟一是惟精主意、惟精是惟一工夫云云。舂簸篩揀は、米を精白にする所の法であり、假りて學問の工夫に譬へたのである。舂は臼にて米をつくこと。簸は箕にて其殼を去ること。篩は、ふるひにて糠を除き去ること。揀は米を選び分けること。問學に道るは卽ち德性を尊ぶの功。中庸に、『君子は德性を尊びて問學に道る』とあり。吾が天より受くる所の德性を尊びて之を全くするには、必ず問學に由らざるべからざるを以て、王子は問學を以て德性を尊ぶの工夫としたのである。朱子は、『德性を尊ぶは、心を存して道體の大を極むる所以なり。問學に道るは、知を致して道體の細を盡す所以なり。二つの者は、德を修め道を凝らすの大端なり』と註し、二つの條項として居る。明善は卽ち誠身の功。中庸に、『身を誠にするに道有り。善に明かならざれば、身に誠あらず』とあり、善を明かにするは天理を明かにするを謂ひ、天理既に明かなれば、身は自然に誠なるを以て、王子は明善を以て誠身の工夫と爲したのである。」澄は問うた、『惟れ精惟れ一とは、如何に工夫を用ふべきで御座いますか』と。先生は曰はれた、『惟れ一は惟れ精の主意目的であり、惟れ精は惟れ一になる爲めの工夫である。惟れ精の外に別に惟れ一が有るのでは無いのである。精の字は米扁の字であるから、姑く米を以て譬へて見よう。此米が全く潔白になることを要するは、惟れ一の意味である。けれども米を臼にて舂き箕にて殼を去り篩にかけて糠を去り惡い米をより分けて惟れ精の工夫を加へなければ、全く潔白になることは出來ないのである。臼にて舂き箕にて殼を去り篩にかけて糠を去り惡い米をより分けるのは、惟れ精の工夫に當るのである。けれども亦、此米が全く潔白なるに到ることを要するに過ぎないのである。博く之を學び審かに之を問ひ愼んで之を思ひ明かに之を辨じ篤く之を行ふのは、皆、惟れ精の工夫を爲して惟れ一を求むるのである。其他、博文は卽ち約禮に至るの工夫であり、格物致知は卽ち誠意に至るの工夫であり、問學に道るは卽ち德性を尊ぶに至る工夫であり、善を明かにするは卽ち身を誠にするに至るの工夫であると云ふが如きも、皆、同じ意味であつて、二つの說は無いのである』と。○傳習錄筆記に、『卷內に知行・博約・精一の說有り、皆是れ一箇の功夫にして、只だ是れ個の頭腦有り。若し這箇の意を見得る時は、卽ち一言にして足る。格物致知、明善誠身、窮理盡性、問學德性、博文約禮、惟れ精惟れ一、諸の此の如き類、總て是れ二箇の工夫無し。學苟くも本領を得る時は、瓶水を高屋の上より傾くるが如し。是故に先生の博約の說に曰はく、「理は一のみ。故に聖人は二敎無く、而して學者は二學無し」と』とあり。

知者行之始。行者知之成。聖學只一箇功夫。知行不可分作兩事。

陸原靜所錄

〔訓讀〕知は行の始、行は知の成るなり。聖學は只だ一箇の功夫なり。知行は分ちて兩事と作す可からず。

〔註解〕此章は知行合一を說くのである。○知は行の始であり、行は知の成就したのである。聖人の學は、只だ一つの工夫である。知と行とは分けて二つの事とすることは出來ない。

漆雕開曰。吾斯之未能信。夫子說之。子路使子羔爲費宰。子曰。賊夫人之子。曾點言志。夫子許之。聖人之意可見矣。

〔訓讀〕漆雕開曰はく、『吾、斯を之れ未だ信ずる能はず』と。夫子、之を說ぶ。子路、子羔をして費の宰と爲らしむ。子曰はく、『夫の人の子を賊ふ』と。曾點、志を言ふ。夫子、之を許す。聖人の意、見る可し。

〔註解〕此章は、聖人の學は、必ずしも仕官するを急とせず、先づ十分に修養することを務むることを說くのである。さればとて、世を遺れて隱遯せよといふのでは無いことは、言ふまでも無いことである。○漆雕開曰、吾斯之未能信、夫子說之云云。論語公冶長篇に、『子、漆雕開をして仕へしむ。對へて曰はく、「吾、斯を之れ未だ信ずる能はず」と。子說ぶ』とあり。朱子の註に、『漆雕開は孔子の弟子、字は子若。斯とは此理を指して言ふ。信ずとは、眞に其の此の如きを知りて而して毫髮の疑無きを謂ふ。開自ら言ふ、未だ此の如くなる能はず、未だ以て人を治む可からずと。故に夫子、其篤志を說ぶ』とあり。論語先進篇に、『子路、子羔をして費の宰と爲らしむ。子曰はく、「夫の人の子を賊ふ。」子路曰はく、「民人有り、社稷有り、何ぞ必ずしも書を讀みて然る後に學と爲さん。」子曰はく、「是故に、夫の佞者を惡む」と』とあり。又、『子路・曾晳・冉有・公西華・侍坐す。子曰はく、「吾が一日爾より長ぜるを以て、吾を以てする毋かれ。居れば則ち曰はく、吾を知らざるなりと。如し或は爾を知らば、則ち何を以てせんや。」子路、率爾として對へて曰はく、「千乘の國、大國の間に攝し、之に加ふるに師旅を以てし、之に因るに饑饉を以てせんに、由や之を爲さば、三年に及ぶ比ほひ、勇有り且つ方を知らしむ可きなり。」夫子、之を哂ふ。「求、爾は何如。」對へて曰はく、「方六十、如しくは五六十、求や之を爲さば、三年に及ぶ比ほひ、民を足らしむ可し。其禮樂の如きは、以て君子を俟たん。」「赤、爾は何如。」對へて曰はく、「之を能くすと曰ふに非ず。願はくは學ばん。宗廟の事、如しくは會同には、端章甫して、願はくは小相と爲らん。」「點、爾は何如。」瑟を鼓すること希なり。鏗爾として瑟を舍きて作ち、對へて曰はく、「三子者の撰に異なり。」子曰はく、「何ぞ傷まんや。亦各〻其志を言ふなり。」曰はく、「莫春には、春服既に成り、冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じて歸らん。」夫子喟然として歎じ

て曰はく、「吾は點に與せん」と』とあり。」孔子が漆雕開をして仕宦せしめようとなされたときに、漆雕開は、「私は斯を未だ信ずることが出來ませぬ」と曰つたので、孔子は御悅びになつた。子路が子羔をして費の宰と爲らしめたときに、孔子はそれを憂へて、「彼の人の子を賊ふ」と仰せられた。孔子の弟子達が各〻自分の志を言つたときに、曾點も其の志す所を言つたが、孔子は特に之を喜んで、「吾は點に與せん」と仰せられた。これによつて、聖人の意を知ることが出來るのである。○佐藤一齋曰はく、『學は己を成すに在り、終に能く物に及ぶ。人の己を信ぜんことを欲せば、自ら信ずるに如くは莫し。己の人を服せんことを欲せば、自ら服するに如くは莫し。自ら信じ自ら服するは、卽ち自得の謂なり。君子は入るとして自得せざる無し。感應の機、蓋し此に在り。故に聖賢の乾斡坤旋の一大事業は、亦皆、一己より立つ。此條を觀れば、以て其意を領す可し』と。

問。寧靜存心時。可爲未發之中否。先生曰。今人存心。只定得氣。當其寧靜時。亦只是氣寧靜。不可以爲未發之中。曰。未便是中。莫亦是求中功夫。曰。只要去人欲存天理。方是功夫。靜時念念去人欲存天理。動時念念去人欲存天理。不管寧靜不寧靜。若靠那寧靜。不惟漸有喜靜厭動之弊。中間許多病痛。只是潛伏在。終不能絕去。遇事依舊滋長。以循理爲主。何嘗不寧靜。以寧靜爲主。未必能循理。

〔訓讀〕問ふ、『寧靜に心を存する時、未發の中と爲す可しや否や。』先生曰はく、『今の人、心を存するは、只だ氣を定め得るのみ。其の寧靜なる時に當りて、亦只だ是れ氣の寧靜なるのみ。以て未發の中と爲す可からず。』曰はく、『未だ便ち是れ中ならざるも、亦是れ中を求むるの功夫なる莫からんか。』曰はく、『只だ人欲を去り天理を存するを要する、方に是れ功夫なり。靜時にも、念念、人欲を去り天理を存し、動時にも、念念、人欲を去り天理を存し、寧靜なると寧靜ならざるとに管せざれ。若し那の寧靜に靠らば、惟だ漸く靜を喜び動を厭ふの弊有るのみならず、中間、許多の病痛、只だ是れ潛伏して在り、終に・絕ち去る能はず、事に遇へば舊に依りて滋長す。理に循ふを以て主と爲さば、何ぞ嘗て寧靜ならざらん。寧靜を以て主と爲さば、未だ必ずしも理に循ふ能はざらん。』

〔註解〕　此章は、靜なる時にも、念念、人欲を去り天理を存し、動く時にも、念念、人欲を去り天理を存することが、未發の中を求むる工夫なることを說くのである。○問、寧靜存心時、可爲未發之中否。寧靜は安らかに靜かなること。未發之中は、中庸に、『喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ふ。發して節に中る、之を和と謂ふ。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。中和を致し、天地位し、萬物育はる』とあるに本づく。未發の中は、喜怒哀樂の未だ發せず、中正にして偏らざる心の情態を謂ふのである。」澄は問うた、『寧靜にして心を存する時は、之を未發の中と謂ふことが出來ませうか』と。○先生曰、今人存心、只定得氣、當其寧靜時、亦只是氣寧靜、不可以爲未發之中。先生は曰はれた、『今の人が心を存するのは、只だ氣を定め得ただけのことである。畢竟、一時の姑息たるに過ぎないのであつて、それを未發の中とすることは出來ないのである』と。○曰、未便是中、莫亦是求中功夫。澄は又問うた、『寧靜に心を存することは、未だそれが直に未發の中で無いとしても、これも亦未發の中を求める工夫では有りますまいか』と。○曰、只要去人欲存天理、方是功夫、靜時念念去人欲存天理、動時念念去人欲存天理、不管寧靜不寧靜云云。靠は倚るなり、よりかかること。」先生は曰はれた、『只だ人欲を去り天理を存せんと要することが、未發の中を求める工夫である。靜なる時にも、念念、間斷無く、人欲を去り天理を存し、動く時にも、念念、間斷無く、人欲を去り天理を存し、寧靜であると寧靜でないとに頓著しないのである。若し彼の寧靜に倚りかかり執著するときは、唯だ漸次に靜なることを喜び動くことを厭ふの弊害が生ずるのみではなく、其間に、幾多の病痛が、只だ潛みかくれて居り、終に其病痛の根源を斷ち去ることが出來ず、何か事に出遇ふときは、其病痛が舊の通りに發動して益〻增長するであらう。若し中を求むる工夫に於て、理に循ふを以て主と爲すときは、如何なる場合にも、寧靜ならざることは無いのである。若し寧靜を以て主と爲すときは、未だ必ずしも理に循ふといふわけには行かないのである』と。

問。孔門言志。由求任政事。公西赤任禮樂。多少實用。及曾晳說來。却似要的事。聖人却許他。是意何如。曰。三子是有意必。有意必便偏著一邊。能此未必能彼。曾點這意思。却無意必。便是素其位而行。不願乎其外。素夷狄行乎夷狄。素患難行乎患難。無入而不自得矣。三子所謂汝器也。曾點便有不器意。然三子之才。各卓然成

章。非若世之空言無實者。故夫子亦皆許之。

〔訓讀〕　問ふ、『孔門、志を言ふや、由・求は政事に任じ、公西赤は禮樂に任ず。多少實用なり。曾晳が說き來るに及びては、却て要の事に似たり。聖人却つて他を許す。是意は何如。』曰はく、『三子は是れ意必有り。意必有れば、便ち一邊に偏著し、此を能くするも未だ必ずしも彼を能くせず。曾點の這意思は、却つて意必無し。便ち是れ其位に素して行ひ、其外を願はず、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては患難に行ひ、入るとして自得せざる無きなり。三子は謂はゆる汝は器なるなり。曾點は便ち器ならざる意有り。然れども三子の才は、各〻卓然として章を成し、世の空言にして實無き者の若きに非ず。故に夫子、亦皆之を許せり。』

〔註解〕　此章は、孔子が曾晳を許せし所以を說くのである。○問、孔門言志、由求任政事、公西赤任禮樂、多少實用、及曾晳說來、却似要的事、聖人却許他、是意何如。仲由・冉求・公西赤・曾晳が各〻志を言ふこと、論語先進篇に出で、前の『漆雕開』の章に抄錄せり、參照せよ。要は音ヨウ、戲れなり。」澄は問うた、『孔子の門弟子が各〻己の志を言つたときに、仲由・冉求は政事を以て自ら任じ、公西赤は禮樂を以て自ら任じて居ましたが、これ等は皆多少の實用あるものであります。然るに曾晳の言ふ所は、戲の事に似て居ます。孔夫子は却つて曾晳を許して、「吾は點に與せん」と仰せられました。この意味は如何で御座いますか』と。○曰、三子是有意必、有意必便偏著。一邊云云。意は私意、必は必ず斯くあるべしと期待すること。論語子罕篇に、『子、四を絕つ。意毋く、必毋く、固毋く、我毋し』とあり。其位に素して行ひ、其外を願はず、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては患難に行ひ、入るとして自得せざる無しとは、中庸の語を節錄したのである。素は猶ほ見在のごとし。君子は但だ見在居る所の位に因りて、其の當に爲すべき所を爲し、其外を慕ふの心無きを言ふ。汝は器なりは、論語公冶長篇に、『子貢問ひて曰はく、賜や何如。子曰はく、女は器なり。曰はく、何の器ぞや。曰はく、瑚璉なり』とあるに本づく。器とは有用の成材なるをいふ。器ならずは、論語爲政篇に、『君子は器ならず』とあるに本づく。朱子の註に、『器は各〻其用に適し、而も相通ずる能はず。成德の士は、體、具はらざる無し、故に用、周からざる無し。特に一材一藝の爲めのみに非ず』とあり。卓然は飛び拔けて優れたる貌。章を成すは、うるはしき色取を成すこと。論語公冶長篇に、『吾が黨の小子狂簡、斐然として章を成す』とあるに本づく。」先生は曰はれた、『仲由・冉求・公西赤の三子は、若し我を用ふる者あらば、斯くすべしと期待する所が有るのであつて、これ亦、私意たるを免れないのである。私意ありて必ず斯くすべしと期待する所有るときは、一方に偏り、此事は出來るけれども、必ずしも彼の事も出來るとは限らないのである。曾點の意思には、私意無く、必ず斯くすべしと期待する所は無いのであ

る。即ち中庸に謂ふ所の、現在居る所の位地に應じて其の當に爲すべき所を行ひ、其外を慕ふの心無く、現在、患難の位地に在るときは、患難に在りて當に爲すべき所を行ひ、現在、夷狄に在るときは、夷狄に在りて當に爲すべき所を行ひ、如何なる處に在つても自得せざること無きものである。三子は謂はゆる汝は器なるものである。曾點には、君子は器ならずといふ意が有るのである。これが、孔夫子が喟然として嘆じて、「吾は點に與せん」と仰せられた所以である。けれども由・求・赤の三子の才能は、各〻卓然としてすぐれたる立派なる色彩を成就したるものであつて、世間の空言にして實行無き者の類では無いのである。それ故に、孔夫子は、これ等をも亦皆之を許されたのである』と。

問。知識不長進。如何。先生曰。爲學須有本原。須從本原上用力。漸漸盈科而進。仙家說嬰兒亦善譬。嬰兒在母腹時。只是純氣。有何知識。出胎後。方始能啼。既而後能笑。又既而後能識認其父母兄弟。又既而後能立能行。能持能負。卒乃天下之事。無不可能。皆是精氣日足。則筋力日强。聰明日開。不是出胎日便講求推尋得來。故須有箇本原。聖人到位天地育萬物。也只從喜怒哀樂未發之中上養來。後儒不明格物之說。見聖人無不知無不能。便欲於初下手時講求得盡。豈有此理。又曰。立志用功。如種樹然。方其根芽。猶未有幹。及其有幹。尚未有枝。枝而後葉。葉而後花實。初種根時。只管栽培灌溉。勿作枝想。勿作葉想。勿作花想。勿作實想。懸想何益。但不忘栽培之功。怕沒有枝葉花實。

〔訓讀〕　問ふ、『知識、長進せざるは、如何せん。』先生曰はく、『學を爲すは須く本原有るべし。須く本原の上より力を用ひ、漸漸に科に盈ちて進むべし。仙家に嬰兒を說けるも亦善き譬なり。嬰兒、母の腹に在る時は、只だ是れ純氣にして、何の知識有らん。胎を出でて後、方に始めて能く啼き、既にして後能く笑ひ、又既にして後能く其父母兄弟を識認し、又既にして後能く立ち能く行き、能く持ち能く負ひ、卒に乃ち天下の事、能くす可からざる無し。皆是れ精氣日に足れば、則ち筋力日に强く、聰明日に開く。是れ胎を出づる日便ち講求し推尋し得來るにあらず。故に須く

箇の本原有るべし。聖人、天地を位し萬物を育するに到るも、也た只だ喜怒哀樂未發の中の上より養ひ來る。後儒、格物の說を明かにせず、聖人の知らざる無く能くせざる無きを見て、便ち・初めて手を下す時に於て講求し得て盡さんと欲す。豈に此理有らんや。』又曰はく、『志を立て功を用ふるは、樹を種うるが如く然り。其根芽に方りては、猶ほ未だ幹有らず。其の幹有るに及びては尙ほ未だ枝有らず。枝ありて後に葉あり、葉ありて後に花實あり。初め根を種うる時は、只管栽培灌漑し、枝の想を作す勿かれ、葉の想を作す勿かれ、花の想を作す勿かれ、實の想を作す勿かれ。懸想するも何の益かあらん。但だ・栽培の功を忘れ・枝葉花實有る沒きを怕れず。』

〔註解〕　此章は、學を爲すには、須く本原の上より力を用ひ、漸次に科に盈ちて進むべく、長進せざるを患ふるを要せざることを說くのである。○問、知識不長進、如何。先生曰、爲學須有本原、須從本原上用力、漸漸盈科而進云云。長進せずは、上達せざるをいふ。本原は、もと、根源。漸は、漸次に徐徐に進むこと。科に盈ちて進むは、孟子離婁下篇に、『原泉混混として、晝夜を舍てず、科に盈ちて後に進み、四海に放る。本有る者は是の如し』とあるに本づく。朱註に、『科は坎なり』とあり。水が窪みたる穴に滿ちて徐徐に進むをいふ。仙家は道家なり。嬰兒を說くとは、道敎にて道の修養を嬰兒に譬へて說くをいふ。筋力は筋肉の力、體力。天地を位し萬物を育す及び喜怒哀樂未發の中は、中庸に、『喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ひ、發して節に中る、之を和と謂ふ。中和を致し、天地位し、萬物育はる』とあるに本づく。」澄は問うた、『私は學問に力を用ひますけれども、知識が上達いたしませぬが、如何したらば善いで御座いませうか』と。先生は曰はれた、『學問を爲すには、是非とも本原があるべきである。是非とも本原の處に於て力を用ひて、漸次に徐ろに進むこと、水が穴などに滿ちて然る後に徐徐に進むやうにあるべきである。一足飛びに上達しようなどと考へるべきでは無いのである。道家に於て、嬰兒を以て道の修行に譬へて居るが、これ亦善い譬である。嬰兒が母親の胎內に居るときは、只だ純粹の氣のみであつて、何の知識も無いのである。胎內を出でて後、始めて啼くことが出來るやうになり、さうするうちに、笑ふことが出來るやうになり、又さうするうちに、其父母や兄弟を識別することが出來るやうになり、物を持つことが出來るやうになり、物を背負ふことが出來るやうになり、終には天下の事、何でも出來るやうになるのである。これは皆、精粹なる元氣が日々に足りて十分なるときは、體力も日々に强くなり、耳目の聰明も日々に開けるのである。かやうに嬰兒が成長發達するのは、母親の胎內を出でる時に直に後來爲すべき事を豫め講求し推究しておくのでは無いのである。精粹なる元氣が日々に足るときは、自然にここに到達するのである。故に是非とも一つの本原が有るべきである。聖人が、天地を位して其處に安んぜしめ、萬物を育てて其生を遂げしむる

ほどの大德に到達するのも、ただ喜怒哀樂の未だ發せざるの中の處から養つて、漸次に此大德に到つたのである。然るに後世の儒者は哀樂の未だ發せざるの中の處から養ひ得たのである。喜怒大學に說いてある格物の意味を明かにせずして、聖人が大智にして知らざること無く、多能にして能くせざること無きを見て、初めて手を下して學問をする時に於て其の有らゆる事を殘らず講究しようと思ふのである。さやうの道理は決して無いのである』と。○又曰、立志用功、如種樹然云云。懸想は、遙に想ふなり、遠くより豫想すること。但不忘栽培之功怕沒有枝葉花實。一說に、怕の字を反語として、『但だ栽培の功を忘れずんば、枝葉花實有る沒きを怕れんや』と讀む說あれども、私は、『但だ、栽培の功を忘れ・枝葉花實有る沒きを怕れず』と讀み、栽培の功を忘れず、又、枝葉花實有る沒きを怕れず、との意に解するを善しと思ふ。」先生は又語を繼いで曰はれた、『志を立てて學問修養の工夫をするのは、たとへば樹を植ゑるが如きものである。初に其樹の根と芽とばかり有る時には、まだ幹は無いのである。さうするうちに幹は出たけれども、まだ枝は無いのである。さうするうちに枝が出て後に葉が出、葉が出て後に花が咲き實が成るのである。初に根を種ゑる時には、只管に栽培し灌漑することを勤め、枝の豫想をしてはならぬ、葉の豫想をしてはならぬ、花の豫想をしてはならぬ、實の豫想をしてはならぬのである。後の事を遙かに豫想しても何の益も無いことである。但だ、栽培の勤を忘れること無く、枝や葉や花や實が無いことを怕れることも無いのである。ただ今日の修養工夫を心懸けるべきであつて、後日の結果を豫期すべきでは無いのである。本原が有れば、自然に、到達すべき處に到達するのである』と。○孫奇逢曰はく、『功深く力到れば、當に自得の時有るべし。要は忘るる勿く助くる勿きに在り』と。

問。看書不能明。如何。先生曰。此只是在文義上穿求。故不明。如此又不如爲舊時學問。他到看得多解得去。只是他爲學。雖極解得明曉。亦終身無得。須於心體上用功。凡明不得。行不去。須反在自心上體當。卽可通。蓋四書五經。不過說這心體。這心體卽所謂道。心體明卽是道明。更無二。此是爲學頭腦處。

〔訓讀〕問ふ、『書を看るに明かなる能はざるは、如何せん。』先生曰はく、『此れ只だ文義上に在りて穿求す、故に明かならず。此の如きは、又、舊時の學問を爲すに如かず。他、看得て多きに到らば、解し得去らん。只だ是れ他、學を爲す、極めて解し得て明曉なりと雖も、亦、身を終るまで得る無し。須く心體上に於て功を用ふべし。凡そ明かにし得ず、行ひ去らざれば、須く反つて自心上に在りて體當すべし。卽ち通ず可し。蓋し四書・五經は、這心體を說くに過ぎず。這心體

は、即ち謂はゆる道なり。心體明かなれば即ち是れ道明かなり。更に二無し。此は是れ學を爲す頭腦の處なり。』

〔註解〕此章は、書を讀むには須く自心の上に引き當てて體得すべきことを說くのである。○問、看書不能明、如何。先生曰、此只是在文義上穿求、故不明云云。穿求は、穿鑿講求すること。舊時の學問は、朱子學風の學問をいふ。他、看得て多きに到らば、解し得去らん。舊時の學問を爲す人は、書を讀むこと多きに至らば、自然に明瞭に解するに至るべきをいふ。到の字、一本には倒に作り、『他倒つて看得て多く解し得去る』と讀み、舊時の學問を爲す人の方が、却つて書を讀むこと多く、明瞭に理解するのである、との意に解す。後の說が善いかと思へども、姑く底本に從ふ。心體は心の本體。體當は實際に引き當てて工夫すること。四書五經は這心體を說くに過ぎず。象山集要五に、『學苟くも本有れば、六經は皆我が註脚なり』とあり、又、『六經、我を註す。我、六經を註するに非ず』とあり。這心體即所謂道心體明即是道明の二句は、從來の刊本多くは道心を以て句と爲し、『這の心體は即ち謂はゆる道心なり、體明かなれば即ち是れ道明かなり』と讀めども、道を以て句と爲し、『這の心體は即ち謂はゆる道なり。心體明かなれば即ち是れ道明かなり』と讀むを勝れりと爲す。標註に、『案ずるに、讀書の法、是に於て更に下卷の「九川問ふ、此工夫」の條、及び同じき「問ふ、書を讀むは此心を調攝する所以」、及び「一友問ふ、書を讀むに記得せず、如何」の數條を以て、合はせて之を觀れば、其意交〻盡し、工夫、下落の處有り』とあり。○澄は問うた、『私は書物を讀むのに明瞭に理解することが出來ませぬが、如何いたしましたらば宜しう御座いますか』と。先生は曰はれた、『これは只だ文義の上に於て穿鑿講求するが故に、明瞭に理解されぬのである。文義の上に於て穿鑿講求するならば、舊時の學問例へば朱子學風の學問を爲す方が勝つて居るのである。舊時の學問を爲す人は、書を讀むこと多きに到れば、自然に理解するのである。只だ彼は學問を爲すのに、極めて明瞭に理解するとても、終身、何等の實際の所得は無いのである。是非とも心の本體の上に於て工夫を用ひるべきである。すべて明かにすることを得ず、行ふことが出來なければ、是非とも自分の心の上に引き當てて實際に工夫すべきである。さうすると、すぐに通曉することが出來るであらう。蓋し四書・五經は、この心の本體を說明するに過ぎないのである。この心の本體は、即ち謂はゆる道である。心の本體が明かであるのは、即ち道が明かであるのである。その外に別の物が有るのでは無く、心の本體と道とは二つの物では無いのである。此は學問を爲す至極肝要の處である』と。○施邦曜曰はく、『人若し身心上に於て實體せずんば、即ち天下の書を讀み盡すとも、終に是れ空花』と。

虛靈不昧。衆理具而萬事出。心外無理。心外無事。

陸原靜所錄

〔訓讀〕 虛靈にして昧からず、衆理具はりて萬事出づ。心外に理無く、心外に事無し。

〔註解〕 虛靈。虛は形無きをいふ。靈は靈妙なり。昧からずは、明かなるをいふ。「心といふ者は、本來虛にして靈妙であり、明かにして昧からざるものであり、天地間の有らゆる理は、皆具はりて有らざる無く、天地間の有らゆる事は、皆心より發出するものである。心の外に更に一の理は無く、心の外に更に一の事は無いのである。○標註に、『案ずるに、朱子の大學章句に曰はく、「衆理を具へ萬事に應ず」と。然れども是れ猶ほ萬事を以て外として之を看了るに似たり。孟子曰はく、「萬物、皆、我に具はる」と。其意、觀る可し』とあり。朱子の大學章句に、『明德は、人の・天より得る所にして、虛靈にして昧からず、以て衆理を具へて而して萬事に應ずる者なり』と曰つてあるが、『衆理を具へ萬事に應ず』と曰ふときは、衆理萬事を心の外に在るものとするのであり、王子は改めて『衆理具はりて萬事出づ』としたのである。

或問。晦庵先生曰。人之所以爲學者。心與理而已。此語如何。曰。心卽性。性卽理。下一與字。恐未免爲二。此在學者善觀之。

〔訓讀〕 或るひと問ふ、『晦庵先生曰はく、「人の・學を爲す所以は、心與レ理のみ」と。此語は如何。』曰はく、『心は卽ち性なり。性は卽ち理なり。一の與の字を下すは、恐らくは未だ二と爲すを免れざらん。此れ學者の善く之を觀るに在り。』

〔註解〕 晦庵は朱子の號である、人之所以爲學者心與理而已は、朱子の語であつて、朱子の大學或問の格物の條に出でて居る。性は卽ち理なりは、伊川先生の語であつて、近思錄道體類に出でて居る。」或るひとが問うた、『晦庵先生の語に、「人が學を爲す所以は、心と理とのみ」と曰つてあるが、此語は如何で御座いますか』と。先生は曰はれた、『心は卽ち性であり、性は卽ち理であり、心と性と理との三つは唯だ一つの物であつて、別の物では無いのである。然るに其間に一つの「と」の字を置くときは、心と理とを分けて內外の二つとする弊あることを免れないであらう。この語は必ずしも非難すべき語では無いが、學者が善く之を解釋するを要する所である』と。

或曰。人皆有是心。心卽理。何以有爲善有爲不善。先生曰。惡人之心。失其本體。

〔訓讀〕 或るひと曰はく、『人、皆、是心有り。心は卽ち理なり。何を以て善を爲す有り不善を爲す有る。』先生曰はく、『惡人の心は、其本體を失ふ。』

〔註解〕 或るひとが問うた、『人は皆この心を有して居るのであつて、心は卽ち理であり、理は善であるから、其行爲は皆善でなければならぬ筈である。然るに善を爲すものも有り、惡を爲すもの

も有るのは、何故で御座いますか』と。先生は曰はれた、『惡人の心は、心の本體を失つて居るのである。心が心の本體を失はざるときは、其行皆善であるが、心が心の本體を失ふときは、惡を爲すに至るのである』と。○傳習錄筆記に曰はく、『喩へば酒の味は甘きを本體とすれども、損じぬれば酸く苦くなる。その損じたる上を見て、酒は酸き者苦きものと思ふは誤り也』と。

問。析之有以極其精而不亂。然後合之有以盡其大而無餘。此言如何。先生曰。恐亦未盡。此理豈容分析。又何須湊合得。聖人說精一。自是盡。

〔訓讀〕　問ふ、『之を析ちて以て其精を極むる有りて亂れず、然る後に之を合はせて以て其大を盡す有りて餘り無しと。此言は如何。』先生曰はく、『恐らくは亦未だ盡さざらん。此理は豈に分析す容けんや。又何ぞ湊合し得るを須ひん。聖人、精一と說く、自ら是れ盡せり。』

〔註解〕　之を析ちて以て其精を極むる有りて亂れず、然る後に之を合はせて以て其大を盡す有りて餘無し。これは朱子の語で、大學或問八目の下に出でて居る。凡そ事物の理は、先づ之を分析して其精微を盡して而も亂るること無く、然る後に、又之を湊合して其廣大を極めて而して餘す所無かるべし、との意である。標註には、『然る後の字、正に支離の處を見る』と曰つてある。」臨澄は問うた、『朱子の語に、「之を析ちて以て其精を極むる有りて亂れず、然る後に、之を合はせて以て其大を盡す有りて餘り無し」と曰つてありますが、此言は如何でございますか』と。先生は曰はれた、『此言も恐らくは未だ十分に盡さない所があるであらう。此理は分析することの出來るものでは無い。又、湊合することを必要とするものでも無いのである。聖人が嘗て惟れ精惟れ一と說かれたが、この言は簡單であるけれども、自ら十分に盡して居るのである。餘計な事を言へば言ふほど眞相に遠ざかるのである』と。

省察是有事時存養。存養是無事時省察。

〔訓讀〕　省察は是れ事有る時の存養、存養は是れ事無き時の省察。

〔註解〕　省察は自ら省み察すること。存養は心を存し性を養ふこと。」省察は動の時の工夫とし、存養は靜の時の工夫とされて居て、省察と存養と二つの事であるやうに思はれて居るが、決してさうでは無く、省察は事有る時の存養であり、存養は事無き時の省察であつて、動と靜とによつて名が異なつて居るだけで、其實は同一の事である。

澄嘗問象山在人情事變上做工夫之說。先生曰。除了人情事變則無事矣。喜怒哀樂非人情乎。自視聽言動以至富貴貧賤患難死生。皆事變也。事變亦只在人情裏。其要只在致中和。致中和只在謹獨。

〔訓讀〕澄嘗て象山が人情事變の上に在りて工夫を做すの說を問ふ。先生曰はく、『人情事變を除けば則ち事無し。喜怒哀樂は人情に非ずや。視聽言動より、以て富貴貧賤患難死生に至るまで、皆、事變なり。事變も亦只だ人情の裏に在り。其要は只だ中和を致すに在り。中和を致すは只だ獨を謹むに在り。』

〔註解〕澄嘗問象山在人情事變上做工夫之說。象山集要五に曰はく、『復齋兄、一日、問はる。曰はく、「吾が弟、今、何の處に在りて工夫を做す。」某答へて云はく、「人情事勢物理の上に在りて些の工夫を做す」と。復齋、應ずるのみ。物價の低昂を知ると、夫の物の美惡眞僞を辨ずるとの若きは、則ち吾、之を能くすと謂ふ可からず。然れども吾の謂はゆる工夫を做すとは、此の謂に非ざるなり』と。」澄は、或る時、陸象山先生が人情事變の上に於て工夫を做すと曰はれたわけを聞うた。○先生曰、除了人情事變則無事矣云云。人情は人の感情。中和を致すは、中庸に、『喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ふ。發して節に中る、之を和と謂ふ。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。中和を致し、天地位し、萬物育はる』とあるに本づく。獨を謹むは、獨を愼むと同じ。大學に、『謂はゆる其意を誠にすとは、自ら欺く毋きなり。惡臭を惡むが如く、好色を好むが如し。此を之れ自ら謙くすと謂ふ。故に君子は必ず其獨を愼むなり。小人は閒居して不善を爲すこと、至らざる所無し。君子を見て而して後に厭然として其不善を揜ひて、其善を著はす。人の己を視ること、其肺肝を見るが如く然り。則ち何の益あらん。此を中に誠あれば外に形はると謂ふ。故に君子は必ず其獨を愼むなり』とあり、又、中庸に、『君子は其の睹ざる所を戒愼し、其の聞かざる所を恐懼す。隱れより見はるるは莫く、微なるより顯なるは莫し。故に君子は其獨を愼むなり』とあり。大學・中庸共に其義同じ。愼獨を謹獨に作れるは、宋の時に孝宗の諱を避けて謹獨と言ひしに始まつたのである。孝宗の諱は眘なれども、音シンなるを以て、同音の愼の字を避けたのである。」先生は曰はれた、『凡そ人生に於て人情と事變とを除いたならば、外に事といふべきものは無いのである。喜んだり怒つたり哀しんだり樂しんだりするのは、卽ち人情である。視たり聽いたり言語動作するより、富貴・貧賤・患難・死生に至るまで、皆、事變である。』そして事變も亦只だ人情の中に在るのである。其の肝要とする所は、只だ中和を致すことで

ある。中和を致すは、只だ獨を愼むに在るのである。象山が人情事變に在りて工夫を做すと曰はれたのは、誠に適切にして要を得て居るのである。此外に別に工夫は無いのである』と。

澄問。仁義禮智之名。因已發而有。曰。然。他日澄曰。惻隱羞惡辭讓是非。是性之表德邪。曰。仁義禮智。也是表德。性一而已。自其形體也謂之天。主宰也謂之帝。流行也謂之命。賦於人也謂之性。主於身也謂之心。心之發也。遇父便謂之孝。遇君便謂之忠。自此以往。名至於無窮。只一性而已。猶人一而已。對父謂之子。對子謂之父。自此以往。至於無窮。只一人而已。人只要在性上用功。看得一性字分明。卽萬理燦然。

〔訓讀〕澄問ふ、『仁義禮智の名は、已發に因りて有りや。』曰く、『然り。』他日、澄曰はく、『惻隱・羞惡・辭讓・是非は、是れ性の表德なりや。』曰はく、『仁義禮智も、也た是れ表德なり。性は一のみ。其形體よりして之を天と謂ひ、主宰するよりして之を帝と謂ひ、流行するよりして之を命と謂ひ、人に賦するよりして之を性と謂ひ、身に主たるよりして之を心と謂ふ。心の發するや、父に遇ひては便ち之を孝と謂ひ、君に遇ひては便ち之を忠と謂ふ。此より以往、名、窮り無きに至るも、只だ一の性のみ。猶ほ人は一のみなるに、父に對しては之を子と謂ひ、子に對しては之を父と謂ひ、此より以往、窮り無きに至るも、只だ一人のみなるがごとし。人は只だ性の上に在りて功を用ふるを要す。一の性の字を看得て分明なれば、卽ち萬理燦然たり。』

〔註解〕此章は、人は只だ性の上に於て工夫を用ひんことを要し、性の一字を明かにするを得ば、萬理皆分明なるべきことを說くのである。○澄問、仁義禮智之名、因已發而有、曰然。仁義禮智を四德として列擧することは、蓋し孟子より始まつたであらう。已發は未發に對する語にして、其性の已に發動したるをいふ。」澄は問うた、『仁義禮智の四德と爲るべきものは、もとより性の中に具へて居るのであるけれども、仁義禮智といふ名稱は、性が已に發動した處によつて出來るものと思ひますが、如何で御座いませうか』と。すると先生は『さうである』と曰はれた。○他日澄問、惻隱羞惡辭讓是非、是性之表德邪。曰、仁義禮智、也是表德云云。惻隱羞惡辭讓是非は、孟子公孫丑上篇に、『惻隱の心は仁の端なり。羞惡の心は義の端はり。辭讓の心は禮の端なり。是非の心は智の端なり』とあるに本づく。性の表德とは、性の外に表はれたる德をいふ。」其後或る日澄は問うた、『惻隱・羞惡・辭讓・是非は、性が外に表はれたる德で御座いますか』と。先生は曰

はれた、『さうである。そればかりではく、仁義禮智も亦、性が外に表はれたる德である。性の德が外に表はれて、或は仁と爲り、或は義と爲り、或は禮と爲り、或は智と爲るのである。性は唯だ一つであるが、其形體の上から名づけて天と謂ひ、それが萬物を主宰する方面から名づけて帝と謂ひ、それが萬物に流行し行き渡つて居る方面から名づけて命と謂ひ、人に賦與されて居る方面から名づけて性と謂ひ、それが身體の主と爲つて居る方面から名づけて心と謂ふのである。人の心が發動するに就いては、父に對して發動するときは、孝と謂ひ、君に對して發動するときは忠と謂ふのである。これより以上、限り無き名稱があるけれども、只だ一つの性である。性は一つであるけれども、種種の方面から見て、種種の名が付けられるのである。それは、丁度、人は一人であるのに、父に對しては子と謂ひ、子に對しては父と謂ひ、これより以上、種種の境遇によつて種種の名がつけられ、限り無き名稱が有るけれども、只だ一人であるのと同じ事である。それ故に、人は只だ性の上に於て工夫を用ひることを要するのである。一つの性の字を分明に了解することが出來たならば、天下の有らゆる理は瀟然として明瞭に了解されるのである』と。

一日論爲學工夫。先生曰。教人爲學。不可執一偏。初學時。心猿意馬。栓縛不定。其所思慮。多是人欲一邊。故且教之靜坐息思慮。久之俟其心意稍定。只懸空靜守如槁木死灰。亦無用。須教他省察克治。省察克治之功。則無時而可間。如去盜賊。須有箇掃除廓清之意。無事時。將好色好貨好名等私。逐一追究搜尋出來。定要拔去病根。永不復起。方始爲快。常如猫之捕鼠。一眼看著。一耳聽著。纔有一念萌動。卽與克去。斬釘截鐵。不可姑容與他方便。不可窩藏。不可放他出路。方是眞實用功。方能掃除廓清。到得無私可克。自有端拱時在。雖曰何思何慮。非初學時事。初學必須思。省察克治。卽是思誠。只思一箇天理。到得天理純全。便是何思何慮。

〔訓讀〕一日、學を爲す工夫を論ず。先生曰はく、『人に學を爲すを敎ふるには、一偏を執る可からず。初學の時は、心猿意馬、栓縛すれども定まらず、其の思慮する所は、多くは是れ人欲の一邊なり。故に且く之に靜坐して思慮を息むることを敎へ、之を久しうして、其心意の稍や定まるを俟つ。只だ懸空に靜守して槁木死灰の如きも亦用無し。須く他に省察克治することを敎ふべし。

省察克治の功は、則ち時として間す可き無く、盜賊を去るが如く、須く箇の掃除廓清の意有るべし。事無き時は、色を好み貨を好み名を好む等の私を將て、逐一追究搜尋し出し來り、定ず病根を拔き去りて永く復た起らざらんことを要し、方に始めて快と爲す。常に、猫の・鼠を捕ふるに、眼を一にして看著し、耳を一にして聽著するが如く、纔に一念の萌し動く有れば、卽ち興に克ち去り、釘を斬り鐵を截るがごとく、姑くも他の方便を容與す可からず、窩藏す可からず、他の出路を放つ可からず。方に是れ眞實に功を用ひ、方に能く掃除廓清し、私の克つ可き無きを得るに到らば、自ら・端拱する時の在る有らん。何をか思ひ何をか慮らんと曰ふと雖も、初學の時の事に非ず。初學は必ず須く思ふべし。省察克治は、卽ち是れ誠を思ひ、只だ一箇の天理を思ふなり。天理純全なるを得るに到らば、便ち是れ何をか思ひ何をか慮らん。』

〔註解〕此章は學を爲す工夫を說くのである。○一日論爲學工夫、先生曰、敎人爲學、不可執一偏云云。一偏は一方に偏ること。心猿意馬は、情意の妄動することを猿と馬とに喩へたのである。參同契註に、『心猿定まらず、意馬四もに馳す』とあり。栓縛、栓は馬を繫ぐこと。懸空は茫漠として目當て無きをいふ。槁木は、枯れたる木。體の動かざるに譬ふ。死灰は、つめたき灰。念の起らざるに譬ふ。莊子齊物論に、『形は固より槁木の如くならしむ可く、而して心は固より死灰の如くならしむ可きか』とあるに本づく。用無しは、效無しの意。省察は自ら反省して考察すること。克治は私欲に克ち治めること。掃除廓清は掃ひ除きて、さつぱりと清めること。逐一搜尋。標註に曰はく、『逐一搜尋は、案ずるに、是れ王子が人を敎ふるの家法なり。下卷「一友問ふ」の條に之を盡す』と。猫の鼠を捕ふるが如しは、文錄八、弟に示す立志說にも亦之を言ふ。朱子文集の偶讀漫記に曰はく、「釋氏に清草堂といふ者有り。叢林に名有り。其の始めて學ぶ時、入る所無きが如し。之に告ぐる者有り、曰はく、子、猫の・鼠を捕ふるを見ずや。四足、地に據り、首尾一直にして、目睛、瞬がず、心、他念無し。唯だ其れ動かず。動けば則ち鼠、逃るる所無しと。清、其言を用ひ、乃ち入る所有り。彼の學ぶ所は、吾と異なりと雖も、然れども其の之を得る所以の者は、則ち彼此の殊なる無し。學者、宜しく此を以て自ら警むべし」と。』清草堂は、草堂善清禪師にして、之に告ぐる者は、黃龍祖心禪師である。釘を斬り鐵を截つは、力を用ふること緊切なるをいふ。宋代の俗語にして、禪書に多く用ふ。姑くも他の方便を容與す可からず。他は萌し動ける私欲の一念をさす。方便は手だて、私欲の念が己を誘惑する手段をいふ。容與は、ゆるすこと。姑くも私欲の一念が自分に對して業(わざ)をするのを許してはならぬ、との意。窩藏。窩は、あなぐら。盜賊惡人などを宿するを窩藏といふ。官吏の語なり。其字を借り用ひて、私欲の念をしまひおくを云ふ。他の出路を放つ可からず。出路は出づる路。人欲の出路をゆるしてはならぬ。端拱は、端坐して手を拱くことに

て、無爲にして治まることを形容したのである。何をか思ひ何をか慮らん、標註に曰はく、『易係辭に曰はく、「天下何をか思ひ何をか慮らん。天下は歸を同じくして塗を殊にし、致を一にして慮を百にす」と。今案ずるに、何をか思ひ何をか慮らんを以て、自然の地頭と爲す。故に曰はく、「初學の時の事に非ず」と。是れ蓋し先生の前說ならんか。中卷、周道通に答ふる書に曰はく、「係に言ふ、何をか思ひ何をか慮らんと。」是れ思ふ所慮る所只だ是れ一箇の天理にして別思別慮無きを言ふのみ。交〻考ふ可し』と。初學は必ず須く思ふべしは、一說には、下の省察克治の四字を連ねて一句と爲し、『初學は必ず須く省察克治を思ふべし』と讀めども、今、從はず。蓋しこの『思ふべし』とは、上の『何をか思ひ何をか慮らん』を受けたのである。誠を思ふは、中庸に、『是故に、誠は天の道なり。誠を思ふは人の道なり』とあるに本づく。此語は孟子離婁上篇にも出づ。」或る日、學問を爲す工夫を論じたときに、先生は曰はれた、『人に學問を爲すことを敎へるには、人により時によつて色色な方法が有るのであつて、一方に偏つてそれを固執してはならぬのである。初めて道を學ぶ時には、猿や馬にも比すべき心意が、頻に動いて、繫ぎ縛らうとしても落ちつかず、その思ひ慮る所の事は、多くは人欲の一方面の事である。それ故に且く之に敎ふるに靜坐して思慮を息むることを以てし、靜坐すること久しうして、其心意の稍や落ちつくのを待つのである。けれども、只だ茫漠として目當ても無く靜に守つて、枯木死灰の如くであるのも、無益のことである。是非とも彼に省察克治することを敎へねばならぬのである。省察克治の工夫は、如何なる時にも間斷すること無く、盜賊を除き去るが如く、是非とも之を掃ひ除きて奇麗さつぱりと無くしてしまふ意志が有らねばならぬのである。何事も無い時には、女色を好み財貨を好み功名を好む等の私念をば、一一追ひ究め搜し尋ねて引き出し來つて、是非とも其病氣の根源を拔き去つて永久に復び病氣の起らぬやうにすることが必要であつて、そこで始めて愉快と爲すべきである。常に、猫が鼠を捕へるのに、眼を凝らして視、耳をすまして聽いて居るやうに、ちよつとでも私欲の一念が萌し動く有るときは、卽坐に征服してしまひ、釘を斬り鐵を截るがごとく痛切に工夫し、姑くも私欲の念が業をして自分を誘惑するのを許してはならぬ、私欲の念を心の中にかくまつて置いてはならぬ、私欲の念が外に出る路を自由にしてはならぬのである。是非とも根絕やしにせねばならぬのである。斯くてこそ眞實に工夫を爲すのであり、奇麗さつぱりと掃除することが出來るのであつて、そして克治す可き私欲の念が全く無いやうになつたならば、自然に、端坐して手を拱くといふべきゆつたりとする時があるであらう。周易繫辭傳には、「天下何をか思ひ何をか慮らん」と曰つてあるけれども、これは初學の時の事では無いのである。初學の時には、是非とも思ふことが必要である。省察克治は、卽ち誠を思ふのであり、只だ一つの天理を思ふのである。天理が純粹完全であるに至つたならば、何の思ふべきことも無く何の慮るべきこと

も無いのである。最初からさうは行かぬのである。最初には是非とも痛切なる省察克治の工夫を必要とするのである』と。

澄問。有人夜怕鬼者。奈何。先生曰。只是平日不能集義。而心有所慊故怕。若素行合於神明。何怕之有。子莘曰。正直之鬼不須怕。恐邪鬼不管人善惡。故未免怕。先生曰。豈有邪鬼能迷正人乎。只此一怕卽是心邪。故有迷之者。非鬼迷也。心自迷耳。如人好色。卽是色鬼迷。好貨卽是貨鬼迷。怒所不當怒。是怒鬼迷。懼所不當懼。是懼鬼迷也。

〔訓讀〕澄問ふ、『人の、夜、鬼を怕るる者有り。奈何。』先生曰はく、『只だ是れ平日、義を集むる能はずして、心、慊さる所有るが故に怕る。若し素行、神明に合せば、何の怕るることか之れ有らん。』子莘曰はく、『正直の鬼は怕るるを須ひず。恐らくは邪鬼は人の善惡に管せざらん。故に未だ怕るるを免れず。』先生曰はく、『豈に邪鬼の能く正人を迷はす有らんや。只だ此の一の怕るるは、卽ち是れ心邪なればなり。故に之を迷はす者有り。鬼の迷はすに非ざるなり。心自ら迷ふのみ。人の・色を好むが如きは、卽ち是れ色鬼の迷はすなり。貨を好むは、卽ち是れ貨鬼の迷はすなり。當に怒るべからざる所を怒るは、是れ怒鬼の迷はすなり。當に懼るべからざる所を懼るるは、是れ懼鬼の迷はすなり。』

〔註解〕澄問、有人夜怕鬼者、奈何。先生曰、只是平日不能集義、而心有所慊故怕、若素行合於神明、何怕之有。鬼は天神人鬼の鬼であつて、人の死後の靈をさすのであるが、ここにては人鬼及び物怪を併せ稱したのである。義を集むる能はずして、心、慊ざる所有るが故に怕る。孟子公孫丑上篇に、『我善く吾が浩然の氣を養ふ。其の氣たるや、至大至剛、直を以て養ひて害する無ければ、則ち天地の間に塞がる。其の氣たるや、義と道とに配す。是無ければ餒うるなり。是れ集義の生ずる所の者にして、義襲ひて之を取るに非ざるなり。行、心に慊らざる有れば、則ち餒う』とあるに本づく。義を集むとは、猶ほ善を積むと言ふが如し。事事、皆、義に合はんことを欲するのである。慊は「こころよし」『あきたる』とも訓じ、「こころよからず」『あきたらず』とも訓ずる字で、正反對の二つの訓を具へて居るのであつて、ここに慊とあるも、孟子に不慊とあるも、同じ意である。正反對の二つの訓を具へて居る字は、漢字の中に、往往有るのであつて、たとへば亂の字を「みだる」とも訓じ、又「をさむ」とも訓ずるなども、其類である。素行は平素の行。神

明は神をいふ。」澄は問うた、『夜間に鬼を怕れる人が有りますが、如何なる故でありますか』と。先生は曰はれた、『それは、只だ平生、義を集め善を積むことが出來ずして、心に自ら不滿足な所が有るから怕れるのである。若し平素の行爲が正しくして天地神明に合ふときは、何の怕るることが有らうぞ』と。○子莘曰、正直之鬼不須怕、恐邪鬼不管人之善惡、故未免怕。先生曰、豈有邪鬼能迷正人乎云云。子莘は、姓は馬、名は明衡、子莘は字である。思聰の子、閩中の人である。王子の弟子で、正德十二年、進士と爲り、太常博士を授けられた。世宗の時に、事に坐して謫せられた。管せずは、かかはらざること。色鬼、貨鬼、怒鬼、懼鬼は、皆、外に在る鬼に非ず、己の心中に在るのである。關尹子五鑑篇に、『心、吉凶に蔽はるる者は、靈鬼、之を攝す。心、男女に蔽はるる者は、淫鬼、之を攝す。心、幽憂に蔽はるる者は、沈鬼、之を攝す。心、放逸に蔽はるる者は、狂鬼、之を攝す。心、嗜欲に蔽はるる者は、奇鬼、之を攝す。心、藥餌に蔽はるる者は、物鬼、之を攝す』とあり。」すると子莘が曰つた、『鬼の中にも正直なる鬼と邪曲なる鬼と有りませう。正直なる鬼は、正しい人を迷はすことは無いから、怕るるに及びませぬ。然し邪曲なる鬼は、人の善惡にかまはず無暗に人に禍を加へるかも知れませぬから、怕れないわけには參りませぬ』と。先生は曰はれた、『どうして邪曲の鬼が正しい人を迷はすことが出來るといふ事が有らうぞ。只だ此の一つの怕れるのは、即ち自分の心が邪であるからである。それ故に之を迷はす者が有るのである。鬼が人を迷はすのでは無く、自分の心が自ら迷ふのである。たとへば人が女色を好むのは、即ち自分の心の中に在る好色の鬼が迷はすのである。財貨を好むのは、即ち自分の心の中に在る財貨の鬼が迷はすのである。怒るべきに非ざる事を怒るのは、即ち自分の心の中に在る怒の鬼が迷はすのである。懼るべきに非ざる事を懼れるのは、自分の心の中に在る懼の鬼が迷はすのである』と。

定者。心之本體。天理也。動靜所遇之時也。

〔訓讀〕定は、心の本體、天理なり。動靜は遇ふ所の時なり。

〔註解〕定の字は、もと、大學の『止まるを知りて後に定まる有り』より出でたのである。定は安定することである。諸家の說では寂然不動と解して居るが、それでも差支は無いけれども、寂然不動といふときは、動靜の靜の意に解せられる恐があるのである。或は動、或は靜のままで、寂然不動であることが了解せられるならば、この定を寂然不動と解しても宜しいのである。」安定して居ることが心の本體である。それが即ち天理である。心が或は動き或は靜なるは、遇ふ所の時に因るのである。遇ふ所の時に因つて心は或は動き或は靜であるけれども、心の本體は常に安定して居るのである。○此章は、程明道先生の定性書の中の『動にも亦定まり、靜にも亦定まる』

の言に就きて、王子が說を立てられたのである。標註に、『案ずるに明道先生の定性の一書、此語一句に道ひ盡す』とあり。

澄問學庸同異。先生曰。子思括大學一書之義。爲中庸首章。

〔訓讀〕澄、學庸の同異を問ふ。先生曰はく、『子思、大學一書の義を括して、中庸の首章と爲す。』

〔註解〕學庸は大學と中庸とをいふ。子思は、名は伋、伯魚の子、孔子の孫、學を曾子に受く。中庸は子思の作る所なり。」澄は大學と中庸との同異を問うた。先生は曰はれた、『子思は大學の一書を概括して中庸の最初の一章と爲したのである』と。○龍谿全書卷二に曰はく、『中庸の「其の睹ざる所を戒愼し、其の聞かざる所を恐懼す」は、大學の格物致知誠意の功なり。「未だ發せざる、之を中と謂ひ、發して皆、節に中る、之を和と謂ふ」は、正心修身の事なり。「中和を致し、天地位し、萬物育す」は、齊家治國平天下の事なり』と。佐藤一齋曰はく、『天命の性は、卽ち明德なり。性に率ひ道を修むるは、卽ち明明德親民の・至善に止まるなり。戒愼恐懼は、卽ち格致誠正修なり。天地位し、萬物育すは、卽ち治國平天下なり』と。

問。孔子正名。先儒說。上告天子。下告方伯。廢輒立郢。此意如何。先生曰。恐難如此。豈有一人致敬盡禮待我而爲政。我就先去廢他。豈人情天理。孔子既肯與輒爲政。必已是他能傾心委國而聽。聖人盛德至誠。必已感化衞輒。使知無父之不可以爲人。必將痛哭奔走。往迎其父。父子之愛。本於天性。輒能悔痛眞切如此。蒯聵豈不感動底豫。蒯聵既還。輒乃致國請戮。聵已見化於子。又有夫子至誠調和其間。當亦決不肯受。仍以命輒。群臣百姓。又必欲得輒爲君。輒乃自暴其罪惡。請於天子。告於方伯諸侯。而必欲致國於父。聵與群臣百姓。亦皆表輒悔悟仁孝之美。請於天子。告於方伯諸侯。必欲得輒而爲之君。於是集命於輒。使之復君衞國。輒不得已。乃如後世上皇故事。率群臣百姓。尊聵爲太公。備物致養。而始退復其位焉。則君君臣臣。父父子子。名正言順。一舉而可爲政於

天下矣。孔子正名。或是如此。

〔訓讀〕問ふ、『孔子、名を正すこと、先儒說く、「上、天子に告げ、下、方伯に告げ、輒を廢し郢を立てん」と。此意如何。』先生曰はく、『恐らくは此の如くなり離からん。豈に一人、敬を致し體を盡し我を待ちて政を爲すに、我就きて先づ去つて他を廢する有らんや。豈に人情天理ならんや。孔子既に肯て輒の興に政を爲さば、必ず已に是れ他能く心を傾け國を委ねて聽かん。聖人の盛德至誠、必ず已に衞輒を感化して、父を無みするの以て人と爲す可からざるを知らしめん。必ず將に痛哭奔走して、往きて其父を迎へんとす。父子の愛は、天性に本づく。輒能く悔痛眞切なること此の如くならば、蒯聵豈に感動して豫を底さざらんや。蒯聵既に還らば、輒乃ち國を致して戮を請はん。聵既に子に化せられ、又、夫子の至誠にして其間を調和する有り、當に亦決して肯て受けざるべく、仍つて以て輒に命ぜん。群臣百姓、又、必ず、輒を得て君と爲さんことを欲せん。輒乃ち自ら其罪惡を暴はし、天子に請ひ、方伯諸侯に告げて、必ず・國を父に致さんと欲せん。聵、群臣百姓と、亦、皆、輒が悔悟仁孝の美を表して、天子に請ひ、方伯諸侯に告げて、必ず・輒を得て之を君と爲さんと欲せん。是に於て、命を輒に集め、之をして復た衞國に君たらしめん。輒、已むを得ず、乃ち後世の上皇の故事の如くし、群臣百姓を率ゐて、聵を尊びて太公と爲し、物を備へ養を致して、始めて退きて其位に復らば、則ち君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり、名正しく言順ひ、一舉して、政を天下に爲す可からん。孔子、名を正すこと、或は是れ此の如くならん。』

〔註解〕問。孔子正名。先儒說。上告天子。下告方伯。廢輒立郢。此意如何。論語子路篇に、『子路曰はく、「衞君、子を待ちて政を爲さば、子は將に奚をか先にせんとする。」子曰はく、「必ずや名を正さんか。」子路曰はく、「是有るかな、子の迂なるや。奚ぞ其れ正さん。」子曰はく、「野なるかな由や。君子は其の知らざる所に於て、蓋し闕如するなり。名、正しからざれば、則ち言、順ならず。言、順ならざれば、則ち事、成らず。事、成らざれば、則ち禮樂、興らず。禮樂、興らざれば、則ち刑罰、中らず。刑罰、中らざれば、則ち民、手足を措く所無し。故に君子は之に名づくれば、必ず言ふ可きなり。之を言へば、必ず行ふ可きなり。君子は、其言に於て、苟くもする所無きのみ」と』とあり。朱子の集註に、『胡氏曰はく、「衞の世子蒯聵、其母南子の淫亂なるを恥ぢ、之を殺さんと欲し、果さずして出奔す。靈公、公子郢を立てんと欲す。郢辭す。公卒し、夫人、之を立つ。又辭す。乃ち蒯聵の子輒を立てて以て蒯聵を拒ぐ。夫れ蒯聵は母を殺さんと欲して、罪を父に得、而して輒は國に據りて以て父を拒ぐ。皆、父を無みするの人なり。其の國を有つ可からざるや、明かなり。夫子、政を爲し、而して名を正すを以て先と爲せば、必ず將に其事の本

末を具して諸(これ)を天王に告げ、方伯に請ひ、公子郢に命じて之を立てんとせん。則ち人倫正しく、天理得、名正しく言順にして而して事成らん。夫子、之に告ぐるの詳かなること、此の如し。而るに子路は終に喩らざるなり。故に輒に事へて去らず、卒に其難に死す。徒らに、これを食めば其難を避けざるの・義たるを知りて、輒の食を食むの・非義たるを知らざるなり」と』とあり。胡氏は名は寅、字は明仲、五峰と號し、論語詳說を著はす。此章は、胡氏の此說の當否を論ずるのである。先儒とは、卽ち胡氏をいふ。方伯は、禮記王制篇に、『千里の外に方伯を設く』とあり、一方の諸侯を統轄する職である。」澄は問うた、『昔、子路が孔子に、「衞君が夫子を待つて政を爲さんとせば、夫子は何を先務となさいますか」と問うたとき、孔子は、「必ずや名を正さん」と仰せられました。此事に就きまして、先代の儒者は、「孔子は、上は天子に申し上げ、下は方伯に申して、衞君輒を廢して別に公子郢を立てられるであらう」と申して居ります。此意は如何で御座いますか、孔子の意に叶つて居りませうか』と。○先生曰、恐難如此、豈有一人致敬盡禮待我而爲政、我就先去廢他、豈人情天理云云。父子の愛は天性に本づくは、孝經に、『父子の道は天性なり』とあるに本づく。豫を底すは、悅樂を致すなり。孟子離婁上篇に、『舜、親に事ふるの道を盡して、瞽瞍、豫を底す。瞽瞍、豫を底して、天下化す。瞽瞍、豫を底して、天下の・父子たる者定まる。此を之れ大孝と謂ふ』とあるに本づく。命を集むは、尙書太甲上に『用つて大命を集めて、萬方を撫綏す』とあるに本づく。註に、『天、其德を視て、用つて大命を集めて、以て天下を有つ』とあり。公論の定むる所によつて、天命も此に集まるをいふ。後世は、孔子の時より見て後の世なるをいふ。上皇。漢の高祖六年、太公を尊びて、太上皇と爲す。故事は先例の意。君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり。論語顏淵篇に出づ。」先生は曰はれた、『恐らくはさうすることは六かしいであらう。一人の人が我に對して十分に尊敬の誠を致し十分に禮を盡して、我を待つて一國の政事をしようとするのに、我は其人の處に行き、我を信賴する其人を先づ廢するといふ事が、どうして有らうぞ。これは人情でも無く、天理でも無いのである。孔子が既に衞侯輒を輔けて國政を爲すことを承諾されたならば、必ず已に輒は能く心を傾けて一國を委ねて孔子の言に從ふであらう。さうすれば、聖人の大德至誠は、必ず已に衞侯輒を感化して、父を無いがしろにすることは人倫に背いて居るを知らしめたであらう。さすれば、衞侯輒は、必ず將に痛み歎きて奔つて往つて父君蒯聵を迎へようとするであらう。父と子との愛情は、天性に本づきたるものであるから、輒が能く悔悟し痛傷すること此の如く眞實切實であるならば、父君蒯聵は必ずそれに感動して悅樂するに至るであらう。蒯聵が既に衞國に還つたならば、輒は乃ち衞國を蒯聵に差出して誅戮を請ふであらう。蒯聵は既に其子輒に感化せられ、又、孔夫子が至誠を以て父子の間を調和されるのであるから、蒯聵も亦決して國を受けることを承諾せず、仍ほ輒に命じて位に

在らしめようとするであらう。群臣百姓も、必ず輒を君としておきたいと思ふであらう。輒は、そこで、自ら其罪惡をあらはして、天子に請ひ、方伯・諸侯に告げて、是非とも國を父君蒯聵に差上げようとするであらう。蒯聵は、群臣百姓と與に、亦、輒が悔悟して仁孝なる美德を表明して、天子に請ひ、方伯・諸侯に告げて、是非とも輒を君としようとするであらう。そこで、天子・方伯・諸侯は、公論衆望の結果、天命は輒に在りと爲して、輒をして復た衛國に君たらしめるであらう。輒は、已むを得ずして、後世の太上皇の例の如く、群臣百姓を引率して、蒯聵に尊號を上りて太公と爲し、十分に種種の物を具備して孝養を致し、始めて退いて衛侯の位に復ることになるであらう。さうすると、君は君の道に叶ひ、臣は臣の道に叶ひ、父は父の道に叶ひ、子は子の道に叶ひ、名は正しく、言は理に順ひ、一擧して政を天下に爲すことが出來るであらう。孔子が名を正すと仰せられたのは、或は此の如くすることであらうかと思ふのである』と。

○此事に就きては、蘇轍の古史にも論あり、『靈公の死するや、衛人、公子郢を立つ。可かず。則ち衛人、輒を立つ。輒にして禮を知らしめば、必ず辭せん。辭すれども獲ずば、必ず逃れん。輒逃れて郢立たば則ち名正しからん。蒯聵を拒ぐと雖も可なり。然りと雖も、孔子、政を爲さば、豈に將に輒を廢して郢を立てんとせんや。其れ亦將に輒に敎へて位を避けて蒯聵を納れしめんとするのみ』云云と曰つて居る。安井息軒の論語集說にも論あり、『(前略)朱子に至りて始めて云ふ、「輒、其父を父とせずして、其祖を祖とす。名實紊る」と。是に於て、又、胡氏が「必ず將に其事の本末を具して、諸を天子に告げ、方伯に請ひ、公子郢に命じて之を立てんとす」との說を引きて、以て名を正すの策と爲すは、則ち大に然らざる者有り。其の迂腐にして事に益無きを論ずる勿く、果して其說の如くせば、子を待ちて政を爲す者は、出公輒に非ずや。輒の・子を待ちて政を爲すは、豈に他有らんや。亦、國を治めて以て身を安んぜんと欲するのみ。孔子、其不義を惡まば、仕へざるに若かんや。苟くも之に仕へば、亦、當に其道を盡して以て之を輔くべし。宜しく仕ふれば卽ち己を待つ者を廢して以て他の公子を立つべからず。果して・言ふ所の如くせば、父子の名は或は正す可からんも、獨り君臣の義を奈何せん。易に曰はく、「機事は密を貴ぶ。君、密ならざれば、其臣を喪ひ、臣、密ならざれば、其身を喪ふ」と。今、身猶ほ未だ仕へず、而して先づ門人と與に、己を待つ所の君を廢するを議するは、唯だ明哲にして身を保つの義に違ふのみならず、其の心を操るの險なること、實に莽操よりも甚だし。稍や人心有る者すら、猶ほ言ふに忍びず。而るに聖人之を爲すと謂ふや。且つ夫れ廢立は大事なり。衛國は衰へたりと雖も、猶ほ巨室世家有り。孔子、羈旅の臣を以て、一旦、其君を廢せんと欲せば、父兄群臣、豈に肯て首を俯して之を聽かんや。此れ皆、理勢の顯然たる者なり。而るに千載の下、一人の・其非を辨ずる者有るを聞かざるは、抑も亦何ぞや』とあり。息軒先生の此論は、實に論語の此章を出

公觀の時の事とせず、靈公の時の事なりとする論の一節なれども、胡氏の說を論ずる所、參考に資す可きを以て、抄錄したのである。

澄在鴻臚寺倉居。忽家信至。言兒病危。澄心甚憂悶。不能堪。先生曰。此時正宜用功。若此時放過。閑時講學何用。人正要在此等時磨鍊。父之愛子。自是至情。然天理亦自有箇中和處。過卽是私意。人於此處多認做天理當愛。則一向憂苦。不知已是有所憂患。不得其正。大抵七情所感。多只是過。少不及者。才過便非心之本體。必須調停適中始得。就如父母之喪。人子豈不欲一哭便死方快於心。然却曰。毀不滅性。非聖人强制之也。天理本體。自有分限。不可過也。人但要識得心體自然增減分毫不得。

〔訓讀〕　澄、鴻臚寺に在りて倉居す。忽ち家信至り、言ふ兒の病危しと。澄、心甚だ憂悶し、堪ふる能はず。先生曰はく、『此時正に宜しく功を用ふべし。若し此時放過せば、閑時の講學何の用ぞ。人は正に・此等の時に在りて磨鍊せんことを要す。父の・子を愛するは、自ら是れ至情なり。然れども天理、亦自ら箇の中和の處有り。過ぐれば卽ち私意なり。人、此處に於て、多く認めて天理當に愛すべしと做せば、則ち一向に憂苦し、已に是れ憂患する所有りて其正を得ざるなることを知らず。大抵、七情の感ずる所、多くは只だ是れ過ぎ、及ばざる者少し。才に過ぐれば便ち心の本體に非ず。必ず須く調停適中して始めて得べし。就ち父母の喪の如きも、人の子は豈に一たび哭して便ち死して方に心に快きを欲せざらんや。然れども却つて曰はく、「毀すれども性を滅ぼさず」と。聖人强ひて之を制するに非ざるなり。天理の本體、自ら分限有り、過ぐ可からざるなり。人は但だ・心體の自然に分毫をも增減し得ざるを識得せんことを要す。』

〔註解〕　澄在鴻臚寺倉居、忽家信至、言兒病危、澄心甚憂悶不能堪。鴻臚寺は、賓客及び凶儀の事を掌る官署、其長官は鴻臚寺卿といふ。寺は官署の意。王子は正德九年に南京鴻臚寺卿と爲る。これは蓋し此時の事であらう。倉居は、一說に、倉卒の居を言ふと解し、暫時寓居の意とするのである。一說には、倉中の居と解す。近思錄に、『伯淳、昔、長安の倉中に在りて閒坐す』といふ語も有れば、後說が是ならんかと思ふ。家信は、故鄉の家よりの通信。憂悶は憂慮煩悶の意。」澄は、暫時、鴻臚寺に在つて倉の中に居たことが居るが、忽ち鄉里の家よりの通信が有つて、澄の

子が病氣重態であると報じて來た。澄は、心甚だ憂へ悶えて、堪へることが出來ない程であつた。○先生曰、此時正宜用功、若此時放過、閑時講學何用、人正要在此等時磨鍊云云。放過はうつちやつておくこと。閑時は平生事變無き時。磨鍊は琢磨鍛鍊。中和は過不及無き程善き節度。憂患する有りて其正を得ずは、大學に、『憂患する所有れば、則ち其正を得ず』とあるに本づく。標註に曰はく、『禮記檀弓上に、「子夏、其子を喪ひて、而して其明を喪ふ。曾子曰はく、爾の子を喪ひ、爾の明を喪ふは、爾の罪なり」と。並に案ず可し』と。七情は、喜・怒・哀・懼・愛・惡・欲をいふ。禮記禮運篇に出づ。才は、纔に。調停は、過ぎたるをへらし、及ばざるを增し、ほどよくすること。適中は、程善き所にあてはめること。毀すれども性を滅ぼさずは、哀しみて瘠すれども、生命を絕つに至らざるをいふ。孝經の末章に、『毀すれども性を滅ぼさざるは、此れ聖人の政なり。喪、三年に過ぎざるは、民に終有るを示すなり』とあり、註に、『哀毀すること情に過ぎ、性を滅ぼして死するは、皆、孝道を虧く。故に聖人、禮を制し敎を施し、殞滅するに至らしめず。三年の喪は、天下の達禮にして、不肖をして企て及び、賢者をして俯して從はしむ。夫れ孝子は終身の憂有り。聖人、三年を以て制と爲すは、人をして終竟の限有るを知らしむるなり』とあり。」先生は曰はれた、『此時は正に工夫を用ひるに宜しい時である。若し此時に徒らに打ち遣つて置くならば、平生無事の時の學問の講究は、何の役にも立たぬのである。人は、正に、此の如き時に於て磨礪鍛鍊することを必要とするのである。父が子を愛するのは、自然に人情の至極なるものである。然れども天理の上に於ても、亦、自然に一つの程善き過不及無き中和の處が有るのである。その中和の處を過ぐるときは、卽ち私意たるを免れず、天理を失ふのである。人は、此の如き場合に於て、多くは認めて天理に於て當然に愛すべきであると思ふので、ひたすら憂へ苦しむのである。それが已に大學に謂はゆる憂患する所有りて心が其正しきを得ざる弊に陷つて居ることを知らないのである。大抵、喜怒哀懼愛惡欲の七情の感ずる所は、多くは只だ度に過ぎるのであつて、及ばざる者は少いのである。少しでも度に過ぐるときは、中正を失ひ、心の本體ではないのである。是非とも過ぎたるを減らし及ばざるを增して中正なる程善き處に適當するやうにして始めて心の本體に叶ふのである。たとへば父母の喪の如きも、人の子たる者は、一たび慟哭して直に死んでしまつて始めて心に快しと思はぬでは無い。然るに孝經には、「毀すれども性を滅ぼさず。父母の喪を哀んで瘠せ衰へるけれども、生命を失ふほどには至らぬ」と曰つてある。これは聖人が强ひて抑制されたのでは無いのである。天理の本體には、自然に適當の限度があつて、それを過ぐることは出來ないからである。されば、人は、但だ、此心の本體は自然に聊かたりとも增減することの出來ないものであることを識り得んことを必要とするのである』と。

不可謂未發之中常人俱有。蓋體用一源。有是體卽有是用。有未發之中。卽有發而皆中節之和。今人未能有發而皆中節之和。須知他未發之中。亦未能全得。

〔訓讀〕未發の中は常人俱に有すと謂ふ可からず。蓋し體用は一源にして、是體有れば、卽ち是用有り。未發の中有れば、卽ち發して皆節に中るの和有り。今の人、未だ發して皆節に中るの和有る能はず。須く知るべし、他の未發の中も、亦未だ全くし得ざることを。

〔註解〕未發の中、發して皆節に中る。中庸に、『喜怒哀樂の未だ發せざる、之を中と謂ひ、發して皆節に中る、之を和と謂ふ』とあり。體用一源。程伊川先生の易傳の序に曰はく、『至つて微なる者は理なり。至つて著はるる者は象なり。體用一源、顯微、間无し』云云とあり。體は本體、用は其はたらき。體あれば必ず用あり、用あれば必ず體あり、體と用とは根源を一にするのである。」喜怒哀樂未だ發せざるの中は一般普通の人皆有して居ると謂ふことは出來ないのである。蓋し本體と作用とは同一の根源の者であり、この本體が有れば、卽ちこの作用が有るのである。本體の清き者は其作用も清いのであり、本體の濁つて居る者は其作用も濁つて居るのである。作用の清いことによつて、本體の清いことを推測することが出來、作用の濁つて居ることによつて、本體の濁つて居ることが知られるのである。未だ發せざるの中が有れば、卽ち發動して皆節度に適中するの和が有るべき筈である。然るに、今の人は、未だ發動して皆節度に適中するの和があることが出來ないのである。されば、彼の未だ發せざる中も未だ十分に全くすることの出來ないことを知るべきである。

易之辭是初九潛龍勿用六字。易之象是初畫。易之變是値其畫。易之占是用其辭。

〔訓讀〕易の辭は是れ『初九、潛龍、用ふる勿かれ』の六字なり。易の象は是れ初畫なり。易の變は是れ其畫に値ふなり。易の占は是れ其辭を用ふるなり。

〔註解〕周易繫辭傳に、『易に聖人の道四有り。以て言ふ者は其辭を尙び、以て動く者は其變を尙び、以て器を制する者は其象を尙び、以て卜筮する者は其占を尙ぶ』とあり。此章は、易の辭・象・變・占に就きて論ずるのである。初九、潛龍、用ふる勿かれは、乾卦初爻の辭。初畫は六畫の卦の下より數へて最初の畫をいふ。ここに初九・初畫を言ふは、是れ其例を擧げたのであつて、初九・初畫に限るのでは無い。」周易の辭・象・變・占に就いて、從來の儒者は、いろいろな

小六かしい理窟を竝べ立ててゐるが、小むつかしい理窟を竝べ立てるに及ばぬことであつて、易の辭とは、たとへば『初九、潛龍、用ふる勿かれ』の六字の類をいふのである。易の象とは、たとへば初の一畫の類をいふのである。易の變とは、筮を數へて卦を立つるに其畫に値ひたることである。易の占とは、其卦爻の辭を用ふるのである。

夜氣是就常人說學者能用功則日間有事無事皆是此氣翕聚發生處聖人則不消說夜氣

〔訓讀〕夜氣は是れ常人に就きて說く。學者能く功を用ふれば、則ち日間、事有るも事無きも、皆是れ此氣の翕聚發生の處なり。聖人は則ち夜氣を說くを消ひず。

〔註解〕夜氣。孟子告子上篇に、『牛山の木は嘗て美なり。其の大國に郊たるを以て、斧斤、之を伐る。以て美と爲す可けんや。是れ其の日夜の息する所、雨露の潤ほす所、萌蘖の生ずる無きに非ざれども、牛羊、又、從ひて之を牧す。是を以て、彼の若く濯濯たるなり。人、其の濯濯たるを見るや、以て未だ嘗て材有らずと爲す。此れ豈に山の性ならんや。人に存する者と雖も、豈に仁義の心無からんや。其の其良心を放つ所以の者、亦、猶ほ斧斤の・木に於けるがごときなり。旦旦にして之を伐る、以て美と爲す可けんや。其の日夜の息する所、平旦の氣、其好惡、人と相近き者幾ど希し。則ち其の旦晝の爲す所、之を梏亡する有り。之を梏して反覆すれば、則ち其夜氣、以て存するに足らず。夜氣、以て存するに足らざれば、則ち其の禽獸を遠ること遠からず。人、其の禽獸のごときを見て、以て未だ嘗て才有らずと爲すは、是れ豈に人の情ならんや。故に苟くも其養を得れば、物として長ぜざる無く、苟くも其養を失へば、物として消せざる無し。孔子曰はく、「操れば則ち存し、舍つれば則ち亡び、出入、時無く、其鄉を知る莫しとは、惟れ心の謂か」と』とあるに本づく。人の良心が外物の蔽ふ所と爲りて其本體を失ふことありと雖も、夜間、外物の紛擾を受けざる靜寂なる境に入りて、再び回復して明かなるを得る、之を夜氣と謂ふ。日間は晝間。翕は、あつまること。消は用ふるなり。」孟子の夜氣の說は、普通一般の人に就いて說かれたのである。學者が若し能く工夫するときは、晝間に事有るも事無きも、皆、此正しい氣が聚まり發生する處である。能く工夫すれば、如何なる時、如何なる處に於ても、此心の天理を存養することを得るのである。聖人に在つては、其心が純然たる天理であるから、夜氣を說くを要しないのである。

澄問操存舍亡章曰出入無時莫知其鄉此雖就常人心說學者

亦須是知得心之本體。亦元是如是。則操存功夫。始沒病痛。不可便謂出爲亡入爲存。若論本體。元是無出無入的。若論出入。則其思慮運用是出。然主宰常昭昭在此。何出之有。既無所出。何入之有。程子所謂腔子。亦只是天理而已。雖終日應酬。而不出天理。卽是在腔子裏。若出天理。斯謂之放。斯謂之亡。又曰。出入亦只是動靜。動靜無端。豈有鄉邪。

〔訓讀〕澄、操存舍亡の章を問ふ。曰はく、『出入、時無く、其鄉を知る無しとは、此れ常人の心に就きて說くと雖も、學者、亦、須く是れ心の本體亦元是れ此の如きを知得すべし。則ち操存の功夫、始めて病痛沒し。便ち出づるを謂ひて亡ぶと爲し入るを存すと爲す可からず。若し本體を論ずれば、元是れ出づる無く入る無き的なり。若し出入を論ずれば、則ち其思慮運用は是れ出づるなり。然れども主宰常に昭昭として此に在れば、何の出づることか之れ有らん。既に出づる所無ければ、何の入ることか之れ有らん。程子の謂はゆる腔子も、亦只是れ天理のみ。終日應酬すと雖も、而も天理を出でざれば、卽ち是れ腔子の裏に在るなり。若し天理を出づれば、斯に之を放と謂ひ、斯に之を亡と謂ふ。』又曰はく、『出入も亦只是れ動靜なり。動靜、端無し。豈に鄉有らんや。』

〔註解〕操存舍亡は、孟子告子上篇に、『孔子曰はく、操れば則ち存し、舍つれば則ち亡び、出入、時無く、其鄉を知る莫きは、惟だ心の謂か』とあるをいふ。前章の註解を參照せよ。人の心は善く操りて收むるときは、存し、これに反して放任して打棄ておくときは、亡びて無きが如く、忽ち出でて彼に在り、忽ち入りて此に在り、其の在る處を測ること莫きは惟だ心を然りと爲す、との意。鄉は鄉里にして、在る處の意。又、嚮と通じ、向ふ所の意に解するも亦通ず。標註に、『二程全書外書に曰はく、「范淳夫の女、孟子の、出入すること時無く、其鄉を知る莫きは、惟だ心の謂かといふを讀み、人に語りて曰はく、孟子は心を識らず。心は豈に出入有らんやと。先生、之を聞きて曰はく、此女は孟子を識らずと雖も心を識る」と』とあり。腔子、近思錄存養類に、『程子曰はく、心は腔子の裏に在らんことを欲す』とあり、又、爲學類に、『明道先生曰はく、滿腔子是れ惻隱の心』とあり。腔子は軀殼といふが如し。卽ち身體の意にして、腔子の裏に在るを要すとは、心が身體の中に在りて外に馳せざるを云ふ。猶ほ放心する勿かれといふが如し。標註に曰はく、『腔子も亦只是れ天理とは、今、案ずるに、腔子とは軀殼を謂ふ。是語蓋し活說するのみ。亦只是の三字、見る可し。然れども人は是れ天地の心なれば、則ち實に天を以て軀殼と爲すとは、

豈に虛語ならんや』と。動靜、端無し。近思錄道體類に、『動靜、端無く、陰陽、始無し。道を知る者に非ずば、孰か能く之を識らん』とあり、註に、『動靜相推し、陰陽密に移り、間斷有る無し』とあり。」澄は、孟子の『操れば則ち存し舍つれば則ち亡ぶ』の章に就いて問うた。先生は曰はれた、『心は出入すること定まりたる時無く、忽ち出でて彼に在り、忽ち入りて此に在り、其の在る處を測ること莫しと云ふのは、普通一般の人に就いて說いたのであるけれども、學者も亦、必ず心の本體も亦元來此の如きものであることを知らねばならぬのである。さうするときは、心を操りて存するの工夫に、始めて病無きことを得るのである。これを知らずして、只だ徒らに心を操りて存しようとするのは、病が有るのである。ここに出入といふのは、必ずしも直に心の出づるを亡ぶと謂ひ心の入るのを存すと謂ふことは出來ないのである。若し心の本體を論ずるならば、心は元來外に出づることも無く內に入ることも無い者である。若し强ひて出入を論ずるならば、心が思慮し運轉發用するは、心が出でたと見ても善からう。けれども、之を主宰する者卽ち心は常に昭昭として明かに此に在るのであるから、實は出づるといふことは無いのである。旣に出づる所が無いのであるから、入るといふことも無いのである。程子は、心は腔子の裏に在らんことを要す、と曰はれたが、腔子といふのも、亦只だ天理である。それ故に終日、事物に接して忙がしく應對するとしても、心が天理の外に出でなかつたならば、卽ち心が腔子の裏に在るのである。若し心が天理の外に出づるときは、之を心が放たれたと謂ひ、心が亡びたと謂ふのである』と。又、先生は語を繼いで曰はれた、『心の出入といふのも亦只だ心の動靜のことである。心の動くを出といひ、心の靜なるを入といふのである。心の動くと靜なるとは、靈妙不測にして、これからが動、これからが靜といふ端は無いのであるから、一定したる心の在り處は無いのである』と。○一說に、澄問操存舍亡章曰出入無時莫知其鄉を、『澄問ふ、「操存舍亡の章に曰はく、出入、時無く、其鄉を知る莫しと」』と讀み、これまでを問とし、『此れ常人の心に就きて說くと雖も』以下を王子の答とする說あれども、これは誤讀である。

王嘉秀問。佛以出離生死誘人入道。仙以長生久視誘人入道。其心亦不是要人做不好。究其極至。亦是見得聖人上一截。然非入道正路。如今仕者。有由科。有由貢。有由傳奉。一般做到大官。畢竟非入仕正路。君子不由也。仙佛到極處。與儒者略同。但有了上一截。遺了下一截。終不似聖人之全。然其上一截同者。不可誣也。後

世儒者。又只得聖人下一截。分裂失眞。流而爲記誦詞章功利訓詁。又卒不免爲異端。是四家者。終身勞苦。於身心無分毫益。視彼仙佛之徒。淸心寡欲。超然於世累之外者。反若有所不及矣。今學者不必先排仙佛。且當篤志爲聖人之學。聖人之學明。則仙佛自泯。不然則此之所學。恐彼或有不屑。而反欲其俯就。不亦難乎。鄙見如此。先生以爲何如。先生曰。所論大略亦是。但謂上一截下一截。亦是人見偏了如此。若論聖人大中至正之道。徹上徹下。只是一貫。更有甚上一截下一截。一陰一陽之謂道。但仁者見之。便謂之仁。智者見之。便謂之智。百姓又日用而不知。故君子道鮮矣。仁智豈可不謂之道。但見得偏了。便有弊病。

〔訓讀〕　王嘉秀問ふ、『佛は生死を出離するを以て人を誘ひて道に入れ、仙は長生久視を以て人を誘ひて道に入る。其心、亦、是れ人が不好を做すを要するにあらず。其極至を究むれば、亦是れ聖人の上一截を見得す。然れども道に入るの正路に非ず。今の仕ふる者の如き、科に由る有り、貢に由る有り、傳奉に由る有り、一般に、大官に到ることを做せども、畢竟、仕に入るの正路に非ず、君子、由らざるなり。仙佛は極處に到れば、儒者と略ぼ同じ。但だ上一截を有して、下一截を遺れ、終に聖人の全きに似ず。然れども其一截の同じきは、認ふ可からざるなり。後世の儒者、又只だ聖人の下一截を得、分裂して眞を失ひ、流れて記誦・詞章・功利・訓詁と爲る。亦、卒に・異端たるを免れず。是四家は、身を終るまで勞苦して、身心に於て、分毫の益無し。彼の仙佛の徒の、淸心寡慾にして、世累の外に超然たる者に視ぶれば、反つて・及ばざる所有るが若し。今の學者、必ずしも先づ仙佛を排せず、且く當に志を篤くして聖人の學を爲すべし。聖人の學明かならば、則ち仙佛自ら泯びん。然らずば則ち此の學ぶ所は、恐らくは彼或は屑しとせざる有らん。而るに反つて・其の俯して就かんことを欲するは、亦難からずや。鄙見は此の如し。先生、以て何如と爲す。』先生曰はく、『論ずる所、大略、亦是なり。但だ上一截下一截と謂ふは、亦是れ人見ること偏することこの如し。若し聖人の大中至正の道を論ずれば、上に徹し下に徹し、只だ是れ一貫にして、更に甚の上一截下一截有らん。一陰一陽之を道と謂ふ。但だ仁者は之を見て、便ち之を仁と謂ひ、智者は之を見て、便ち之を智と謂ふ。百姓は又日々に用ひて而も

知らず。故に君子の道鮮し。仁智は豈に之を道と謂はざる可けんや。但だ見得すること偏なれば、便ち弊病有り。』

〔註解〕　王嘉秀問、佛以出離生死、誘人入道。王嘉秀の王は姓、嘉秀は字なるべきも、名及び鄉貫等すべて詳かならず。仙は道家をいふ。長生久視は、老子に出づ。久視は老いざるをいふ。不好は不善。上一截は道の精微なる處をいひ、下一截は道の卑近なる處をいふ。一截は一段といふが如し。近思錄辨異端類に、『明道先生曰はく、「釋氏は唯だ上達を務めて、下學無し。然れば則ち其上達の處、豈に是有らんや」と。又曰はく、「佛は一箇の覺の理有り、以て敬以て內を直くす可し。然れども義以て外を方にする無し。其の內を直くする者、之を要するに其本、亦、是ならず」と』とあり。科は科試に由りて及第すること。貢は鄉貢、地方より薦擧せらるること。傳率は官官等の手引によりて出でて仕ふること。仕に入るの正路は、願問禮聘等によつて出で仕ふること孔孟の如きをいふ。記誦とは古書を記憶諳誦する學をいふ。詞章とは文章詩賦を作るを主とする學をいふ。功利は功名利欲を得んとして沒沒たるの學をいふ。訓詁とは專ら古書の字義の穿鑿を主とする學をいふ。異端は、聖人の道と其端を異にする者をいふ。異端の字は、論語爲政篇に、『異端を攻むるは、斯れ害なるのみ』とあるに本づく。俯して就くは、高き者が自ら屈して、卑き者に從ふをいふ。」王嘉秀は問うた、『佛敎は、生死を解脫し輪廻を免れることを以て人を誘導して道に入らしめ、仙道は長生不老を以て人を誘導して道に入らしめるのでありますが、其心は、亦、人に不善を爲しめようとするのではありませぬ。其道の奧義を究むるときは、これも亦、聖人の道の上の一截卽ち精微なる所を見得たるものであります。けれども佛敎や仙道は、道に入るの正しい路では無いのであります。たとへば今の仕官する者が、或は科第に由るもの有り、或は貢擧に由るもの有り、或は傳率に由るもの有り、皆一樣に、大官に到るのであるけれども、畢竟、仕官する正しい路では無いので、君子は其路に由らないのと同じいのであります。仙道や佛敎は、至極の處に到るときは、儒者と略ぼ同じいのであるが、但だ彼等の道は、上の一截だけを有して、下の一截卽ち卑近なる道を遺して居るのであつて、終に聖人の道の完全なのには及ばないのであります。けれども彼等の道の上の一截が聖人の道の下の一截だけを得、更に之を分裂して眞實なる道を失ひ、その末流は、或は記誦、或は詞章、或は功利、或は訓詁の學と爲り、これも亦、卒に聖人の道と異なりたる邪道たることを免れないのであります。記誦・詞章・功利・訓詁の學者は、終身勞苦して學問を勤めるけれども、自分の身に於ても心に於ても、些少の利益も無いのでありまして、彼の仙道・佛敎の徒の、淸心寡慾にして、世間の煩累の外に超然たる者に比較すれば、卻つて及ばない所が有るやうに見えます。それ故に、今の學者は、必ずしも先づ仙

道・佛教を排斥するに及ばぬのであつて、兎に角、志を篤くして聖人の道を學ぶべきであります。聖人の學が明かになつたならば、仙道・佛教は自然に滅びるのでありませう。さうでないならば、今の學者の學ぶ所の者は、恐らくは彼等仙道・佛教家の或は屑しとせざるものがありませう。然るに反つて仙道・佛教を學ぶ者をして高尚なる學問を捨てて今の學者の學ぶ所の卑近なる學問に就かせようとするのは、六かしい事ではありませぬか。私は斯う思ひますが、先生は如何御考へになりますか』と。○先生曰、所論大略亦是、但謂上一截下一截、亦是人見偏了如此云云。上に徹し下に徹しは、徹頭徹尾と云ふと同じ。始より終までとの意。「陰一陽之を道を謂ふ」より、故に君子の道鮮しに至るまでは、周易繫辭傳の語、但だ『但』の字と『便』の字と『又』の字と多し。先生は曰はれた『あなたが論ずる所は、大略、亦宜しいのである。但だ道を二つに分けて上の一截・下の一截と謂ふのは、人が道を見ることが偏るが爲めに此の如き區別を生ずるのである。若し聖人の至極の中正の道を論ずるときは、始より終まで、只だ一を以て貫くのであつて、上の一截だの下の一截だのといふ區別は無いのである。周易繫辭傳には、一たびは陰、一たびは陽、流行往來して極り無く、以て造化の妙を爲す、之を道と謂ふのである。但だ其の宇宙に流行往來して周遍せざる無き道の中に於て、仁者は之を見て、之を仁と謂ひ、智者は之を見て、之を智と謂ひ、百姓は日く用ふるけれども之を知らない、それ故に君子聖人の道を得る者は鮮い、と曰つてあるのである。仁も智も、之を道と謂ふことが出來ないのでは無い。けれども但だ見る所が一方に偏つて居るので、弊害病痛が有るのである』と。

蓍固是易。龜亦是易。

〔訓讀〕蓍は固より是れ易、龜も亦是れ易なり。

〔註解〕蓍は、めどぎ、初め草の名にして、一根に百莖あり、古は之を用ひてうらなひたり。今の筮竹はその代用品なり。龜も亦うらなひの具、龜の甲を燒きて占を爲す、其法は今傳はらず。」蓍を用ひてうらなふことは、固より易であるが、龜を用ひてうらなふことも、方法は異なつて居るけれども、嫌疑を決し猶豫を定むる上から言へば、其理は異なつて居ないのであつて、これも亦易と謂つても宜しいのである。○標註に曰はく『求是編、之を譏る。然れども是れ「固」と「亦」との二字の意を知らざる者なり。先生豈に蓍龜は別無しと言はんや。是言は、嫌疑を決し猶豫を定むるには、則ち龜易、異なる無しと爲すのみ。蓋し蓍龜の殊なるに固滯する者の爲めに之を破するなり』と。

問。孔子謂武王未盡善。恐亦有不滿意。先生曰。在武王自合如此。

曰。使文王未沒。畢竟如何。曰。文王在時。天下三分已有其二。若到武王伐商之時。文王若在。或者不致興兵。必然這一分亦來歸了。文王只善處紂。使不得縱惡而已。

〔訓讀〕問ふ、『孔子、武王を謂ふ、未だ善を盡さずと。恐らくは亦、意に滿たざる有らん。』先生曰はく、『武王に在りては、自ら合に此の如くなるべし。』曰はく、『文王をして未だ沒せざらしめば、畢竟如何。』曰はく、『文王在る時、天下三分して已に其二を有てり。若し武王が商を伐つの時に到りて、文王若し在らば、或は、兵を興すを致さずして、必然這の一分も亦來歸せしならん。文王は只だ善く紂を處し、惡を縱にするを得ざらしめんのみ。』

〔註解〕問、孔子謂武王未盡善、恐亦有不滿意。先生曰、在武王自合如此。論語八佾篇に、『子、韶を謂ふ、美を盡す、又、善を盡すなり。武を謂ふ、美を盡す、未だ善を盡さざるなり』とあり、朱註に、『韶は舜の樂、武は武王の樂。美は聲容の盛、善は美の實するなり。舜、堯に紹ぎて治を致し、武王、紂を伐ちて民を救ふ、其功一なり。故に其樂、皆、美を盡す。然れども舜の德は之を性にするなり。又、揖遜を以てして天下を有つ。武王の德は之に反するなり。又、征誅を以て

して、天下を得。故に其實、同じからざる者有り。程子曰はく、成湯、桀を放ち、惟れ德に慙づる有り。武王も亦然り。故に未だ善を盡さず。堯舜湯武は、其揆一なり。征伐は其の欲する所に非ず。遇ふ所の時然るのみ』とあり。」澄は問うた、『孔子は周の武王を評して、未だ善を盡さずと曰はれましたが、恐らくは亦、孔子の意に不滿足と思はれた所が有るので御座いませう』と。先生は曰はれた、『武王に於ては、自然に此の如くすべきであつたであらう。已むを得なかつたであらう』と。○曰、使文王未沒、畢竟如何。曰、文王在時、天下三分已有其二云云。論語泰伯篇に、『天下を三分して、其二を有ち、以て殷に服事す。周の德は、其れ至德と謂ふ可きなるのみ』とあり、朱註に、『春秋傳に曰はく、文王、商の畔國を率ゐて以て紂に事ふ。蓋し天下、文王に歸する者、六州、荊・梁・雍・豫・徐・楊なり。惟だ青・兗・冀、尙ほ紂に屬するのみ。范氏曰はく、文王の德は、以て商に代るに足り、天、之に與し、人、之に歸す。乃ち取らずして服事す。至德と爲す所以なり』とあり。」澄は曰つた、『若し文王が未だ沒せずして生存して居たならば、畢竟如何なるでありませうか』と。先生は曰はれた、『文王は、御存命中に、天下を三分して、已に其二を有つて居られたのである。若し武王が商を伐たれた時まで、文王が御存命であつたならば、或は兵を興すに至らずして、必ず此の殘りの三分の一も、文王に歸服することになつたであらう。文王は只だ善く紂を處置して、紂をして惡行を縱にすることを得ざらしめたであらう』と。

問。孟子言。執中無權。猶執一。先生曰。中只是天理。只是易。隨時變易。如何執得。須是因時制宜。難預先定一箇規矩在。如後世儒者。要將道理一一說得無罅漏。立定箇格式。此正是執一。

〔訓讀〕 問ふ、『孟子言はく、「中を執りて權無きは、猶ほ一を執るがごとし」と。』先生曰はく、『中は只だ是れ天理、只だ是れ易。時に隨ひて變易す。如何ぞ執り得ん。須く是れ時に因りて宜しきを制すべし。預め先づ一箇の規矩を定めて在り難し。後世の儒者の如きは、道理を將て一一說き得て罅漏無く・箇の格式を立て定めんことを要す。此れ正に是れ一を執るなり。』

〔註解〕 問の上に、一本には『惟乾』の二字有り、『惟乾問ふ』と讀む。執れが是であるか、今日之を詳かにすることは出來ないのであるが、大義に於ては、いづれでも差支無いのである。惟乾の二字が無ければ、陸澄の問とするのである。中を執りて權無きは、猶ほ一を執るがごとし。孟子盡心上篇に、『子莫は中を執る。中を執るは之に近しと爲す。中を執りて權無きは、猶ほ一を執るがごときなり。一を執るに惡む所は、其の道を賊ふが爲めなり。一を擧げて百を廢すればなり』とあり、朱註に、『子莫は魯の賢者なり。楊墨の・中を失ふを知る、故に二者の間に處りて其中を執る。近は道に近きなり。權は稱錘(はかりのおもり)なり。物の輕重を稱りて中を取る所以なり。中を執りて權無ければ、則ち一定の中に膠して、變ずるを知らず、是れ亦、一を執るのみ。賊は害ふなり。我の爲めにするは仁を害し、兼ね愛するは義を害し、中を執るは時中に害あり。皆、一を擧げて百を廢する者なり。程子曰はく、「中は執る可からざるなり。識得すれば則ち事事物物、皆自然の中有り、安排するを待たず。安排著すれば則ち中ならず」と』とあり。子莫といふ人が中を執るのは、時に因りて宜しきを制するの權衡を知らないのであるから、一を執ると異ならざるを言ふ。規は、ぶんまはし、矩は、さしがね、規矩は法則をいふ。罅漏は、罅隙遺漏。格式は法則、形式をいふ。」陸澄(一本によれば惟乾)が問うた、『孟子の言に「中を執りて權無きは、猶ほ一を執るがごとし」とあるのは、如何なる意味で御座いますか』と。先生は曰はれた、『中は只だ天理であり、只だ易の理であり、時に隨つて千變萬化して窮極無き活物である。どうして、これが中であると固く執つて動かぬことが出來ようぞ。是非とも時に因り場合に隨つて宜しきを制することを必要とするのである。豫め先づ一つの形式を定めて置くことは出來ないのである。然るに後世の儒者は、道理を一一說き盡して間隙遺漏の無いやうにして一箇の形式法則を立て定めようとして居るのであるが、これは正に一を執りて變通を知らないものである』と。

唐詡問。立志是常存箇善念。要爲善去惡否。曰。善念存時。卽是天

理。此念卽善。更思何善。此念非惡。更去何惡。此念如樹之根芽。立志者。長立此善念而已。從心所欲不踰矩。只是志到熟處。

〔訓讀〕唐詡問ふ、『志を立つるは、是れ常に箇の善念を存す。善を爲し惡を去るを要するや否や。』曰はく、『善念存する時、卽ち是れ天理なり。此念卽ち善ならば、更に何の善をか思はん。此念、惡に非ずば、更に何の惡をか去らん。此念は樹の根芽の如し。志を立つとは、此善念を長立するのみ。心の欲する所に從ひて、矩を踰えざるは、只だ是れ志、熟處に到れるなり。』

〔註解〕唐詡、唐は姓、詡は名、斯塗の人、字號等は詳かならず。心の欲する所に從ひて、矩を踰えず。道德修養の極處に到れば、思ふままに行動するも、皆、道に叶ひて、少しも法則を踰ゆること無きをいふ。論語爲政篇に、『吾、十有五にして學に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る、六十にして耳順ふ。七十にして、心の欲する所に從ひて、矩を踰えず』とあり。」唐詡が問うた、『志を立つるのは、常に一箇の善念を存して失はないやうにするのであると云ふことで御座いますが、それには善を爲し惡を去るの工夫を爲すことを要しますか、如何で御座いますか』と。先生は曰はれた、『善念が存するときは、それが卽ち天理である。若し此念が善であるならば、更に別に善を爲さうとするに及ばぬのである。若し此念が惡で無いならば、更に別に惡を去る工夫をするに及ばぬのである。此念はたとへば樹の根や芽のやうなものである。志を立つるのは、此善念を成長堅立させればそれで宜しいのである。孔子の謂はゆる心の欲する所に從へども矩を踰えずといふ境致は、只だ此志が純熟の處に到つたのである。この志が純熟するときは、自然に此境致に到達するのである』と。

精神道德言動。大率收斂爲主。發散是不得已。天地人物皆然。

〔訓讀〕精神・道德・言動は、大率、收斂するを主と爲す。發散するは是れ已むを得ざるなり。天地人物皆然り。

〔註解〕收斂は收めて內に入れること。發散は發して外に出すこと。人物は人と物とである。傳習錄筆記には、『人物は、人と物とを云ふことあり、人のことを人物と云ふこともあり、ここは人と云ふことなり』云云と曰つてあるが、余は之に從はず、人間と萬物との意に解する說に從ふ。」人の精神も道德も言語動作も、大率、引き締めて收めて內を充實することを主とするのである。ゆるめて外に發し出すことは、已むを得ない時にさうするのである。これは理の自然なる者であつて、天も地も人間も萬物も、皆然うである。○傳習錄筆記に曰はく、『人、此精神をぢつと取しめる時は、內が引きしまる故、率爾なること又自ら風寒暑濕の外感の憂も少く、命も長久なり。已

むを得ずして發散すれば、其發散の勢も强盛なり。道德、是亦專ら實を積んで其德をふけらかさぬ樣にし、言動も妄言妄動なきやうに收斂を主と爲すべしと也。是れ人のみに限らず、天地も此の如く、秋冬に其氣收斂するによりて、春に至つての發生盛なり』と。

問。文中子是如何人。先生曰。文中子庶幾具體而微。惜其蚤死。問。如何却有續經之非。曰。續經亦未可盡非。請問。良久曰。更覺良工心獨苦。

〔訓讀〕 問ふ、『文中子は是れ如何なる人ぞ。』先生曰はく、『文中子は、體を具へて微なるに庶幾し。其の蚤く死せしを惜む。』問ふ、『如何ぞ却つて經を續ぐの非有る。』曰はく、『經を續ぐも亦未だ盡く非とす可からず。』請ひ問ふ。良久しくして曰はく、『更に覺ゆ良工の心獨り苦しむを。』

〔註解〕 文中子は既に前に註せり。隋の開皇元年に生れ、義寧二年に沒す、年三十八、一說に年三十四といふ。體を具へて微。孟子公孫丑上篇に、『冉牛・閔子・顏淵は、則ち體を具へて微なり』とあり、朱子の註に、『其全體有れども但だ廣大ならざるを謂ふのみ』とあり。更に覺ゆ良工の心獨り苦しむを。これは杜甫の題二李尙師松樹障子一歌の句にして、良工は畫の名手、之を畫く時に畫士が如何に獨りで心を苦しめたかと云ふことに心づく、との意である。王子、此句を誦して、文中子の苦心は傍人の知る能はざる所なることを嘆ずるのである。」澄は問うた、『文中子は如何なる人で御座いますか』と。先生は曰はれた、『文中子は、孟子の謂はゆる體を具へて微なるものに庶幾いのであつて、聖人の道の全體を具備して居るけれども、未だ廣大なるに至らないものである。惜しいことには文中子は短命にして死んだ。若し長生したならば、學問道德、大に見る可きものが有つたであらう』と。澄は問うた、『先生の御說によれば、文中子はなか〳〵の賢人であるのに、如何して經書の續編を作る過失を犯したのでありませうか』と。先生は曰はれた、『文中子が經書の續編を作つたのは、これも亦、未だ盡くは過失とすることは出來ないのである。後世の儒者が妄に之を非難する方が、寧ろ誤つて居るのである』と。澄は更に其意味を問うた。先生は默すること良久しうして、杜甫の詩の『更に覺ゆ良工の心獨り苦しむを』といふ句を朗吟された。

許魯齋謂儒者以治生爲先之說。亦誤人。

〔訓讀〕 許魯齋が『儒者は生を治むるを以て先と爲す』と謂ふの說、亦、人を誤る。

〔註解〕 許魯齋、姓は許、名は衡、字は平仲、元の懷州河內の人。家、世〻農を業とす。性篤實にして學を嗜む。程朱の書を得、慨然として道を以て自ら任ず。世祖の時、國子祭酒に任ず。既に

して病み歸り、屢〻上書して政事を切論す。至元十八年、卒す。年七十三、文正と追謚す。學者、魯齋先生と稱す。魯齋の語に曰はく、『學を爲す者は、生を治むるを最も先務と爲す。苟くも生理足らざれば、則ち學を爲すの道に於て、妨げらるる所有り。彼の旁求妄進し及び官と作りて利を嗜む者は、殆ど亦、生理に窘しむの致す所なり』と。生を治むは、生産を治むるをいふ。」許魯齋が、『儒者は、生産の業を治めて衣食を足らすを以て先務と爲す』と謂つた說は、語弊あり、これ亦、人を誤るを免れないのである。○傳習錄別本に、黃直の錄する所に、此條に關する問答有り、其文は次の如し。『直問ふ、「許魯齋言はく、學者は生を治むるを以て首務と爲すと。先生、以て人を誤ると爲すは、何ぞや。豈に士の貧しきは、坐守して經營せざる可きか。」先生曰はく、「但だ「學者、生を治むる上に、儘、工夫有り」と言はば則ち可なり。若し生を治むるを以て首務と爲し、學者をして營利に汲汲たらしめば、斷じて不可なり。且つ天下の首務は、孰れか講學よりも急なる有らんや。生を治むと雖も、亦是れ講學の中の事なり。但だ之を以て首務と爲す可からず。徒らに營利の心を啓く。果して能く此處に於て調停し得、心體、累無くば、終日、買賣を做すと雖も、其の聖たり賢たるを害せず。何ぞ學に妨げんや。學何ぞ生を治むるに貳あらんや」と。』參照して王子の眞意を知るべきである。傳習錄筆記に曰はく、『生は生理なり、産業のことなり。渡世を先づこしらへておけと也。先づ食ひ物家業をこしらへておけば、心おちつき、動かざるゆゑ、先づさうして後に學問をせよと也。此の如く云へば、産業がおもになりて道は第二になる故、人を誤るなり』と。

問仙家元氣元神元精。先生曰。只是一件。流行爲氣。凝聚爲精。妙用爲神。

〔訓讀〕仙家の元氣・元神・元精を問ふ。先生曰はく、『只だ是れ一件なり。流行するを氣と爲し、凝聚するを精と爲し、妙用を神と爲す。』

〔註解〕元氣元神元精は、道敎の語。元始の氣、元始の神、元始の精の意。人が未だ此身體有らざるより先に本來有る所の氣と神と精とをいふ。道書十二種中の修眞後辨に曰はく、『紫氣淸云ふ、「其精は是れ交感の精にあらず、乃ち是れ玉皇の口中の涎なり。其氣は卽ち呼吸の氣に非ず、乃ち知る却つて是れ太素の烟なるを。其神は卽ち思慮の神に非ず、元始と相比肩す可し」と。是れ卽ち謂はゆる元精・元氣・元神なり。精氣神にして元と曰ふは、是れ本來の物にして、人未だ此身有らざる先に此物有り』と。又、周易闡眞に曰はく、『惟れ人や、天地陰陽五行の氣に乘じて身を生ず。身中に卽ち此陰陽五行の氣を具ふ。但だ此五行に先天有り、後天有り。先天の五行は陽に屬し、後天の五行は陰に屬す。一三五七九は、陽の五行にして、先天なり。二四六八十は、陰

の五行にして、後天なり。先天を以てして論ずれば、一を元精と爲し、水に屬し、壬水と爲す。三を元性と爲し、木に屬し、甲木と爲す。五を元氣と爲し、土に屬し、戊土と爲す。七を元神と爲し、火に屬し、丙火と爲す。九を元清と爲し、金に屬し、庚金と爲す。此れ五元なり。五元既に具はれば、五德卽ち此に於てして之に寓す。五德とは仁義禮智信なり。(中略) 後天を以てして論ずれば、二を識神と爲し、火に屬し、丁火と爲す。四を鬼魄と爲し、金に屬し、辛金と爲す。六を濁精と爲し、水に屬し、癸水と爲す。八を游魂と爲し、木に屬し、乙木と爲す。十を妄意と爲し、土に屬し、己土と爲す。此れ五物なり。五物既に具はれば、五賊卽ち此に於てして之に寓す。五賊とは喜怒哀樂欲なり』と。余は道書の言ふ所を詳かにせざれども、要するに、元氣とは、人の未だ生れざる以前より存在する、純粹にして一點の邪惡を雜へざる氣である。元神とは、人の未だ生れざる以前より存在する、純粹にして一點の邪惡を雜へざる神である。元精とは、人の未だ生れざる以前より存在する、一點の邪惡を雜へざる精である。「一件は一個の物件。」澄は、道家に謂ふ所の元氣・元神・元精は如何なるもので御座いますか、と問うた。先生は曰はれた、『元氣・元神・元精とて名は三つ有るけれども、其實は只だ一つの物である。其の流行して行き渡つて居る側から名づけて氣と曰ふのであり、其の凝り聚まつて居る側から名づけて精と曰ふのであり、其の靈妙の作用を爲す側から名づけて神と曰つたのである』と。〇中卷に載する所の、原靜に答ふる書に、又、此事を論じてある。參照せよ。

喜怒哀樂本體。自是中和的。纔自家著些意思。便過不及。便是私。

〔訓讀〕喜怒哀樂の本體は、自ら是れ中和なる的なり。纔に自家、些の意思を著くれば、便ち過不及あり、便ち是れ私なり。

〔註解〕喜怒哀樂の本體とは、謂はゆる未發の中をいふ。」喜怒哀樂の本體は、自ら中和なる者である。聊かにても此に自己が少しの意思を著けるときは、卽ち自然の本體を失ひ、或は過ぎ或は及ばざるの失を生ずるのであつて、便ち私である。自己が少しの意思をも加へないときは、自然に喜怒哀樂皆發して節に中るの中和を得るのである。

問哭則不歌。先生曰。聖人心體。自然如此。

〔訓讀〕哭すれば則ち歌はざるを問ふ。先生曰はく、『聖人の心體は、自然に此の如し。』

〔註解〕哭すれば則ち歌はず。論語述而篇に、『子、喪有る者の側に食すれば、未だ嘗て飽かざるなり。子、是日に於て哭すれば、則ち歌はず』とあり、朱子の註に、『哭は弔哭を謂ふ。一日の內、餘哀未だ忘れず、自ら歌ふ能はざるなり。謝氏曰はく、「學者、此二者に於て、聖人の情性の

正しきを見る可きなり。能く聖人の情性を識りて、然る後に、以て道を學ぶ可し」と』とあり。」澄は問うた、『論語に、「哭すれば則ち歌はず」とありますが、この意思は如何で御座いますか』と。先生は曰はれた、『聖人は、仁愛の心深く、人の喪に臨みて哭するときは、終日、哀痛の情を忘れることが出來ず、自然に・歌はないのである。聖人の心の本體は、自然に此の如くである、故意に歌はないのでは無い』と。

克己須要掃除廓清一毫不存方是有一毫在則衆惡相引而來。

〔訓讀〕己に克つは、須くべから掃除廓清して一毫も存せざるを要して方に是なるべし。一毫の在る有れば、則ち衆惡相引きて來る。

〔註解〕己に克つは、論語顏淵篇に、『顏淵、仁を問ふ。子曰はく、己に克ちて禮に復するを仁と爲す。一日、己に克ちて禮に復すれば、天下、仁に歸す』とあるに本づく。朱註に、『克は勝つなり。己は身の私を謂ふなり』とあり。一毫は一本の毛、極めて細小なるに喩ふ。」己に克つには、是非とも、己を殘さず掃ひ除き奇麗さつぱりと無くなして、一本の毛ほども殘つてゐないやうにして、始めて宜しいのである。若し一本の毛ほどでも殘つて居たならば、種種の衆多の惡はそれを緣として相引き連れて來るであらう。

問律呂新書。先生曰。學者當務爲急。算得此數熟。亦恐未有用。必須心中先具禮樂之本方可。且如其書說。多用管以候氣。然至冬至那一刻時。管灰之飛。或有先後。須臾之間。焉知那管正値冬至之刻。須自心中先曉得冬至之刻。始得。此便有不通處。學者須先從禮樂本原上用功。

〔訓讀〕律呂新書を問ふ。先生曰はく、『學者は當に務むべきを急と爲す。此數を算へ得て熟するも、亦恐らくは未だ用有らざらん。必ず須く心中に先づ禮樂の本を具へて方に可なるべし。且つ其書の說の如きは、多く管を用ひて以て氣を候ふ。然れども冬至の那の一刻の時に至りて、管灰の飛ぶこと、或は先後有り。須臾の間に、焉んぞ那の管の正に冬至の刻に値ふを知らん。須く自心の中に先づ冬至の刻を曉り得て始めて得べし。此は便ち通ぜざる處有り。學者須く先づ禮樂の本原の上より功を用ふ可し。』

〔註解〕律呂新書は、朱子の弟子蔡元定の作る所にして、朱子、之に序す。二卷あり。今、性理大全に之を收む。蔡元定は、字は季通、西山と號す。建陽の人。此數とは律呂の數をいふ。律呂とは、

黃鐘・太蔟・姑洗・蕤賓・夷則・無射の六律及び大呂・夾鐘・仲呂・林鐘・南呂・應鐘の六呂、即ち十二律をいふ。黃鐘の管の長さは、九寸、空圍は九分。黃鐘の管の長さを三分して一を減じて林鐘を生ず。林鐘を三分して一を增して太蔟を生ず。太蔟を三分して一を減じて南呂を生ず。南呂を三分して一を增して姑洗を生ず。姑洗を三分して一を減じて應鐘を生ず。應鐘を三分して一を增して蕤賓を生ず。蕤賓を三分して一を增して大呂を生ず。大呂を三分して一を減じて夷則を生ず。夷則を三分して一を增して夾鐘を生ず。夾鐘を三分して一を減じて無射を生す。無射を三分して一を增して仲呂を生ず。黃鐘は十一月、大呂は十二月、太蔟は正月、夾鐘は二月、姑洗は三月、仲呂は四月、蕤賓は五月、林鐘は六月、夷則は七月、南呂は八月、無射は九月、應鐘は十月の律とす。蔡元定が管を以て氣を候ふの法は、十二律の管を密室の中に埋め、上は地を平かにし、葭灰を管の中に實し、緹素を以て之を覆ひ、以て十二箇月の中氣を候ふ。冬至即ち十一月の中氣至るときは、黃鐘の管、灰を飛ばし素を衝く。大寒即ち十二月の中氣以下、各〻其月を以て隨つて應じ、而して時序正しといふ。禮樂の本、標註に『吾が心、中和を得る、是れ禮樂の本なり。故に人欲を去り天理を存するは、是れ下文の謂はゆる、禮樂の本原上の用功なり』とあり。下卷の「先生曰はく古樂」の條にも亦之を論ず。參考す可し。冬至の那の一刻とは冬至の時刻、即ち太陽の南至の時刻をいふ。一說に、冬至の夜半子の刻といへども、太陽の南至の時刻は、必ずしも夜半子の刻にあらず。」澄は、律呂新書は如何で御座いますか、と問うた。先生は曰はれた、『學者たるものは、當に務むべきことを先づ務むるを第一とするのである。律呂の音律の數を算へて十分に精熟するとても、恐らくは未だ何の役にも立たないであらう。是非とも自分の心の中に禮樂の本原たる中和の德を具へて始めて宜しいのである。且つ律呂新書の中に說いて居る所は、多くは十二律の管を用ひて十二箇月の氣の應ずるのを候ふのである。然るに冬至の彼の一刻の時に至つて、十二律の管の中の灰の飛びあがることが、或は先になつたり或は後れたりするのである。されば、須臾の間に、どうして彼の管が正に冬至の時刻に値ることを知られようぞ。是非とも自分の心の中に先づ冬至の時刻を曉つて始めて氣の應ずることを候ふことが出來るのである。この十二律の管を以て氣の應ずるを候ふの說は、通じない處が有るのである。學者は是非とも先づ禮樂の本源の上即ち心に中和を致すことに就いて工夫を爲すべきある。律呂の數などを講究することは、末の末なる者である』と。

曰仁云。心猶鏡也。聖人心如明鏡。常人心如昏鏡。近世格物之說。如以鏡照物。照上用功。不知鏡尙昏在。何能照。先生之格物。如磨

鏡而使之明。磨上用功。明了後亦未嘗廢照。

〔訓讀〕　曰仁云はく、『心は猶ほ鏡のごときなり。聖人の心は明鏡の如く、常人の心は昏鏡の如し。近世の格物の說は、鏡を以て物を照らすが如く、照らす上に功を用ふ。鏡尙ほ昏きこと在るを知らず。何ぞ能く照らさん。先生の格物は、鏡を磨きて之をして明かならしむるが如く、磨く上に功を用ふ。明かにし了りて後、亦、未だ嘗て照らすことを廢せず。』

〔註解〕　曰仁は徐愛の字。昏鏡は、くもりたる鏡。近世の格物の說とは、朱子の格物の說をさす。「曰仁が云つた、『人の心はたとへば鏡のやうなものである。聖人の心は明かなる鏡の如くである。普通の人の心は曇りて昏き鏡の如くである。近世の格物の說は、たとへば鏡を以て物を照らすが如く、照らす上に於て工夫を用ひるのである。鏡其物にまだ曇つて昏い處があることを知らないのである。そんな曇つて昏い鏡では、どうして物を照らすことが出來ようぞ。我が先生の格物の說は、たとへば鏡を磨いてそれを明かならしめるが如く、鏡を磨く上に於て工夫を用ひるのである。そして心の鏡が明かになつてしまつた後に、亦、未だ嘗て其鏡を以て物を照らすことを廢するのでは無いのである』と。○近世の儒者の仕方は、心が外に馳せて之を內に求むることが疎略なるを免れず、王子の仕方は、先づ之を己の心に求めて而る後に外物に當るが故に、事事親切著實になるのである。

問道之精粗。先生曰。道無精粗。人之所見有精粗。如這一間之房。人初進來。只見一箇大規模如此。處久。便柱壁之類。一一看得明白。再久。如柱上有些文藻。細細都看出來。然只是一間房。

〔訓讀〕　道の精粗を問ふ。先生曰はく、『道には精粗無し。人の見る所に精粗有るのみ。這の一間の房の如し。人初めて進み來るときは、只だ一箇の大規模此の如きを見る。處ること久しければ、便ち柱壁の類、一一看得て明白なり。再び久しければ、柱上に些の文藻有るが如きも、細細に都て看出し來る。然れども只だ是れ一間の房のみ。』

〔註解〕　精粗は、くはしきと、あらきと。一間の房は、一つの室。再びは、更にの意。文藻は、彩飾模樣をいふ。」澄が或る時道の精しきと粗きとの區別を問うた。先生は曰はれた、『道には本來、精だの粗だのといふ區別は無いのである。ただ人の見る所に精と粗との區別が有るのである。道を見ることの精しきもあり、道を見ることの粗きもあるのである。たとへば此一つの室のやうなものである。人が初めて此室に這入つて來たときは、ただ一つの大體の規模が此の如くであること

とを見るのみである。此室に處ることが久しくなると、柱や壁の類まで、一一明かに看得るのである。更に久しく此室に居るときは、此室の柱の上に些少の文飾模樣が有るのまでも、詳細に都て看るに至るのである。けれども只だ一つの室であるのである。此室以外の物を發見したのでは無い。道を見ることの精粗も、これに似たもので、初には道を見ること粗であり、漸次に精に至るのである』と。

先生曰。諸公近見時少疑問。何也。人不用功。莫不自以爲已知。爲學。只循而行之是矣。殊不知私欲日生。如地上塵。一日不掃。便又有一層。著實用功。便見道無終窮。愈探愈深。必使精白無一毫不徹方可。

〔訓讀〕　先生曰はく、『諸公近ごろ見る時疑問少きは、何ぞや。人、功を用ひざれば、自ら以て已に學を爲すを知れば只だ循ひて之を行はば是なりと爲さざる莫し。殊えて知らず、私欲日々に生ずること、地上の塵の如く、一日、掃はざれば、便ち又、一層有るを。著實に功を用ふれば、便ち見る、道は終窮無く、愈々探れば愈々深きを。必ず、精白にして一毫の徹せざる無からしめて、方に可なり。』

〔註解〕　諸公は諸君と同意。見る時は遇ふ時。」先生は曰はれた、『諸君は近頃會見する時に疑問を發することが多くないのは、どういふ譯であるか。人は工夫をしない時には、自分は已に學問を爲す道を知つて居るから自分が知つて居る所に順つて行ひさへすればそれで宜しいと自分で思はないものは無いのである。私欲が日々に生ずることは、たとへば地上の塵の如く、一日掃除しないときは又一層多くの塵を生ずることを絶えて知らないのである。著實に工夫をするときは、道は終る所無く窮る所無く、愈々探索すれば愈々深遠なることを知るのである。是非とも、精純潔白にして、一毫の微と雖も行き屆かない所は無いやうにして、始めて宜しいのである』と。

問。知至然後可以言誠意。今天理人欲知之未盡。如何用得克己工夫。先生曰。人若眞實切己用功不已。則於此心。天理之精微。日見一日。私欲之細微。亦日見一日。若不用克己工夫。終日只是說話而已。天理終不自見。私欲亦終不自見。如人走路一般。走得一段。方認得一段。走到岐路處。有疑便問。問了又走。方漸能到得欲

到之處。今人於已知之天理不肯存。已知之人欲不肯去。且只管愁不能盡知。只管閒講。何益之有。且待克得自己無私可克。方愁不能盡知。亦未遲在。

〔訓讀〕　問ふ、『知至りて然る後に以て誠意を言ふ可し。今、天理人欲、之を知ること未だ盡さず、如何ぞ克己の工夫を用ひ得ん。』先生曰はく、『人若し眞實に己に切にして功を用ひて已まずば、則ち此心に於て、天理の精微なる、日、一日よりも見え、私欲の細微なるも、亦、日、一日よりも見えん。若し克己の工夫を用ひずば、終日只だ是れ說話するのみ。天理は終に自ら見えず、私欲も亦終に自ら見えず。人の・路を走るが如く一般なり。一段を走り得て、方に一段を認め得、走りて岐路の處に到りて、疑有れば便ち問ひ、問ひ了りて又走り、方に漸く能く到らんと欲するの處に到り得。今、人、已知の天理に於て肯て存せず、已知の人欲をも肯て去らず、且く只管に盡く知る能はざるを愁へ、只管に閒講す。何の益か之れ有らん。且く自己に克ち得て私の克つ可き無きを待ちて、方に・盡く知る能はざるを愁ふるも、亦未だ遲からざる在り。』

〔註解〕　問、知至然後可以言誠意、今天理人欲知之未盡、如何用得克己工夫。知至りて然る後に以て誠意を言ふ可し、大學に、『其意を誠にせんと欲する者は、先づ其知を致す』とあり。知を致すを解すること、朱子の說と王子の說と異なり。今の此章の問は、朱子の說に從つて此疑有るなり。』澄は問うた、『大學に言ふ所によれば、知至りて然る後に誠意の工夫を言ふことが出來るのであります。今、天理と人欲との事を、未だ十分に知り盡さないのに、どうして己に克つ工夫を用ひることが出來ませうか』と。』傳習錄筆記に曰く、『今、天理人欲、之を知ること未だ盡さず。此筋のこと朱子の語にも有り。然るに朱子は大賢なれば、手近き人欲を去り盡して精微の一段にてのことなるべし。先づ其の見えたる處の人欲を去れば、卽ち克己なり。其の見えたるを克己すれば、又見えぬ處も見えて、斯うばかりして行きても、君子にならるべきを、そこらはせずして、之を知ること未だ盡さずんば、如何ぞ克己の工夫を用ひ得んなどと、虛談なる高上の詮議をなすなり。此人に限らず、世間の學者、皆、此の如し。是を議論と覺え、學談と思うて居るなり。扨朱子のは前に云ふ如く別段のことと云へども、其の人に敎ふるに知先行後と立てて、知るを以て初の敎としたまふなれば、後世、此問を起すの端を開きたまふ所、實に程子・朱子に在るなり』と。○先生曰、人若眞實切己用功不已、則於此心、天理之精微、日見一日、私欲之細微、亦日見一日云云。一段は道路の一區切。岐路は岐路と同じ、分れ路。閒講は無益なる講究。』先生は曰はれた、『人が若し眞實に自分の身に切實にして工夫を用ひて已まないときは、此心の中に於て、天理の精微なる處も、日、一日と、日を逐うて明かに見える樣になり、私欲の細

微なる處も、日、一日と、日を追うて明かに見えるやうになるであらう。若し己に克つの工夫を用ひないときは、朝から晩まで只だ天理人欲の理窟を說話するだけのことであつて、天理は終に自分で見えることは無く、私欲も亦終に自分で見えることは無いのである。修養の工夫は、人が路を行くのと同樣である。一區切の路を行きて、始めて一區切の路の樣子を知り得るのである。行きて分れ路の處に到著して、右に行くべきか左に行くべきかと疑有るときは、人に問ひ、問ひ了つて又進み行き、始めて漸次に到らうと思ふ處に到著することが出來るのである。進んで行きもしないで、ただ路のみを穿鑿し、其先は如何だ又其先は如何なるかと穿鑿しても、何の益も無いのである。今日の人は、現に已に知つて居る所の天理に於ても肯て之を存しようと勉めず、現に已に知つて居る所の人欲をも肯て之を去らうと强めず、そして只だ偏に天理人欲の理窟を盡く知ることが出來ないことを愁へ、只だ偏に無用なる講究をして居るのである。何の益も無いことである。且く先づ自己に克ちて、私心私慾の克つ可き無く、私心私慾が殘らず無くなるのを待つて、始めて、盡く知ることの出來ないのを愁へても、未だ遲くは無いのである。先づ現に已に知つて居る所の自己の私に克つことを務めるのが、最も急とすべきである』と。○施邦曜曰はく、『實に功を用ひず、只だ知らざるを愁ふる者は、總て是れ實に聖賢と爲るの志無し。仲由が未だ之を行ふ能はざれば唯だ聞く有らんことを恐るるが如きは、庶幾はくは之に近からん』と。梁啓超曰はく、『此れ正に是れ知行合一を發揮す。語語直に學者の病源を抉る』と。

問。道一而已。古人論道。往往不同。求之亦有要乎。先生曰。道無方體。不可執著。却拘滯於文義上。求道遠矣。如今人只說天。其實何嘗見天。謂日月風雷卽天。不可。謂人物草木不是天。亦不可。道卽是天。若識得時。何適而非道。人但各以其一隅之見。認定以爲道止。如此。所以不同。若解向裏尋求。見得自己心體。卽無時無處不是此道。亙古亙今。無終無始。更有甚同異。心卽道。道卽天。知心則知道知天。又曰。諸君要實見此道。須從自己心上體認。不假外求始得。

〔訓讀〕問ふ、『道は一のみ。古人、道を論ずること、往往にして同じからず。之を求むること亦要有るか。』先生曰はく、『道には方體無く、執著（しゅうちゃく）す可からず。却つて文義の上に拘滯すれば、道を

求むること遠し。如今の人、只だ天を說く。其實は何ぞ嘗て天を見ん。日月風雷卽ち天なりと謂ふは、不可なり。人物草木は是れ天ならずと謂ふも、亦不可なり。道は卽ち是れ天なり。若し識り得る時は、何に適くとしてか道に非ざらん。人は但だ各〻其一隅の見を以て、認定して以て道は此の如きに止まると爲す。所以に同じからず。若し裏に向ひて尋求して自己の心體を見得ることを解すれば、卽ち時として處として是れ此道ならざる無し。古に互り今に互り、終無く始無し。更に甚の同異か有らん。心は卽ち道、道は卽ち天なり。心を知れば則ち道を知り天を知る。」又曰はく、『諸君、實に此道を見んことを要せば、須く自己の心上より體認すべし。外に求むるを假りて始めて得るにあらず。』

〔註解〕問、道一而已、古人論道往往不同、求之亦有要乎。道は一のみの語は、孟子滕文公上篇に、『世子、吾が言を疑ふか。夫れ道は一のみ』とあるに本づく。古人、道を論ずること、往往にして同じからず、之を求むること亦要有るか。傳習錄筆記に曰はく、『例へば堯舜は精一とのたまひ、孔子は仁とのたまひ、孟子は仁義とのたまひ、程伊川は居敬と說き、朱子は窮理と說き、陸子は實理と說きたまふの類なり。後人、道を說く者、十人が十色なれば、後世の人、何に取り付いてゆかんと、其處にも亦要ありやとなり』と。」澄は問うた、『孟子の言葉に、道は一のみとあります。然るに古人が道を說かれることは、往往にして同じく無いのであります。道を求むるに於ても亦要訣がありますか』と。○先生曰、道無方體、不可執著、却拘滯於文義、求道遠矣云云。方體は、周易繫辭傳に、『神は方無くして易は體無し』とあるに本づく。方は方所なり。體は形體なり。道は一定したる方所形體無きをいふ。執著は執心なり、固く思ひ込むこと。拘滯は、かかはり、とどこほること。一隅は一方の隅、一部分のこと。裏に向ひて尋求すは、內面卽ち心の中に向つて尋ね求むること。無時無處不是此道は、時として是れ此道にあらざる無く、又、處として是れ此道にあらざる無きの意にして、訓讀するときは、一の無の字を讀まず、『時として處として是れ此道にあらざる無し』と讀むを善しとす。同異の同の字は輕し、付け字なり。」先生は曰はれた、『道には一定したる方所は無く、一定したる形體も無いものであつて、決して、これが道である、この外に道は無いなどと云つて執著することは出來ないのである。若し書物の文義の上に拘泥するときは、道を求むること甚だ遠いのである。道は自分の心に求むべきものである。今日の學者は、只だ天を說いて居るのであるが、其實は未だ嘗て天を見ないのである。日や月や風や雷が卽ち天であると謂ふは、不可である。又、人や萬物や草や木は天では無いと謂ふも、亦不可である。道は卽ち是れ天である。道の外に天は無いのである。若し之を識り得るときは、何處に行つても道で無い者は無いのである。道は宇宙に遍滿して廣大無邊なる者である。人は但だ各〻自分の一局部の小さい見解を以て、認め定めて、道はただ此の如きものであると極め込んで居るので

ある。それ故に道を論ずることが同じくないのである。若し內に向つて尋ね求めて自分の心の本體を見ることが出來たならば、如何なる時にも、如何なる處にも、此道で無いものは無いのである。道は古に亙り今に亙り、何時終るといふ限は無く、何時始まつたといふ始も無いのである。更に何の相違が有らうぞ。心は卽ち道であり、心の外に道は無いのである。道は卽ち天であり、道の外に天は無いのである。心を知るときは、道を知り天を知るのである』と。○又曰、諸君要實見此道、須從自己心上體認、不假外求始得。先生は又語を繼いで曰はれた、『諸君が若し眞實に此道を見ようと思ふならば、是非とも內に向つて自分の心の上に於て體得認定すべきである。道は外に求むることを假りて始めて得られるといふものでは無い。道は外に求むる必要は少しも無く、自分の心の上に備はつて居るのである』と。

問。名物度數。亦須先講求否。先生曰。人只要成就自家心體。則用在其中。如養得心體果有未發之中。自然有發而中節之和。自然無施不可。苟無是心。雖預先講得世上許多名物度數。與己原不相干。只是裝綴。臨時自行不去。亦不是將名物度數全然不理。只要知所先後。則近道。又曰。人要隨才成就。才是其所能爲。如夔之樂。稷之種。是他資性合下便如此。成就之者。亦只是要他心體純乎天理。其運用處。皆從天理上發來。然後謂之才。到得純乎天理處。亦能不器。使夔稷易藝而爲。當亦能之。又曰。如素富貴行乎富貴。素患難行乎患難。皆是不器。此惟養得心體正者能之。

〔訓讀〕問ふ、『名物度數も、亦須く先づ講求すべしや否や。』先生曰はく、『人は只だ自家の心體を成就せんことを要す。則ち用、其中に在り。如し心體を養ひ得て、果して未發の中有らば、自然に・發して節に中るの和有らん。自然に・施すとして可ならざる無からん。苟くも是心無くば、預め先づ世上の許多の名物度數を講じ得と雖も、己と原相干らず、只だ是れ裝綴するなり。時に臨みて自ら行ひ去らず。亦、是れ名物度數を將て全然理めずとするにあらず。只だ要するに先後する所を知れば則ち道に近し。』又曰はく、『人は才に隨ひて成就せんことを要す。才とは是れ其の能く爲す所なり。夔の樂・稷の種の如き、是れ他の資性合下に便ち此の如し。之を成就する者も、亦只だ是れ他の心體の・天理に純ならんことを要す。其運用の處は、皆、天理の上より發し來

り、然る後に之を才と謂ふ。天理に純なる處に到り得ば、亦能く器ならず。夔と稷とをして藝を易へて爲さしめば、當に亦之を能くすべし。』又曰はく、『富貴に素しては富貴に行ひ、患難に素しては患難に行ふが如きは、皆是れ器ならず。此れ惟だ心體を養ひ得て正しき者のみ之を能くす。』

〔註解〕問、名物度數、亦須先講求否。名物度數は禮樂に於ける儀文制度の類をいふ。」澄は問うた、『名物度數も亦、是非とも預め先づ講求すべきもので御座いますか、如何で御座いますか』と。○先生曰、人只要成就自家心體、則用在其中云云。自家は自己。裝綴は裝飾補綴するなり。よそほひ、つづる。理は治むるなり。唐の高宗の諱治を避けて理と爲ししより、歷代、之を沿襲す。先後する所を知れば則ち道に近し。大學に、「物に本末有り、事に終始有り、先後する所を知れば則ち道に近し」とあり。」先生は曰はれた、『人たる者は、只だ修養して自分の心の本體を成就することを要するのである。さうするときは、活用は自然に其中に在るのである。若し心の本體を養つて、果して未發の中が有るときは、自然に、發して節に中るの和が有るであらう。又、自然に、如何なる事に施しても可ならざることは無いであらう。苟くもこの中和の心が無かつたならば、豫め先づ世間の幾多の名物度數を講究したとても、自分と原來全く關係の無いことで、只だ修飾補綴するだけのことであつて、時に臨みて自ら行ふことは出來ないのである。さうであるけれども、亦、名物度數をば全然治めるには及ばぬといふのではない。只だ要するに、大學に云つてある通り、先にすべき事と後にすべき事とを知るときは、道に近いのである。心の本體の修養は本であつて先にすべく、名物度數の講究は末であつて後にすべきである』と。○又曰、人要隨才成就、才是其所能爲云云。才は心の働きなり。人の氣質には、得手なると不得手なるとあり。其の得手なるが其人の才なり。其の能く爲す所とは、其の得手なる所、即ち長所をいふ。夔の樂、稷の種。尚書舜典に、『帝、夔に命じて曰はく、汝に命じて樂を典らしむ。胄子に教へよ』とあり、又、『棄、黎民、饑に阻む。汝后稷たれ、時の百穀を播け』とあり。夔も棄も、舜の臣にして、前者は音樂に長ぜるを以て、樂を典る官と爲り、後者は農業に長ぜるを以て后稷の官と爲れり。資性は、うまれつき。合下は現在の意、「ただちに」と訓するも可なり。器ならずは、論語爲政篇に、『君子は器ならず』とあるに本づく。」先生は又語を繼いで曰はれた、『人たる者は、其の天賦の才能に隨つて成就することを要するのである。才能とは、其の能く爲す所即ち其人の長所である。たとへば夔が音樂に於ける、后稷が種藝に於けるが如きは、彼等の天性が直に此の如く其等の事に長じてゐたのであつた。才能を成就するに於ても、亦、只だ其人の心の本體が天理に純一なることを要するのであつて、時に臨んで其の才を運用する事が、皆、天理の上から發動し來つて、然る後に之を才能といふのである。才能を成就して天理に純一なる位地に到達し得たならば、亦能く器ならざる君子の位地に到達するのである。初めには一つの事の才能であるけれど

も、之を成就して天理に純粹なる境致に達するときは、其の成就したる才能のみならず、他の才能も自然に出來るのである。若し夔と后稷とをして其の長ぜる所の藝を易へて爲さしめ、夔をして農事を爲さしめ、后稷をして音樂を爲さしめても、亦、之を能くすべき筈である』と。○又曰、如素富貴行乎富貴、素患難行乎患難、皆是不器、此惟養心體正者能之。富貴に素しては富貴に行ひ、患難に素しては患難に行ふは、中庸の語。」先生は又語を繼いで曰はれた、『中庸に謂ふ所の、富貴に素しては富貴に行ひ、患難に素しては患難に行ふが如きは、皆是れ器ならざる君子の境致である。これは惟だ心の本體を養つて正しきを得た者のみが、之を能くするのである』と。

與其爲數頃無源之塘水不若爲數尺有源之井水生意不窮時先生在塘邊坐傍有井故以之喩學云。

〔訓讀〕『其の數頃の・源無きの塘水と爲らんよりは、數尺の・源有るの井水の生意窮まらざるものと爲らんに若かず。』時に先生、塘邊に在りて坐す。傍に井有り。故に之を以て學に喩ふと云ふ。

〔註解〕數頃。一頃は百畝をいふ。數頃は四五百畝をいふ。塘水は池の水。生意窮らずとは、源泉混混として晝夜間斷無く湧き出づるをいふ。孟子離婁下篇に、『源泉混混として、晝夜を舍てず、科に盈ちて後に進み、四海に放る。本有る者は是の如し』とあり。象山集要卷の五に、『涓涓の流、積みて江河を成す』とあり。」先生は曰はれた、『水源の無い四五百畝の廣さの池塘の水と爲るよりは、僅に四五尺の廣さにても水源の有る井の水の生生の意の窮り盡くること無きものと爲る方が勝つて居る』と。時に先生は池の邊に坐して居られたが、其傍に井戸が有つたので、之を以て學問に喩へて論されたのである。

問。世道日降。太古時氣象。如何復見得。先生曰。一日便是一元。人平旦時起坐。未與物接。此心清明氣象。便如在伏羲時遊一般。

〔訓讀〕問ふ、『世道日々に降る。太古の時の氣象は、如何にして復た見得ん。』先生曰はく、『一日は便ち是れ一元なり。人、平旦の時起坐し、未だ物と接せざるとき、此心の清明なる氣象は、便ち伏羲の時に在りて遊ぶが如く一般なり。』

〔註解〕問、世道日降、太古時氣象、如何復見得。澄は問うた、『世の中の道德風俗は日々に降下して行きます。大昔の時の淳樸なる氣象は、如何にして復た見ることが出來ませうか』と。○先生曰、一日便是一元、人平旦時起坐、未與物接、此心清明氣象、便如在伏羲時遊一般。一元は、邵康節の元世運會說に出づ。邵子は歲月を數ふるに元世運會の四つを以てす。其の皇極經世書に、

十二時を一日とし、三十日を一月とし、十二月を一年とし、三十年を一世とし、十二世即ち三百六十年を一運とし、三十運即ち一萬八百年を一會とし、十二會即ち十二萬九千六百年を一元とす、是に至りて天地滅すと云ふ。而して元會運世の中に、又、各〻元會運世ありと說く。詳細は皇極經世書又は宋元學案に就きて見よ。伏羲は即ち太昊伏羲氏にして、三皇の一なり。」先生は曰はれた、「一日は即ち一元である。一日の中に、世の始めから世の終までの氣象が悉く具はつて居るのである。人が夜の明け方に起き上つて坐し、未だ何物とも接しないときに、心に何事をも思ふこと無く、淸く明かなる心地の有樣は、即ち太古の伏羲氏の時代に在つて遊ぶのと同樣である」と。○標註に曰はく、『孟子告子の夜氣の章、竝に案ず可し』と。又曰はく、『下卷の人一日の間の條に曰はく、「人、一日の間に、古今の世界、都て經過一番す」と。是れ亦當に竝に案ずべし』と。

問。心要逐物。如何則可。先生曰。人君端拱淸穆。六卿分職。天下乃治。心統五官。亦要如此。今眼要視時。心便逐在色上。耳要聽時。心便逐在聲上。如人君要選官時。便自去坐在吏部。要調軍時。便自去坐在兵部。如此。豈惟失却君體。六卿亦皆不得其職。

〔訓讀〕問ふ、『心、物を逐はんと要す。如何せば則ち可ならん。』先生曰はく、『人君は端拱淸穆、六卿は職を分ち、天下乃ち治まる。心、五官を統ぶること、亦、此の如くならんことを要す。今、眼、視んと要する時、心便ち逐ひて色の上に在り、耳、聽かんと要する時、心便ち逐ひて聲の上に在るは、人君の官を選ばんと要する時、便ち自ら去つて坐して吏部に在り、軍を調せんと要する時、便ち自ら去つて坐して兵部に在るが如し。此の如きは、豈に惟だ君の體を失却するのみならんや。六卿も亦皆、其職を得ざるなり。』

〔註解〕問、心要逐物、如何則可。澄は問うた、『心がとかく外物を逐はうと致しますが、如何致したらば宜しいで御座いませうか』と。○先生曰、人君端拱淸穆、六卿分職、天下乃治、心統五官、亦要如此云云。端拱は端坐して手を拱くを云ふ。淸穆は淸淨穆穆として人君としての威儀ある貌。六卿、周にては冢宰・司徒・宗伯・司馬・司寇・司空をいふ。尙書周官に、『冢宰は邦治を掌り、百官を統べ、四海を均しくす。司徒は邦敎を掌り、五典を敷き、兆民を擾ぐ。宗伯は邦禮を掌り、神人を治め、上下を和す。司馬は邦政を掌り、六師を統べ、邦國を平かにす。司寇は邦禁を掌り、姦慝を詰り、暴亂を刑す。司空は邦土を掌り、四民を居き、地利を時にす。六卿、職を

分ち、各〻其屬を率ゐて、以て九牧を倡ひ、兆民を阜成す』とあり。一說に、三公卽ち太師・太傅・太保及び三孤卽ち少師・少傅・少保を以て六卿と爲すとの說あれども、恐らくは非ならん。三公及び三孤は、天子を輔弼する官にして、職事有るにあらず。明の制は吏部・戶部・禮部・兵部・刑部・工部の六尙書をいふ。吏部は官吏を進退することを掌り、戶部は租稅貢賦等を掌り、禮部は禮を掌り、兵部は軍事を掌り、刑部は刑罪の事を掌り、工部は營造工作の事を掌る。職を分つとは職務を分擔するをいふ。心、五官を統ぶ。五官には數說あり。一說は、耳・目・口・鼻・心をいふ。荀子に、『心は中虛に居り、以て五官を治む』とあり。此處に五官といふは、蓋し此說に從ふならん。心を除くときは四官なれども、五官の成語を用ひたるなり。一說には、耳・目・鼻・口・皮膚をいふ。これは蓋し後世の說なり。孟子告子上篇に、『耳目の官は思はずして物に蔽はる。物、物に交はれば則ち之を引くのみ。心の官は則ち思ふ。思へば則ち之を得、思はざれば則ち得ず』とあり。標註に曰はく、『今案ずるに、論語季氏篇に、九思を說くは、是れ逐ひて物の上に在るに非ず。宜しく深く之を思ふべし』と。」先生は曰はれた、『君主たる者は、端坐して手を拱き、淸淨穆穆として奧ゆかしき人君たるの威儀あり、六省の長官卽ち六卿は、各〻其職務を分擔して之を掌り、然る後に、天下は善く治まるのである。心が五官を統べ治むることも、亦、此の如くならんことを必要とするのである。心は君主の如く、他の諸官は六卿の如きものである。

今眼が物を視ようとする時に、心が馳せて物を逐うて色の上に在り、耳が物を聽かうとするときに、心が馳せて物を逐うて聲の上に在るのは、たとへば、人君が官吏を選拔しようとする時に、人君が自ら其位を離れて吏部の役所の中に坐して指揮し、軍を調練簡閱しようとする時に、人君が自ら其位を離れて兵部の役所の中に坐して指揮するが如くである。かやうなのは、惟だ人君たる本體を失ふばかりでは無く、六卿も皆其職分を失ふのである。心が外物を逐ふことは、甚だ善くないのである』と。○施邦曜曰はく、『學問は大頭腦を立て得んことを要す。視聽言動、自然に各〻其職を得。顏子の四勿の功は專ら外面に在りて簡點するにあらざるを知る』と。

善念發而知之而充之。惡念發而知之而遏之。知與充與遏者志也。天聰明也。聖人只有此。學者當存此。

〔訓讀〕善念發して之を知りて之を充たし、惡念發して之を知りて之を遏む。知ると充たすと遏むとは、志なり。天の聰明なり。聖人は只だ此有り。學者は當に之を存すべし。

〔註解〕善念が起るときは、之を知りて、之を充實し、惡念が起るときは、之を知りて、之を防遏するのである。善惡を知ると、善念を充實すると、惡念を防遏するとは、人の志であり、卽ち天の聰明である。聖人は只だ此志卽ち天の聰明の德を自然に具有してゐるのである。學者は當に工

夫を用ひて此志卽ち天の聰明の德を存養して失はないやうにすべきである。

澄曰。好色好利好名等心。固是私欲。如間思雜慮。如何亦謂之私欲。先生曰。畢竟從好色好利好名等根上起。自尋其根便見。如汝心中。決知是無有做劫盜的思慮。何也。以汝元無是心也。汝若於貨色名利等心。一切皆如不做劫盜之心一般。都消滅了光光。只是心之本體。著有甚閒思慮。此便是寂然不動。便是未發之中。便是廓然太公。自然感而遂通。自然發而中節。自然物來順應。

〔訓讀〕澄曰はく、『色を好み利を好み名を好む等の心は、固より是れ私欲なり。閒思雜慮の如きは、如何ぞ亦之を私欲と謂ふ。』先生曰はく、『畢竟、色を好み利を好み名を好む等の根の上より起る。自ら其根を尋ねなば便ち見ん。汝の心中の如き、決して是れ劫盜を做すの思慮有る無きを知るは、何ぞや。汝が元より是心無きを以てなり。汝若し貨色名利等の心に於て、一切皆、劫盜を做さざるの心の如く一般にして、都て消滅し了りて光光たらば、只だ是れ心の本體にして、甚の閒思慮有るを著けん。此れ便ち是れ寂然不動なり。便ち是れ未發の中なり。便ち是れ廓然太公なり。自然に感じて遂に通ず。自然に發して節に中る。自然に物來りて順應す。』

〔註解〕澄曰、好色好利好名等心、固是私欲、如閒思雜慮、如何亦謂之私欲。閒思雜慮は無益にして秩序無き妄想をいふ。」澄は問うた、『女色を好み利益を好み名譽を好む等の心は、まことに私欲で御座います。然し閒思雜慮の如きは、無益にして秩序無きものではありますけれども、大した罪惡とは思はれませぬのに、如何してこれをも私欲と謂ふので御座いますか』と。○先生曰、畢竟從好色好利好名等根上起、自尋其根便見云云。決して知るは、斷じて知るなり。劫盜は他人をおびやかして物を盜むこと。貨色名利等心は、一本には好色名利等心に作り、『色名利等を好む心』と讀む。光光は明かなる貌。寂然不動。周易繫辭傳に、『寂然として動かず、感じて遂に天下の故に通ず』とあり。心の體用を以て言ふときは、寂然不動は體にして、感じて遂に通ずるは用なり。廓然太公。近思錄爲學類に、明道先生の語に、『廓然として太公にして、物來れば善く之に順應するをいふ。廓然太公は體にして、物來りて順應するは用なり。』先生は曰はれた、『閒思雜慮は、つまる所、女色を好み利益を好み名譽を好む等の私欲の根本の上から起るものである。自ら反省して其根本を尋ぬるときは、すぐにそれを發見することが出來るのである。それ故に閒思雜慮も亦私欲であると云ふ

のである。たとへばお前の心の中の如きは、劫盜を爲すなどの思慮の無いことを斷じて知るのは何故であるかといへば、お前が元よりさやうの心は無いからである。お前が若し貨財女色利欲名譽等の心に於て、すべて皆、劫盜を爲すこと無き心と同樣に、殘らず消滅してしまつて光光として明かであつたならば、ただ心の本體其儘であつて、何等の閒思雜慮の起ることは無いのである。此の如くなるときは、易に謂はゆる寂然不動であり、中庸に謂はゆる未發の中であり、明道先生の謂はゆる廓然太公であり、自然に感じて遂に通ずることを得、自然に發して節に中ることを得、自然に物來れば善く之に順應することを得るのである』と。

問志至氣次。先生曰。志之所至氣亦至焉之謂。非極至次貳之謂。持其志。則養氣在其中。無暴其氣。則亦持其志矣。孟子救告子之偏。故如此夾持說。

〔訓讀〕志至り氣次ぐを問ふ。先生曰はく、『志の至る所は氣も亦至るの謂にして、極至次貳の謂に非ず。其志を持すれば、則ち氣を養ふこと其中に在り。其氣を暴する無ければ、則ち亦、其志を持するなり。孟子、告子の偏を救ふ、故に此の如く夾持して說く。』

〔註解〕問志至氣次。志至り氣次ぐは、志の嚮ひ至る所には、氣も亦之に隨つて至るをいふ。孟子公孫丑上篇に、「(公孫丑)曰はく、「敢て問ふ、夫子の心を動かさざると、告子の心を動かさざると、聞くを得可きか。」(孟子曰はく)「告子曰はく、言に得ざれば、心に求むる勿かれ。心に得ざれば、氣に求むる勿かれと。心に得ざれば、氣に求むる勿かれとは、可なり。言に得ざれば、心に求むる勿かれとは、不可なり。夫れ志は氣の帥なり。氣は體の充なり。夫れ志至り、氣次ぐ。故に曰はく、其志を持し、其氣を暴する無かれと。」(公孫丑曰はく)「既に曰はく、志至り、氣次ぐと。又曰はく、其志を持し、其氣を暴する無かれとは、何ぞや。」(孟子)曰はく、「志壹なれば則ち氣を動かす。氣壹なれば則ち志を動かす。今夫れ蹶く者、趨る者は、是れ氣なり。而して反つて其心を動かす」とあり。詳細は孟子を參照せよ。」澄は孟子が『志至り氣次ぐ』と曰はれた言葉の義を問うた。○先生曰、志之所至氣亦至焉之謂、非極至次貳之謂云云。極至次貳は、朱子が志至り氣次ぐを解したる語。至は至極のものの意、次は第二等のものの意に解したるなり。朱子の註に、『志は固より至極と爲し、而して氣は卽ち之に次ぐ』とあり。夾持は兩手にて夾みて物を持つこと。志と氣と兩方面より說くことを形容したるなり。」先生は曰はれた、『志至り氣次ぐといふのは、志と氣とは本來合一のものであつて、志が至る所には氣も亦至ることを謂ふのであつて、至ると次ぐとは極至と次貳との意味では無い。其志を善く保持するときは、氣を養ふことも自然に其中に在るの

である。其氣を害ふこと無きときは、亦、自然に其志を保持するのである。いづれかの一方を養ふときは、他の一方も自然に濟むのである。告子は、志と氣とを全く隔絶したる別の物と思うて居つて、其見所が一方に偏つて居るので、孟子は其弊を救はんが爲めに、斯く志と氣との兩方面から說かれたのである』と。

問。先儒曰。聖人之道。必降而自卑。賢人之言。則引而自高。如何。先生曰。不然。如此却是僞也。聖人如天。無往而非天。三光之上天也。九地之下亦天也。天何嘗有降而自卑。此所謂大而化之也。賢人則如山嶽。守其高而已。然百仞者。不能引而爲千仞。千仞者。不能引而爲萬仞。是賢人未嘗引而自高也。引而自高則僞矣。

〔訓讀〕　問ふ、『先儒曰はく、「聖人の道は、必ず降りて自ら卑くす。賢人の言は、則ち引きて自ら高くす」と。如何。』先生曰はく、『然らず。此の如きは却つて是れ僞なり。聖人は天の如し。往くとして天に非ざる無し。三光の上は天なり。九地の下も亦天なり。天何ぞ嘗て降りて自ら卑くする有らん。此れ謂はゆる大にして之を化するなり。賢人は山嶽の如く、其の高きを守るのみ。然も百仞の者は、引きて千仞と爲す能はず、千仞の者は、引きて萬仞と爲す能はず。是れ賢人は未だ嘗て引きて自ら高くせざるなり。引きて自ら高くすれば則ち僞なり。』

〔註解〕　問、先儒曰、聖人之道、必降而自卑、賢人之言、則引而自高、如何。先儒とは程伊川先生をいふ。論語子罕篇の、『吾、知る有らんや。知る無きなり。鄙夫有り、我に問ふ、空空如たり。我、其兩端を叩きて竭せり』の章の朱子集註に、『程子曰はく、聖人の、人を敎ふる、俯して之に就くこと此の若し。猶ほ衆人の以て高遠と爲して親しまざらんことを恐るるなり。聖人の道は、必ず降りて自ら卑くす。此の如くならざれば、則ち人、親しまず。賢人の言は、則ち引きて自ら高くす。此の如くならざれば、則ち道、尊からず。孔子・孟子を觀れば、則ち見る可し』とあり。」澄は問うた、『先代の儒者の言に、「聖人の道は、必ず降りて自ら卑くす。賢人の言は、則ち引きて自ら高くす」と曰つてありますが、此言は如何でございますか』と。○先生曰、不然、如此却是僞也、聖人如天、無往而非天云云。三光とは日と月と星とをいふ。九地、九は數の極なるを以て、九地とは極めて深き地をいふ。孫子軍形篇に、『九地の下に藏る』とあり、註に、『深きを言ふなり』とあり。大にして之を化す。趙岐は、『大に其道を行ひ、天下をして之に化せしむ、是を聖人と爲す』と註して居り、朱子は、『大にして能く化すとは、其の大なる者をして泯然として復

た見る可きの迹無からしむ。則ち思はず勉めず、從容として道に中り、而して人力の能く爲す所に非ず』と註して居る。王子は朱子の說に從ひしものの如し。旣に其大を極めて、其の大と認むべき痕跡も消え化して見えずとの意。大にして之を化すの語は、孟子盡心下篇に、『欲す可き、之を善と謂ひ、諸を己に有する、之を信と謂ひ、充實せる、之を美と謂ひ、充實して光輝有る、之を大と謂ひ、大にして之を化する、之を聖と謂ひ、聖にして之を知る可からざる、之を神と謂ふ』とあるに本づく。賢人は山嶽の如し。標註に、『下卷の先生、人を鍛錬するの條に曰はく、「先生は譬へば泰山の・前に在るが如し。仰ぐを知らざる者有れば、須く是れ目無き人なるべしと。先生曰はく、泰山は平地の大なるに如かず。平地は何の見る可き有らん」と。是れ聖賢の辨なり』とあり。百仞。七尺を一仞と曰ふ。百仞は七百尺あり。」先生は曰はれた、『さうでは無い。若しさうであるならば、僞である。聖人の道は、極めて廣大にして邊際無く、譬へば天の如くである。何處に往きても、天で無い所は無いのである。日月星の三光の上は天である。九地の下も亦天である。天は未だ嘗て降つて自ら卑くするといふことは無いのである。聖人や天は、孟子の謂ふ所の大にして之を化する者であつて、極めて廣大にして、廣大といふ迹も無いのである。賢人は、とても聖人の大なるには及ばず、たとへば山嶽の如く、其の自ら得たる高さを守るだけのことである。そして百仞の高さの者は、之を引きて高くして千仞の高さとすることは出來ない。千仞の高さの者は、之を引きて高くして萬仞の高さとすることは出來ないのである。百仞の高さの者は依然として百仞の高さであり、千仞の高さの者は依然として千仞の高さである。これと同じく、賢人は未だ嘗て引きて自ら高くすることは無いのである。若し引きて自ら高くするときは、僞である。聖人・賢人には僞は無いのである』と。

問。伊川謂。不當於喜怒哀樂未發之前求中。延平却教學者看未發之前氣象。何如。先生曰。皆是也。伊川恐人於未發前討箇中。把中做一物看。如吾向所謂認氣定時做中。故令只於涵養省察上用功。延平恐人未便有下手處。故令人時時刻刻求未發前氣象。使之正目而視惟此。傾耳而聽惟此。卽是戒愼不睹恐懼不聞的工夫。皆古人不得已誘人之言也。

〔訓讀〕　問ふ、『伊川謂はく、「當に喜怒哀樂未發の前に於て中を求むべからず」と。延平は却つて學者に敎へて未發の前の氣象を看しむ。何如。』先生曰はく、『皆是なり。伊川は、人が未發の前に於

て箇の中を討ね、中を把りて一物と做して看ること、吾が向に謂はゆる氣定まる時を認めて中と做すが如くならんことを恐る。故に只だ涵養省察の上に於て功を用ひしむ。延平は人の未だ便ち手を下す處有らざらんことを恐る。故に人をして時時刻刻に未發の前の氣象を求めしめ、之をして目を正しくして視ること惟だ此、耳を傾けて聽くこと惟だ此ならしむ。即ち是れ睹ざるを戒愼し聞かざるを恐懼するの工夫なり。皆是れ古人の已むを得ずして人を誘ふの言なり。』

〔註解〕問、伊川謂、不當於喜怒哀樂未發之前求中、延平却教學者看未發之前氣象、何如。伊川、姓は程、名は頤、字は正叔。河南洛陽の人、珦の次子、明道先生の弟。業を周敦頤に受け、頗る高識あり。生平、誠を以て本と爲し、窮理を以て主と爲す。晩年、易傳及び春秋傳等を著はす。時に伊川先生と號し、正公と謚す。當に喜怒哀樂未發の前に於て中を求むべからず。近思錄存養類に、『蘇季明問ふ、「喜怒哀樂未だ發せざるの前に中を求むるは可なりや否や。」(伊川先生)曰はく、「不可なり。既に喜怒哀樂未だ發せざるの前に之を求めんことを思ふは、又却つて是れ思ふなり。既に思ふは即ち是れ已に發したるなり。纔に發すれば便ち之を和と謂ふ。之を中と謂ふ可からざるなり。」又問ふ、「呂學士言ふ、當に喜怒哀樂未だ發せざるの前に之を求むべしと。如何。」曰はく、「若し喜怒哀樂未だ發せざるの前に存養すと言ふときは則ち可なり。若し中を喜怒哀樂未だ發せざるの前に求むと言ふときは則ち不可なり。」又問ふ、「學者、喜怒哀樂の發する時に於ては、固に當に勉強して裁抑すべし。未だ發せざるの前に於ては、當に如何か功を用ふべき。」曰はく、「喜怒哀樂未だ發せざるの前に於て、更に怎生求めん。只だ平日涵養すれば便ち是なり。涵養すること久しければ、則ち喜怒哀樂發して自ら節に中る。」曰はく、「中の時に當りて、耳、聞く無く、目、見る無しや否や。」曰はく、「耳、聞く無く、目、見る無しと雖も、然れども見聞の理有りて始めて得。賢且く說け、靜なる時は如何。」曰はく、「之を物無しと謂ふは則ち不可なり。然れども自ら知覺する處有り。」曰はく、「既に知覺有れば、却つて是れ動なり。怎生ぞ靜と言はん。人、復は其れ天地の心を見るといふを說き、皆以謂へらく、至靜にして能く天地の心を見ると。非なり。復の卦は、下面の一畫、便ち是れ動なり。安んぞ之を靜と謂ふを得ん。」或るひと曰はく、「是れ動上に於て靜を求むる無きや否や。」曰はく、「固に是なり。然れども最も難し。釋氏は多く定を言ふ。聖人は即ち止を言ふ。人君と爲りては仁に止まり、人臣と爲りては敬に止まるの類の如き、是なり。易の艮に、止まるの義を言ひて曰はく、其止に艮まるは、其所に止まるなりと。人多く止まる能はず。蓋し人には萬物皆備はる。事に遇ふ時、各〻其心の重んずる所の者に因りて、更互して出づ。纔に這事を見得て重ければ、便ち這事有りて出づ。若し能く物各〻物に付すれば、便ち自ら出で來らず。」或るひと曰はく、「先生は、喜怒哀樂未だ發せざるの前に於ては、動の字を下すや、靜の字を下すや。」曰はく、「之を靜と謂ふは則ち可なり。然れども靜中に須く物有りて始めて

得べし。這裏便ち是れ難處なり。學者は且(しばら)く先づ敬を理會し得るに若くは莫し。能く敬するときは則ち此を知る。」或るひと曰はく、「敬、何を以てか功を用ひん。」曰はく、「一を主とするに如くは莫し。」季明曰はく、「昞(へい)嘗て思慮の定まらざるを患ふ。或は一事を思ひて未だ了らざるに、他事、麻の如く又生ず。如何。」曰はく、「不可なり。此れ誠ならざるの本なり。須(すべから)く是れ習ふべし。習ひて能く專一なる時は便ち好し。思慮と事に應ずるとに拘(かゝは)らず、皆、一を求めんことを要す」と。

謝絕すること四十餘年、衣食しばしば空しけれども、怡然として自得す。朱子、之に師事す。卒して後、文靖と謚す。延平は却つて學者に教へて未發の前の氣象を看しむ。延平答問に、『羅先生、學者をして喜怒哀樂未發の前に何の氣象を作すかを看しむ。此れ進學に於て方あるのみならず、亦これ養心の要なり』云云とあり。詳細は延平答問及び伊洛淵源錄を參照せよ。」澄は問うた、『程伊川先生は、喜怒哀樂の未だ發せざる前に於て中を求むべきでは無いと言はれました。李延平先生は之に反して、學者に教へて、喜怒哀樂の未だ發せざる前の氣象は如何なる情態であるかを看させられました。是等の二先生の教は矛盾して居りますが、如何で御座いますか』と。○先生曰、皆是也云云。氣定まる時を認めて中と做す。卷內の寧靜にして心を存するの條に、『今の人、心を存するは、只だ氣を定め得るのみ。其の寧靜なる時に當りても、亦只だ是れ氣寧靜なるのみ。以て未發の中と爲す可からず』とあり。又、『定は心の本體、天理なり。動靜は過ふ所の時なり』とあり。涵養は、ひたしやしなふこと。省察は自ら反省し考察すること。使之正目而視云云の之の字は、一本には人に作る。睹ざるを戒懼し、聞かざるを恐懼すは、中庸の語。」先生は曰はれた、『伊川・延平の二先生の言は、皆宜しいのである。伊川先生の意は、學者が喜怒哀樂未だ發せざるの前に於て一箇の中を討ね求め、中を以て一つの物と爲して看ること、自分が前に謂つた所の氣が寧靜にして鎭定する時を認めて中と做すが如くならんことを恐れられたので、それ故に、只だ其の發したる時に於て、涵養省察の上に工夫を用ひさせられたのである。延平先生の意は、學者が未だ卽ち工夫の上に著手する處が有らざらんことを恐れられたので、それ故に學者をして時時刻刻に喜怒哀樂未だ發せざる前の氣象を求めしめ、之をして間斷無く注意して、目を正しくして視ることは唯だ此のみであり、耳を傾けて聽くことは唯だ此のみであり、更に餘念無からしめようとされたのであつて、卽ち中庸に謂はゆる人の睹ざる所を戒愼し、人の聽かざる所を恐懼し、獨を愼むの工夫である。二先生の教へ方は異なつて居るけれども、いづれも皆、古人が已むを得ずして人を誘導するところの言であつて、いづれも皆結構なる教である』と。○孫奇逢曰はく、『古人、已むを得ずして人を誘ふの心、原(もと)各(おのゝ)是處(ぜしよ)有り。之を執れば又棄訟を成す』と。

澄問。喜怒哀樂之中和。其全體常人固不能有。如一件小事當喜怒者。平時無有喜怒之心。至其臨時。亦能中節。亦可謂之中和乎。先生曰。在一時一事。固亦可謂之中和。然未可謂之大本達道。人性皆善。中和是人人原有的。豈可謂無。但常人之心。既有所昏蔽。則其本體。雖亦時時發見。終是暫明暫滅。非其全體大用矣。無所不中。然後謂之大本。無所不和。然後謂之達道。惟天下之至誠。然後能立天下之大本。曰。澄於中字之義。尚未明。曰。此須自心體認出來。非言語所能喻。中只是天理。曰。何者爲天理。曰。去得人欲。便識天理。曰。天理何以謂之中。曰。無所偏倚。曰。無所偏倚。是何等氣象。曰。如明鏡然。全體大用。略無纖塵染著。曰。偏倚是有所染著。如著在好色好利好名等項上。方見得偏倚。若未發時。美色名利。皆未相著。何以便知其有所偏倚。曰。雖未相著。然平日好色好利好名之心。原未嘗無。既未嘗無。卽謂之有。既謂之有。則亦不可謂無偏倚。譬之病瘧之人。雖有時不發。而病根原不曾除。則亦不可謂之無病之人矣。須是平日好色好利好名等項。一應私心。掃除蕩滌。無復纖毫留滯。而此心全體廓然純是天理。方可謂之喜怒哀樂未發之中。方是天下之大本。

〔訓讀〕　澄問ふ、『喜怒哀樂の中和なる、其全體は、常人は固より有する能はず。一件の小事の當に喜怒すべき者の如き、平時、喜怒の心有る無く、其の時に臨むに至りても、亦能く節に中らば、亦、之を中和と謂ふ可きか。』先生曰はく、『一時一事に在りても、固より亦、之を中和と謂ふ可し。然れども未だ之を大本達道と謂ふ可からず。人の性は皆善にして、中和は是れ人人原有る的なり。豈に無しと謂ふ可けんや。但だ常人の心は、既に昏蔽する所有れば、則ち其本體は、亦時時に發見すと雖も、終に是れ暫く明かに暫く滅し、其全體大用に非ず。中ならざる無くして、然る後に

之を大本と謂ひ、和ならざる所無くして、然る後に之を達道と謂ふ。惟だ天下の至誠にして、然る後に天下の大本を立つ。』曰はく、『澄、中の字の義に於て、尙ほ未だ明かならず。』曰はく、『此は須く自心に體認して出で來るべし。言語の能く喩す所に非ず。中は只だ是れ天理なり。』曰はく、『何者をか天理と爲す。』曰はく、『人欲を去り得ば、便ち天理を識らん。』曰はく、『天理は何を以て之を中と謂ふ。』曰はく、『偏倚する所無し。』曰はく、『偏倚する所無きは、是れ何等の氣象ぞ。』曰はく、『明鏡の如く然り。全體大用、略も纖塵の染著する無し。』曰はく、『偏倚は是れ染著する所有り。色を好み利を好み名を好む等の項の上に著在するが如きは、方に偏倚を見得。若し未だ發せざる時は、美色名利、皆、未だ相著かず。何を以て便ち其の偏倚有るを知らん。』曰はく、『未だ相著かずと雖も、然れども平日、色を好み利を好み名を好むの心、原未だ嘗て無くんばあらず。既に未だ嘗て無くんばあらざれば、卽ち之を有りと謂ふ。既に之を有りと謂へば、則ち亦、偏倚無しと謂ふ可からず。之を瘧を病むの人に譬ふるに、時有りて發せずと雖も、而も病根原曾て除かざれば、則ち亦、之を病無きの人と謂ふ可からず。須く是れ平日、色を好み利を好み名を好む等の項の、一應の私心、掃除蕩滌して、復た纖毫の留滯する無く、而して此心の全體廓然として、純ら是れ天理なるべし。方に之を喜怒哀樂未發の中と謂ふ可し。方に是れ天下の大本なり。』

〔註解〕　澄問、喜怒哀樂之中和、其全體常人間不能有云云。喜怒哀樂の中和、中庸に、『喜怒哀樂の

る、之を和と謂ふ。中和を致し、天地位し、萬物育はる』とあるに本づく。」澄は問うた、『私は學問に力を用ひますけれども、知識が上達いたしませぬが、如何したらば善いで御座いませうか』と。先生は曰はれた、『學問を爲すには、是非とも本原があるべきである。是非とも本原の處に於て力を用ひて、漸次に徐ろに進むこと、水が穴などに滿ちて然る後に徐徐に進むやうにあるべきである。一足飛びに上達しようなどと考へるべきでは無いのである。道家に於て、嬰兒を以て道の修行に譬へて居るが、これ亦善い譬である。嬰兒が母親の胎內に居るときは、只だ純粹の氣のみであつて、何の知識も無いのである。胎內を出でて後、始めて啼くことが出來るやうになり、さうするうちに、笑ふことが出來るやうになり、又さうするうちに、其父母や兄弟を識別することが出來るやうになり、立つことが出來るやうになり、歩くことが出來るやうになり、物を持つことが出來るやうになり、物を背負ふことが出來るやうになり、終には天下の事、何でも出來るやうになるのである。これは皆、精粹なる元氣が日々に足りて十分なるときは、體力も日々に强くなり、耳目の聰明も日々に開けるのである。かやうに嬰兒が成長發達するのは、母親の胎內を出でる時に直に後來爲すべき事を豫め講求し推究しておくのでは無いのである。精粹なる元氣が日々に足るときは、自然にここに到達するのである。故に是非とも一つの本原が有るべきである。聖人が、天地を位して其處に安んぜしめ、萬物を育てて其生を遂げしむる

ほどの大德に到達するのも、ただ喜怒哀樂の未だ發せざるの中の處から養つて、漸次に此大德に到つたのである。然るに後世の儒者は哀樂の未だ發せざるの中の處から養つて、漸次に此大德に到つたのである。然るに後世の儒者は大學に說いてある格物の意味を明かにせずして、聖人が大智にして知らざること無く、多能にして能くせざること無きを見て、初めて手を下して學問をする時に於て其の有らゆる事を殘らず講究しようと思ふのである。さやうの道理は決して無いのである』と。○又曰、立志用功、如種樹然云云。懸想は、遙に想ふなり、遠くより豫想すること。但不忘栽培之功、怕沒有枝葉花實。一說に、怕の字を反語として、『但だ栽培の功を忘れずんば、枝葉花實有る沒きを怕れんや』と讀む說あれども、私は、『但だ、栽培の功を忘れず・枝葉花實有る沒きを怕れず』と讀み、栽培の功を忘れず、又、枝葉花實有る沒きを怕れず、との意に解するを善しと思ふ。』先生は又語を繼いで曰はれた、『志を立てて學問修養の工夫をするのは、たとへば樹を植ゑるが如きものである。初に其樹の根と芽とばかり有る時には、まだ幹は無いのである。さうするうちに幹は出たけれども、まだ枝は無いのである。さうするうちに枝が出て後に葉が出、葉が出て後に花が咲き實が成るのである。初に根を種ゑる時には、只管に栽培し灌漑することを勤め、枝の豫想をしてはならぬ、葉の豫想をしてはならぬ、花の豫想をしてはならぬ、實の豫想をしてはならぬのである。後の事を遙かに豫想しても何の益も無いことである。但だ、栽培の勤を忘れること無く、枝や葉や花や實が無いことを怕れることも無いのである。ただ今日の修養工夫を心懸けるべきであつて、後日の結果を豫期すべきでは無いのである。本原が有れば、自然に、到達すべき處に到達するのである』と。○孫奇逢曰はく、『功深く力到れば、當に自得の時有るべし。要は忘るる勿く助くる勿きに在り』と。

問。看書不能明。如何。先生曰。此只是在文義上穿求。故不明。如此又不如爲舊時學問。他到看得多解得去。只是他爲學。雖極解得明曉。亦終身無得。須於心體上用功。凡明不得。行不去。須反在自心上體當。卽可通。蓋四書五經。不過說這心體。這心體卽所謂道。心體明卽是道明。更無二。此是爲學頭腦處。

〔訓讀〕問ふ、『書を看るに明かなる能はざるは、如何せん。』先生曰はく、『此れ只だ文義上に在りて穿求す、故に明かならず。此の如きは、又、舊時の學問を爲すに如かず。他、看得て多きに到らば、解し得去らん。只だ是れ他、學を爲す、極めて解し得て明曉なりと雖も、亦、身を終るまで得る無し。須く心體上に於て功を用ふべし。凡そ明かにし得ず、行ひ去らざれば、須く反つて自心上に在りて體當すべし。卽ち通ず可し。蓋し四書・五經は、這心體を說くに過ぎず。這心體

は、即ち謂はゆる道なり。心體明かなれば即ち是れ道明かなり。更に二無し。此は是れ學を爲す頭腦の處なり。』

〔註解〕 此章は、書を讀むには須く自心の上に引き當てて體得すべきことを說くのである。○問、看書不能明、如何。先生曰、此只是在文義上穿求、故不明云云。穿求は、穿鑿講求すること。舊時の學問を爲す人は、書を讀むこと多きに至らば、自然に明瞭に解するに至るべきをいふ。到の字、一本には倒に作り、『他倒つて看得て多く解し得去る』と讀み、舊時の學問を爲す人の方が、却つて書を讀むこと多く、明瞭に理解するのである、との意に解す。後の說が善いかと思へども、姑く底本に從ふ。心體は心の本體。體當は實際に引き當てて工夫すること。四書五經は這心體を說くに過ぎず。象山集要五に、『學苟くも本有れば、六經は皆我が註脚なり』とあり、又、『六經、我を註す。我、六經を註するに非ず』とあり。這心體即所謂道心體明即是道明の二句は、從來の刊本多くは道心を以て句と爲し、『這の心體は即ち謂はゆる道心なり、體明かなれば即ち是れ道明かなり』と讀めども、道を以て句と爲し、『這の心體は即ち謂はゆる道なり。心體明かなれば即ち是れ道明かなり』と讀むを勝れりと爲す。標註に、『案ずるに、讀書の法、是に於て更に下卷の「九川問ふ、此工夫」の條、及び同じき「問ふ、書を讀むは此心を調攝する所以」、及び「一友問ふ、書を讀むに

の如く說く。博文約禮は、如何ぞ是れ善く人を誘(みちび)くなる。學者須く之を思ふべし。道の全體は、聖人も亦以て人に語り難し。須く是れ學者自ら修め自ら悟るべし。顏子の「之に從はんと欲すと雖も、由末(よしな)きなるのみ」とは、即ち文王の・道を望みて未だ見ざるの意なり。道を望みて未だ見ざるは、乃ち是れ眞に見るなり。顏子沒して、聖學の正派は、遂に盡(ことごと)くは傳はらず。』

〔註解〕 問、顏子沒而聖學亡、此語不能無疑。顏子沒して聖學亡ぶ。陽明文錄卷二、湛甘泉に別る序の中に、『顏子沒して聖學傳はらず』とあり。傳習錄筆記に曰はく、『顏子以後、曾子あつて、聖人の道統傳はれり。然るを顏子沒して聖學亡ぶとのたまへば、曾子ともに聖人の道をつぎたまはぬと見ゆ。孟子公孫丑上篇にも「子夏・子游・子張は、皆、聖人の一體有り」云云とあり、曾子のことは見えず。然るに顏子には氣風無し。曾子には魯鈍なる氣風あり。僅に氣風有れば、早や天と似ず。天に似ざる時は、全き聖道に非ず。分厘ほども缺け目ありては聖道の純道に非ず。然れば聖道亡ぶと云ふべしとなり』と。陸象山語錄に曰はく、『顏子、仁を問ふの後、夫子の許多の事業、皆、顏子に分付し了る。故に曰はく、「之を用ふれば則ち行ひ、之を舍つれば則ち藏(かく)む、惟だ我と爾とのみ是(これ)有り」と。顏子沒するや、夫子、之を哭して曰はく、「天、予を喪す」と。蓋し夫子の事業、是より傳ふる無し。曾子、能く其脈を傳ふと雖も、然れども參や魯なり。豈に能く顏子の素蓄を望まんや。幸に曾子、之を子思に傳へ、子思、之を孟子に傳へ、夫子の道、孟子に至

りて一たび光る。然れども夫子の・顏子に分付する所の事業は、亦竟に復た傳はらざるなり』と。疑無き能はず。顏子の沒したる後にも、曾子・子思・孟子等の大賢あり、能く夫子の道を傳へたるに似たり、故に王子の此語を疑ふなり。」澄は問うた、『先生は嘗て、顏子沒して聖人の學は亡びたと仰せられましたが、顏子が無くなつて後にも幾多の賢人があつて聖人の學を傳へて居る樣に思はれますので、先生が聖人の學が亡びたと仰せられた語に就いて、疑を有して居るので御座いますが、御教を御願いたします』と。○先生曰、見聖道之全者惟顏子。觀喟然一嘆可見云云。喟然として一たび嘆ず。論語子罕篇に、『顏淵喟然として歎じて曰はく、之を仰げば彌〻高く、之を鑽れば彌〻堅し。之を瞻れば前に在り、忽然として後に在り。夫子循循然として善く人を誘き、我を博むるに文を以てし、我を約するに禮を以てす。罷めんと欲すれども能はず、既に吾が才を竭し、立つ所有りて卓爾たるが如し。之に從はんと欲すと雖も、由末きなるのみ』と。これ顏子が孔子の道を贊歎したる語にして、其大意は、夫子の道は、仰げば愈〻高くして及ぶ可からず、鑽れば彌〻堅くして入る可からず、前に在り後に在り、恍惚として象を爲す可からず、窮盡無く、方體無し。然るに夫子は循循然として次第に順ひて人を誘導し、文を以て我を博め、禮を以て我を約す。我は罷めんと欲すれども罷むる能はず、常に其後に隨ひて吾が才を竭せり。是に於て始めて夫子の卓然として高く立てる處を認め得たるが如し。而れども進みて其處まで行かんと欲すれども、其處は至つて高遠にして、吾は達し得ざるなり、との意。道を望みて未だ見ず。孟子離婁下篇に、『文王は民を視ること傷つくが如く、道を望みて而も未だ之を見ず』とあり。朱子の註に、『民已に安くして、而も之を視ること猶ほ傷つく有るが若く、道已に至れるに、而も之を望むこと猶ほ未だ見ざるが若し。聖人の・民を愛することと深くして、道を求むること切なること此の如く、自ら滿足せず。終日乾乾の心なり』とあり。傳習錄筆記に曰はく、『之に從はんと欲すと雖も云ふは、あれ見やと道の全體を見付けたるを云ふ。扨それを手に取らんと思召せどもならぬなり。それに從はんと欲すれども由末きのみと云へり。文王、道を望みて未だ見ずとあるも、右の意なり。道は、なりの無き者なり。故に取りとめられぬ者なり。是ちやとなりの付きたるは、眞見に非ず、道、死物になるなり。眞見、義理は定在無く、窮盡無し。是れと見定め見窮むる者は道に非ず、故に未だ見ずとのたまふ。眞の見なり。是を眞見とする處、亦、王子が道を合點したまへる所なり』と。」先生は曰はれた、『孔子の門下には多くの弟子が有つて、その道の一端を得た者は有るけれども、聖人の道の全體を見得たる者は、唯だ顏子のみである。顏子が、「夫子循循然として善く人を誘く、我を博むるに文を以てし、我を約するに禮を以てす」と謂つたのは、聖人の道の全體を見開きて後に、此の如く說いたのである。この博文約禮といふことが、如何して善く人を誘導することであ

るのか。學者たるものは、是非とも善く考へねばならぬことである。道の全體は、聖人とても、人に語ることは難いのである。是非とも學者たるものが自ら修め自ら悟るを要するのである。顏子が「之に從はんと欲すと雖も、由末きなるのみ」と曰つたのは、卽ち孟子が文王は道を望みて未だ之を見ずと曰つたのと同じである。道を望みて未だ之を見ないといふのは、眞實に道の全體を見て居るのである。顏子が死して後は、聖人の學の正派は、遂に盡くは傳はらないのである。聖人の學の一部分を傳へたものは有るけれども、正派を全部傳へたといふことは出來ないのである』と。

問。身之主爲心。心之靈明是知。知之發動是意。意之所著爲物。是如此否。先生曰。亦是。

〔訓讀〕問ふ、『身の主は心と爲す。心の靈明なるは是れ知、知の發動するは是れ意、意の著く所は物と爲す。是れ此の如きや否や。』先生曰はく、『亦是なり。』

〔註解〕澄は問うた、『一身の主宰は心である。心の靈明なるは知である。知の發動するは意である。意の著く所は物である。此の如く解して差支御座いませぬか』と。先生は曰はれた、『さう考へても宜しい』と。○陶溥霍曰はく、『「亦是なり」と云ふは、蓋し先生の本意は、心の發するを謂ひて意と爲し、意の本體を知と爲し、意の著く所を物と爲すなり。方に大學の序と合ふ』と。一說に、此章に說く所は、王子の平生の旨と少しも異なつてゐないのに、王子が徒だ『亦是なり』と答へて、言外に何と無く不滿足の所有るが如く見えるのは、蓋し道は言詮を以て求むべきものでは無い、故に若し一定の字義を立てて道を求めようとするのは、道を去ること遠いのである、それを戒めるために斯く答へたのである、と解するのは、穿鑿に過ぎて居るやうに思はれる。陸澄は知解上に轉じて道を求むるの風有る人であるけれども、王子が若し此處でそれを戒めようとするならば、別に何等かの言有るべき筈であつて、言外に不滿足の意を表するなどの小細工は有るまじきことと思はれる。蓋し心性上の事を分類して定義を立つることは、必ずしも一定することは出來ないのであつて、陸澄の言ふ所の如く定むるも亦是なりとして斯く答へられたのであらう。私は文字上に現れて居る通り正直に解する方が善いと信ずるのである。

只存得此心常見在。便是學。過去未來事。思之何益。徒放心耳。

〔訓讀〕只だ此心を存し得て常に見在するは、便ち是れ學なり。過去未來の事は、之を思ふとも何の益あらん。徒らに心を放つのみ。

〔註解〕見在は現在と同じ。」只だ此心を存して常に現在せしむるが、卽ち是れ學である。過去の事や未來の事は、之を空想するとも何の益も無く、徒らに心を放つのみである。『傳習錄筆記に曰はく、『過去未來の事之を思ふとは將迎なり。常に見在すとは、當下良知を存することなり。歌に「さし當る言の葉ばかり思へただ、かへらぬ昔知らぬ行末。」さて此段など言句に執滯して看あやまるべからず。過去を思ひ未來を思ふが當下良知にて、思はぬが放なることもあり。明日の事務を今日思ひ調べるのが今日の當下なることも多し。周公の古を考へ、後世をはかり、夜以て日に繼ぐ、是れ卽ち當下なり。孔子の遠慮も同じ。慮らざるは却つて放心なり。聖賢は千歲一日の如し。此段の云ふ處は、往來憧憧の思念適莫將迎閒雜等の思ひを云ふなり』と。

言語無序。亦足以見心之不存。

〔訓讀〕言語、序無きは、亦、以て心の存せざるを見るに足る。

〔註解〕序は秩序、次第なり。」人の言語の錯亂して秩序無きものは、亦、これを以て心の放れて存しないことを見るに足るのである。○傳習錄筆記に曰はく、『是れも言語の次第を失ひたる上にて工夫詮議すれば窮理なり。さうにてはなし。其の序なきの根を視る可し。心存せざる故なり。孟子の知言とのたまふも是れなり。我が言を知れば、天下の言を知るなり。浮淫邪遁に依つて蔽陷離窮を知る、是れ言を知るの道なり』と。

尙謙問孟子之不動心。與告子異。先生曰。告子是硬把捉著此心。要他不動。孟子却是集義。到自然不動。又曰。心之本體。原自不動。心之本體卽是性。性卽是理。性元不動。理元不動。集義是復其心之本體。

〔訓讀〕尙謙、孟子の心を動かさざること告子と異なるを問ふ。先生曰はく、『告子は是れ硬く此心を把捉して、他が動かさらんことを要し、孟子は却つて是れ義を集めて、自然に動かざるに到る。』又曰はく、『心の本體は、原自ら動かず。心の本體は卽ち是れ性なり。性は卽ち是れ理なり。性は元動かず。理は元動かず。義を集むるは是れ其心の本體に復するなり。』

〔註解〕尙謙問孟子之不動心與告子異。尙謙は、姓は薛、名は侃、尙謙は其字なり、中離と號す。揭陽の人。陽明に學ぶ。正德十二年、進士に擧げらる。世宗の時、行人を授けらる。奏疏、旨に忤ひて罷め、家に歸りて益〻學を力む。其持論正大にして、王門の高弟たるに愧ぢず。隆慶の初、官を復し、御史を贈らる。孟子の心を動かさざること告子と異なり。孟子公孫丑上篇に、『（公孫丑）

曰はく、「敢て問ふ、夫子の・心を動かさざると、告子の・心を動かさざると、聞くを得可きか。」「告子曰はく、言に得されば、心に求むる勿かれ。心に得されば、氣に求むる勿かれと。心に得されば、氣に求むる勿かれとは、可なり。言に得されは、心に求むる勿かれとは、不可なり。夫れ志は氣の帥なり。氣は體の充なり。夫れ志至り、氣次ぐ。故に曰はく、其志を持し、其氣を暴する無かれと。」(中略)「敢て問ふ、夫子惡にか長ぜる。」曰はく、「我は言を知る。我は善く吾が浩然の氣を養ふ。」「敢て問ふ、何をか浩然の氣と謂ふ。」曰はく、「言ひ難きなり。其の氣たるや、至大至剛、直を以て養ひて害する無ければ、則ち天地の間に塞がる。其の氣たるや、義と道とに配す。是無ければ餒うるなり。是れ集義の生ずる所の者にして、義襲ひて之を取るに非ざるなり。行、心に慊らざる有れば、則ち餒う。我故に曰はく、告子は未だ嘗て義を知らずと。其の之を外にするを以てなり」云云』とあり。詳細は孟子の本文を參照せよ。尙謙は、孟子が心を動かさないのと告子が心を動かさないのとは如何に異なるかを問うた。○先生曰、告子是硬把捉著此心、要他不動、孟子却是集義到自然不動。硬く把捉すは、かたくつかまへて握りしめるが如きをいふ。他は心をさす。」先生は曰はれた、『告子は、硬く此心をつかまへ、强ひて心の動かないやうにしようとしたのである。孟子は、之に反して、義を集め善を積みて、心が自然に動かないやうに到つたのである』と。」傳習錄筆記に曰はく、『告子が心を動かさざるの方を云はば、放下なり。孟子公孫

謂ひ、人に賦するよりして之を性と謂ひ、身に主たるよりして之を心と謂ふ。心の發するや、父に遇ひては便ち之を孝と謂ひ、君に遇ひては便ち之を忠と謂ふ。此より以往、名、窮り無きに至るも、只だ一の性のみ。猶ほ人は一のみなるに、父に對しては之を子と謂ひ、子に對しては之を父と謂ひ、此より以往、窮り無きに至るも、只だ一人のみなるがごとし。人は只だ性の上に在りて功を用ふるを要す。一の性の字を看得て分明なれば、卽ち萬理燦然たり。』

〔註解〕　此章は、人は只だ性の上に於て工夫を用ひんことを要し、性の一字を明かにするを得ば、萬理皆分明なるべきことを說くのである。○澄問、仁義禮智之名、因已發而有、曰然。仁義禮智を四德として列擧することは、蓋し孟子より始まつたであらう。已發は未發に對する語にして、其性の已に發動したるをいふ。」澄は問うた、『仁義禮智の四德と爲るべきものは、もとより性の中に具へて居るのであるけれども、仁義禮智といふ名稱は、性が已に發動した處によつて出來るものと思ひますが、如何で御座いませうか』と。すると先生は『さうである』と曰はれた。○他日澄問、惻隱羞惡辭讓是非、是性之表德邪。曰、仁義禮智、也是表德云云。惻隱羞惡辭讓是非は、孟子公孫丑上篇に、『惻隱の心は仁の端なり。羞惡の心は義の端なり。辭讓の心は禮の端なり。是非の心は智の端なり』とあるに本づく。性の表德とは、性の外に表はれたる德をいふ。」其後或る日澄は問うた、『惻隱・羞惡・辭讓・是非は、性が外に表はれたる德で御座いますか』と。先生は曰

はれた、『さうである。そればかりではく、仁義禮智も亦、性が外に表はれたる德である。性の德が外に表はれて、或は仁と爲り、或は義と爲り、或は禮と爲り、或は智と爲るのである。性は唯だ一つであるが、其形體の上から名づけて天と謂ひ、それが萬物を主宰する方面から名づけて帝と謂ひ、それが萬物に流行し行き渡つて居る方面から名づけて命と謂ひ、人に賦與されて居る方面から名づけて性と謂ひ、それが身體の主と爲つて居る方面から名づけて心と謂ふのである。人の心が發動するに就いては、父に對して發動するときは、孝と謂ひ、君に對して發動するときは忠と謂ふのである。これより以上、限り無き名稱があるけれども、只だ一つの性である。性は一つであるけれども、種種の方面から見て、種種の名が付けられるのである。それは、丁度、人は一人であるのに、父に對しては子と謂ひ、子に對しては父と謂ひ、これより以上、種種の境遇によつて種種の名がつけられ、限り無き名稱が有るけれども、只だ一人であるのと同じ事である。それ故に、人は只だ性の上に於て工夫を用ひることを要するのである。一つの性の字を分明に了解することが出來たならば、天下の有らゆる理は瞭然として明瞭に了解されるのである』と。

一日論爲學工夫。先生曰。教人爲學。不可執一偏。初學時。心猿意馬。栓縛不定。其所思慮。多是人欲一邊。故且教之靜坐息思慮。久之俟其心意稍定。只懸空靜守如槁木死灰。亦無用。須教他省察克治。省察克治之功。則無時而可間。如去盜賊。須有箇掃除廓清之意。無事時。將好色好貨好名等私。逐一追究搜尋出來。定要拔去病根。永不復起。方始爲快。常如猫之捕鼠。一眼看著。一耳聽著。纔有一念萌動。卽與克去。斬釘截鐵。不可姑容與他方便。不可窩藏。不可放他出路。方是眞實用功。方能掃除廓清。到得無私可克。自有端拱時在。雖曰何思何慮。非初學時事。初學必須思。省察克治。卽是思誠。只思一箇天理。到得天理純全。便是何思何慮。

〔訓讀〕一日、學を爲す工夫を論ず。先生曰はく、『人に學を爲すを敎ふるには、一偏を執る可からず。初學の時は、心猿意馬、栓縛すれども定まらず、其の思慮する所は、多くは是れ人欲の一邊なり。故に且く之に靜坐して思慮を息むることを敎へ、之を久しうして、其心意の稍や定まるを俟つ。只だ懸空に靜守して槁木死灰の如きも亦用無し。須く他に省察克治することを敎ふべし。

省察克治の功は、則ち時として間す可き無く、盜賊を去るが如く、須く箇の掃除廓清の意有るべし。事無き時は、色を好み貨を好み名を好む等の私を將て、逐一追究搜尋し出し來り、定す病根を拔き去りて永く復た起らさらんことを要し、方に始めて快と爲す。常に、猫の・鼠を捕ふるに、眼を一にして看著し、耳を一にして聽著するが如く、纔に一念の萌し動く有れば、即ち興に克ち去り、釘を斬り鐵を截るがごとく、姑くも他の方便を容與す可からず、窩藏す可からず、他の出路を放つ可からず。方に是れ眞實に功を用ひ、方に能く掃除廓清し、私の克つ可き無きを得るに到らば、自ら・端拱する時の在る有らん。何をか思ひ何をか慮らんと曰ふと雖も、初學の時の事に非ず。初學は必ず須く思ふべし。省察克治は、即ち是れ誠を思ひ、只だ一箇の天理を思ふなり。天理純全なるを得るに到らば、便ち是れ何をか思ひ何をか慮らん。』

〔註解〕此章は學を爲す工夫を說くのである。○一日論爲學工夫、先生曰、教人爲學、不可執一偏云云。一偏は一方に偏ること。心猿意馬は、情意の妄動することを猿と馬とに喩へたのである。參同契註に、『心猿定まらず、意馬四もに馳す』とあり。栓縛、栓は馬を繫ぐこと。懸空は茫漠として目當て無きをいふ。槁木は、枯れたる木。體の動かざるに譬ふ。死灰は、つめたき灰。念の起らざるに譬ふ。莊子齊物論に、『形は固より槁木の如くならしむ可く、而して心は固より死灰の如くならしむ可きか』とあるに本づく。用無しは、效無しの意。省察は自ら反省して考察すること。循はずは天理に循ひ行はざるをいふ。去らずは人欲を除き去らざるをいふ。襲ひて取るは孟子公孫丑上篇に出づ。前に數〻註せり。』先生は曰はれた、『今や自分が謂ふ所の格物の學を爲す者でさへも、尙ほ多くは口と耳との學問に流れて、心術の工夫をする者は少いのである。まして初から口と耳との學を爲す者には、とても此本體心術に立ち反りて工夫を爲す者は無いのである。天理と人欲との精微なる者は、必ず時時刻刻に力を用ひて反省考察克己修治して、始めて日〻に漸次に見得る所が有るのである。今、一場の談話の中に、口には天理を講究するけれども、心の中には忽ちの間に已に幾何かの私欲が有ることを知らないのである。蓋し其私欲の中には、其の發すること隱微にして知られない者が有るであらう。これは力を用ひて省察するとても、尙ほ容易に見得られないのである。況んや唯だ口にのみ天理人欲を講究して、反省考察克己修治の工夫を用ひない者の、盡く知ることを得られることでは無いのである。今、只管に天理を講究するけれども、そのまま捨て置きて天理に循ひ行はず、人欲を講究するけれども、そのまま捨て置きて人欲を除き去らうとしないのは、格物致知の學では無いのである。後世の學は、其極處に至るとても、畢竟、只だ一箇の謂はゆる襲ひて取るの工夫を做すに過ぎず、義を集め善を積みて聖賢の境致に至らうとするのではなく、二三の義を行つて一朝一夕に聖賢と爲らうとするものである』と。○施邦曜曰はく、『數語、俗學の病根、數を盡して拈出す』と。

問。格物。先生曰。格者正也。正其不正以歸於正也。

〔訓讀〕格物を問ふ。先生曰はく、『格とは正すなり。其不正を正して以て正に歸するなり』

〔註解〕格物の格の字、朱子は『至る』と訓し、『物に至る』と解し、王子は『正す』と訓し、『物を正す』と解す。」澄は問うた、『格物の義は如何で御座いますか』と。先生は曰はれた、『格とは正すことである。物の正しからざるを正して、正に歸せしむることである』と。

問。知止者。知至善只在吾心。元不在外也。而后志定。曰然。

〔訓讀〕問ふ、『止まるを知るとは、至善は只だ吾が心に在りて元外に在らざるを知るなり。而して后に志定まる。』曰はく、『然り。』

〔註解〕知止。大學に、『止まるを知りて而して後に定まる有り』とあり、朱子の註に、『止まるとは、當に止まるべき所の地、即ち至善の在る所なり。之を知れば則ち志、定向有り』とあり。」澄は問うた、『私が思ひますに、大學に、止まるを知るといふのは、至善は只だ自分の心の中に在つて、元來、外に在るのでは無いことを知るのであつて、そして後に志が定まるのである、と思ひますが、如何で御座いますか』と。先生は曰はれた、『さうである』と。

問。格物於動處用功否。先生曰。格物無間動靜。靜亦物也。孟子謂。必有事焉。是動靜皆有事。

〔訓讀〕問ふ、『格物は動處に於て功を用ふるや否や。』先生曰はく、『格物は動靜を間つる無し。靜も亦物なり。孟子謂はく、「必ず事とする有れ」と。是れ動靜、皆、事有るなり。』

〔註解〕動處に於てとは、事有る時にとの意。必ず事とする有れとは、孟子公孫丑上篇に出づ。常に其事を事として暫時も委棄すること勿かれとの意。傳習錄筆記に曰はく、『必ず事とする有れは、致知格物を仕事とするなり。王子、此の必の字に氣を付けて見たまへる者なり。必の字に氣を付けて見れば、動靜を貫く意見ゆるなり』と。」澄は問うた、『格物は動處に於て工夫を用ふることで御座いますか』と。先生は曰はれた、『格物の工夫を用ひるのは、動と靜とを隔つること無く、動にも此工夫を用ひ、靜にも此工夫を用ひるのである。畢竟、靜も亦物である。孟子の言に、「必ず事とする有れ」と曰つてある。して見ると、動にも靜にも皆事が有るのである』と。

工夫難處。全在格物致知上。此即誠意之事。意既誠。大段心亦自正。身亦自修。但正心修身工夫。亦各有用力處。修身是已發邊。正

心是未發邊。心正則中。身修則和。

〔訓讀〕 工夫の難き處は、全く格物致知の上に在り。此れ卽ち意を誠にするの事なり。意既に誠なれば、大段心も亦自ら正しく、身も亦自ら修まる。但だ正心修身の工夫にも、亦各〻力を用ふる處有り。修身は是れ已發の邊にして、正心は是れ未發の邊なり。心正しければ則ち中、身修まれば則ち和なり。

〔註解〕 已發、未發、中和。中庸に出づ。前に數〻註せり。」工夫の爲し難き處は、全く格物致知の上に在るのである。格物致知は卽ち意を誠にするの事である。意を誠にすることは、一切の道德の根本であつて、意が既に誠なるときは、大體、心も亦自然に正しくなり、身も亦自然に修まるのである。但し心を正しくし身を修むるの工夫にも、亦、それ〳〵力を用ふべき處がある。身を修むることは、已發の方面の事であり、心を正しくすることは、未發の方面の事である。心正しきときは、未發の中であり、身修まるときは、已發の和である。○施邦曜曰はく、『誠意を以て主と爲し、去つて物を格す。物を格すは卽ち是れ善を擇ぶなり』と。

自格物致知至平天下。只是一箇明明德。雖親民。亦明德事也。明德是此心之德。卽是仁。仁者以天地萬物爲一體。使有一物失所。便是吾仁有未盡處。

〔訓讀〕 格物致知より平天下に至るまで、只是れ一箇の明明德にして、親民と雖も、亦明德の事なり。明德は是れ此心の德にして、卽ち是れ仁なり。仁者は天地萬物を以て一體と爲す。一物も所を失ふ有らしめば、便ち是れ吾が仁、未だ盡さざる處有り。

〔註解〕 大學にては、明德を明かにし、民を親しみ、至善に止まるを三綱領とし、物を格し、知を致し、意を誠にし、心を正しくし、身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平かにするを八條目とす。仁者は天地萬物を以て一體と爲す。程子の語、下文に見ゆ。」大學の謂はゆる八條目なる格物・致知より、天下を平かにするに至るまでは、只だ一つの明德を明かにすることである。三綱領の一なる民を親しむこととても、亦、明德の事である。明德は此心の德であつて、卽ち仁である。仁者は天地萬物を以て一體と見做すものである。若し一物にても其所を失ふこと有らば、卽ち吾が仁に未だ十分に盡さない處が有るのである。○標註に、『案ずるに此意、先生の大學問及び文錄第七の親民堂記に詳かに盡す。又第九卷、朱子禮の卷に書すの一編、幷せて其實用を見る』とあり。施邦曜曰はく、『此明德は、蒼天を察し、重淵に入り、天地萬物、那の一件か是れ明德中

の事にあらざらん。聖人は、明徳を明かにするを舍却して、更に何の工夫有らん』と。

只說明明德而不說親民便似老佛。

〔訓讀〕 只だ明明德を說きて、親民を說かざれば、便ち老佛に似たり。

〔註解〕 只だ明德を明かにすることを說いて、民を親しむことを說かざるときは、即ち老子の學・佛者の敎に似て居るのである。○標註に、『案ずるに朱子の大學或問、既に此說有り。然れども先生の說く所と意自ら別なり』とあり。

至善者性也。性元無一毫之惡。故曰至善。止之。是復其本然而已。

〔訓讀〕 至善とは性なり。性は元一毫の惡無し、故に至善と曰ふ。之に止まるは、是れ其本然に復するのみ。

〔註解〕 此章は大學の三綱領の一に、『至善に止まるに在り』とあるに就いて說いたのである。○至善といふのは、本性のことである。本性には元來一毫ほどの惡も無いのである。故に至善と曰ふのである。至善に止まるといふのは、其の本より然る所即ち本性に復るのみである。

問。知至善卽吾性。吾性具吾心。吾心乃至善所止之地。則不爲向時之紛然外求而志定矣。定則不擾擾而靜。靜而不妄動則安。安則一心一意只在此處。千思萬想。務求必得此至善。是能慮而得矣。如此說是否。先生曰。大略亦是。

〔訓讀〕 問ふ、『至善は即ち吾が性にして、吾が性は吾が心に具はり、吾が心は乃ち至善の止まる所の地なるを知れば、則ち向時の紛然として外に求むることを爲さずして志定まる。定まれば則ち擾擾ならずして靜なり。靜にして妄動せざれば則ち安し。安ければ則ち一心一意、只だ此處に在り、千思萬想、務めて必ず此至善を得んことを求む。是れ能く慮りて得るなり。此の如く說くは是なりや否や。』先生曰はく、『大略亦是なり。』

〔註解〕 大學に、『止まるを知りて而して后に定まる有り。定まりて而して后に能く靜なり。靜にして而して后に能く安し。安くして而して后に能く慮る。慮りて而して后に能く得』とあり。此章は之に就きて論ずるのである。○向時は嚮時と同じ。紛然は混雜する貌。外に求むとは、外、事物の上に於て至善を求むるをいふ。擾擾は、みだれさわがしき貌。一心一意とは、他念無きを

いふ。此處に在りとは、至善に在るをいふ。○澄は問うた、『至善は卽ち自分の本性であり、自分の本性は自分の心の內に具はつて居り、そして自分の心は至善の止まり據る所の場處であることを知るときは、これまでのごたごたとして混雜して外に向つて道を求め至善を求むることを爲さずして、志の向ふ所が定まるのであります。(これは『止まるを知りて而して后に定まる有り』を解したのである。)志の向ふ所が定まるときは、みだれさわがしからずして心が靜であります。(これは『定まりて而して后に靜なり』を解したのである。)心が靜にして妄に動かないときは、心が安らかであります。(これは『靜にして而して后に安し』を解したのである。)心が安らかなるときは、一心一意、餘念無く、只だ此至善の處に在り、千思萬想、色色樣樣と工夫して、務めて必ず此至善を得んことを求めるのであります。是れ能く詳かに慮つて遂に至善を得るに至るのであります。(これは『安くして而して后に能く慮る。慮りて而して後に能く得』を解したのである。)此の如く說きますのは、宜しいで御座いませうか、如何で御座いませうか』と。先生は曰はれた、『大略、さやうに說いても宜しいのである』と。

問。程子云。仁者以天地萬物爲一體。何墨氏兼愛反不得謂之仁。先生曰。此亦甚難言。須是諸君自體認出來始得。仁是造化生生不息之理。雖瀰漫周遍無處不是。然其流行發生。亦只有箇漸。所以生生不息。如冬至一陽生。必自一陽生而後漸漸至於六陽。若無一陽之生。豈有六陽。陰亦然。惟其漸。所以便有箇發端處。惟其有箇發端處。所以生生。惟其生生。所以不息。譬之木。其始抽芽。便是木之生意發端處。抽芽然後發幹。發幹然後生枝。生葉。然後是生生不息。若無芽。何以有幹。有枝葉。能抽芽。必是下面有箇根在。有根方生。無根便死。無根何從抽芽。父子兄弟之愛。便是人心生意發端處。如木之抽芽。自此而仁民而愛物。便是發幹生枝生葉。墨氏兼愛。無差等。將自家父子兄弟。與途人一般看。便自沒了發端處。不抽芽。便知得他無根。便不是生生不息。安得謂之仁。孝弟爲仁之本。却是仁理從裏面發生出來。

〔訓讀〕　問ふ、『程子云ふ、「仁者は天地萬物を以て一體と爲す」と。何ぞ墨氏の兼愛は、反つて之を仁と謂ふを得ざる。』先生曰はく、『此れ亦甚だ言ひ難し。須く是れ諸君自ら體認し出で來りて始めて得べし。仁は是れ造化の生生して息まざるの理にして、彌漫周遍して處として是ならざる無しと雖も、然れども其の流行發生する、亦只だ箇の漸有り。生生して息まざる所以なり。冬至の一陽生ずるが如き、必ず一陽生じてよりして後に漸漸に六陽に至る。若し一陽の生ずる無くば、豈に六陽有らんや。陰も亦然り。惟だ其れ漸なり。便ち箇の發端の處有る所以なり。惟だ其れ箇の發端の處有り。生ずる所以なり。惟だ其れ生ず。息まざる所以なり。之を木に譬ふるに、其の始めて芽を抽づるは、便ち是れ木の生意の發端の處なり。芽を抽でて然る後に幹を發し、幹を發して然る後に枝を生じ葉を生じ、然る後に生生して息まず。若し芽無くば、何を以て幹有り枝葉有らん。能く芽を抽づるは、必ず是れ下面に箇の根の在る有り。根有れば方に生じ、根無ければ便ち死す。根無くば何に從りて芽を抽でん。父子兄弟の愛は、便ち是れ人心の生意の發端の處にして、木の芽を抽づるが如し。此より民を仁して物を愛するは、便ち是れ幹を發し枝を生じ葉を生ずるなり。墨氏は兼愛して差等無く、自家の父子兄弟を將て、途人と一般に看る。便ち自ら發端の處を沒了して、芽を抽でず。便ち他が根無きことを知り得たり。便ち是れ生生して息まざるにあらず。安んぞ之を仁と謂ふを得ん。孝弟は仁を爲すの本なり。却つて是れ仁の理は裏面より發生し出で來るなり。』

〔註解〕　問、程子云、仁者以天地萬物爲一體、何墨氏兼愛反不得謂之仁。程子は明道先生なり。名は顥、字は伯淳、珦の長子、伊川先生の兄。河南洛陽の人、業を周敦頤に受く。顥嘗て諸家に泛濫し、老釋に出入し、返つて諸を六經に求めて而して後に之を得たり。定性書を著はし、太極圖說と相表裏し、聖學の祕を開く。卒して純公と謚す。近思錄道體類に、『仁者は天地萬物を以て一體と爲す。己に非ざる莫きなり。己たることを認め得ば、何ぞ至らざる所有らん』云云とあり。蓋し禮記禮運篇の、『聖人は耐く天下を以て一家と爲し、中國を以て一人と爲す』の語に本づくならんと云ふ。墨氏は、姓は墨、名は翟、宋に仕へて大夫と爲る。孔子に稍や後る。其學、兼愛を主とす。其著に墨子有り。兼愛とは、愛に差等無く、世間一般に皆同じく兼ね愛するをいふ。孟子滕文公下篇に、『墨子兼愛す。是れ父を無みするなり』とあり。」澄は問うた、『程明道先生は、「仁者は天地萬物を以て一體と爲す」と曰つて居られます。墨氏の兼愛は、之と相遠しないやうに見えますが、何故に墨子の兼愛は仁と謂ふことが出來ないので御座いますか』と。○先生曰、此亦甚難言、須是諸君自體認出來始得云云。彌漫は、はびこりひろがること。周遍は、あまねきこと。流行發生は、ゆきわたり行はれ、おこりうまれること。漸は次第順序を以て漸次に進むこと。冬至、一陽生じ云云。冬至十一月は、一陽生じ、周易にて䷗地雷復とし、十二月は䷒地澤臨とし、

正月は䷊地天泰とし、二月は䷪雷天大壯とし、三月は䷪澤天夬とし、四月は䷀乾、六陽卽ち純陽の卦とす。五月夏至に一陰生じ、䷫天風姤とし、六月は䷠天山遯とし、七月は䷋天地否とし、八月は䷓風地觀とし、九月は䷖山地剝とし、十月は䷁坤、六陰卽ち純陰の卦とす。十一月冬至に、一陽、下に生じて、漸次に陽長じ、四月に至りて六陽卽ち純陽と爲る。五月夏至に、一陰、下に生じ、漸次に陰長じ、十月に至りて六陰卽ち純陰と爲るなり。發端は物の起るはじめの端。生意は生ずる意。兼愛して差等無し。孟子滕文公上篇に、『愛に差等無く、施すこと親より始む』とあるに本づく。孝弟は仁を爲すの本。論語學而篇に、『孝弟は其れ仁を爲すの本か』とあり。裏面は內面なり。」先生は曰はれた、『此事も亦、言語を以て說くことは甚だ難いのである。是非とも諸君が自身に自分の心身に體驗して始めて其趣が了解せられるのである。仁は造化が萬物を生生して息まざるところの理であつて、天地の間に遍く行き渡り、處として此理卽ち仁で無いところは無いのであるけれども、此理が流行し發生するにも、亦只だ一箇の順序が有つて漸漸に進むのである。それ故に生生して息まないのである。たとへば冬至の節に一陽が生ずるが如きも、必ず一陽が生じてより後に漸次に陽が長じて、遂に六陽卽ち純陽に至るのである。若し初に一陽が生ずることが無かつたならば、どうして六陽に至ることが出來ようぞ。陰も亦同じことである。一陰始めて生じて、漸次に進んで六陰に至るのである。漸次に進むのであるから、それ故に一つの發端の處が有るのである。一つの發端の處が有るから、それ故に生ずるのである。生ずるのであるから、それ故に引きつづき引きつづきて息まないのである。之を木に譬へて見れば、木が始めて芽を出すのは、卽ち木の生生の意の發端の處である。芽を出して、然る後に幹が出來、幹が出來て、然る後に枝を生じ、それから葉を生じ、然る後に引きつづき引きつづきて生生して息まないのである。若し芽が無かつたならば、どうして幹が有り枝や葉が有らうぞ。芽を出すことが出來るのは、必ず下に一箇の根が存在してゐるからである。根が有るので始めて生ずることが出來るのであつて、根が無ければすぐに枯れてしまふのである。根が無かつたならば、何によつて芽を出さうぞ。父と子と、兄と弟との間の愛は、卽ち人心の發生する發端の處であつて、たとへば木が芽を出すが如くである。父と子と、兄と弟との間の愛よりして、段段に發達して、人民に仁德を施し、併せて萬物を愛するは、卽ちたとへば木が幹を發し枝を生じ葉を生ずるが如くである。父と子と、兄と弟との間の愛が本であつて、漸次に人民萬物に推し及ぼすのである。然るに墨子は、有らゆる物を同じく愛して差別等級無く、自分の父子兄弟を、途行く人と同樣に見做すのである。これは卽ち自分で發端の處を無くするのであつて、芽を出さないのである。卽ち彼には根の無いことが知られるのである。卽ちこれは引きつづき引きつづきて生生して息まないものでは無いのである。どうして之を仁と謂ふことが出來ようぞ。論語にも、「孝

弟は仁を爲すの本である」と曰つてある。仁の理は、心の內面より自然に發生し來るものである。外面から强ひて附け加へて出來るものでは無いのである。儒者の仁は、親しき者と疎き者と、邇き者と遠き者とに就いて、自然に差等が有るのであるが、墨子の兼愛は、その差等無く、たとへば己の親も人の親も、己の兄弟親戚も人の兄弟親戚も、同等に看做すのである。親しき者より推して疎き者に及ぼし、邇き者より推して遠き者に及ぼすは、人の自然の性情に本づきたる者である。親しき者も疎き者も、邇き者も遠き者も、同等に見做すは、人の自然の性情に悖りたる者にして、終に破綻を免れざること、言を待たないのである。

問。延平云。當理而無私心。當理與無私心。如何分別。先生曰。心卽理也。無私心卽是當理。未當理便是私心。若析心與理言之。恐亦未善。又問。釋氏於世間一切情欲之私。都不染著。似無私心。但外棄人倫。却似未當理。曰。亦只是一統事。都只是成就他一箇私己的心。

右元靜所錄

〔訓讀〕 問ふ、『延平云はく、「理に當りて而して私心無し」と。理に當ると私心無きと、如何か分別せん。』先生曰はく、『心は卽ち理なり。私心無きは卽ち是れ理に當るなり。未だ理に當らざれば便ち是れ私心なり。若し心と理とを析ちて之を言はば、恐らくは亦未だ善からざらん。』又問ふ、『釋氏は世間の一切の情欲の私に於て、都て染著せず。私心無きに似たり。但だ人倫を外棄す。却つて未だ理に當らざるに似たり。』曰はく、『亦只だ是れ一統の事なり。都て只だ是れ他の一箇の私己の心を成就するのみ。』

右は元靜の錄する所

〔註解〕 問、延平云、當理而無私心、當理與無私心、如何分別。延平先生は、姓は李、名は侗、字は愿仲。この語は、延平答問に見ゆ。論語公冶長篇の朱註にも、『愚、之を師に聞く、曰はく、「理に當りて而して私心無きは則ち仁なり」と』とあり。澄は問うた、『延平先生の言に、「理に當りて而して私心無し」と曰つてありますが、理に當ると私心無きとは、如何に區別せば宜しう御座いますか』と。○先生曰、心卽理也、無私心卽是當理、未當理便是私心、若析心與理言之、恐亦未善。先生は曰はれた、『心は卽ち理である。心の外に理は無いのである。それ故に、私心が無いの

は、卽ち理に當つて居るのである。未だ理に當らないのは、卽ち私心である。若し心と理とを分つて言ふならば、恐らくは亦未だ宜しくないのであらう』と。○又問、釋氏於世間一切情欲之私、都不染著、似無私心、但外棄人倫、却似未當理。染著は染汚執著なり。外棄は度外にし放棄する也。」澄は又問うた、『佛者は、世間の一切の情欲の私に於て、すべて脫然として遠離し、染汚執著しないのは、私心の無いものの如くであります。但だ父子君臣夫婦等の人倫の道を度外にし放棄して顧みないのは、却つて未だ理に當らないやうに思はれます。して見ると、私心は無けれども未だ理に當らぬ者も有るらしく思はれますが、如何で御座いませうか』と。○曰、亦只是一統事、都只是成就他一箇私己的心。一統の事は一つ事なりとの意。」先生は曰はれた、『佛者が世間の一切の情欲の事に染汚執著しないのも、人倫の道を度外にし放棄するのも、亦、只だ畢竟一つの事である。すべて只だ彼の一種の私己の心を成就し、自分の滿足を得んとする私心に過ぎないのである』と。○施邦曜曰はく、『看來れば還た只だ是れ私心無きを主と爲す。心、私無ければ、自然に理に當る。釋氏の未だ理に當らざるも、亦是れ他、出入生死の上に在りて見を起せばなり。所以に究竟、一個の私己を成し得、位育の事業を成すを得ず』と。○以上は陸元靜の錄する所であつて、凡そ八十條あるのである。右元靜所錄は、一本には、『右門人陸澄錄』に作る。

既刊書目

大應大燈徹翁三祖法語　價五〇錢　送二錢
白隱禪師兎專使稿　價三〇錢　送二錢
大覺禪師坐禪論　價五〇錢　送二錢
大覺禪師注心經　價五〇錢　送二錢
普照禪師修心訣　價五〇錢　送二錢
眞心直說　價六五錢　送四錢
傳習錄註解　卷上一　價七〇錢　送四錢
同　上　卷上二　價一圓　送六錢

近刊書目

拔隊禪師鹽山假名法語
傳習錄註解　卷上三

昭和九年十二月十五日印刷
昭和九年十二月二十三日發行　定價金壹圓

著者　公田連太郎　東京市世田谷區上馬町一丁目七六二
發行者　松島通雄　東京市京橋區銀座西八丁目五
印刷者　栗原晃　東京市京橋區銀座西八丁目五
印刷所　民友社印刷所

東京市世田谷區上馬町一丁目七六二
發行所　洗心書房　振替口座東京七七四四四番
東京市神田區神保町一丁目一
發賣所　上田屋書店

製本　高橋製本所

361
526

終